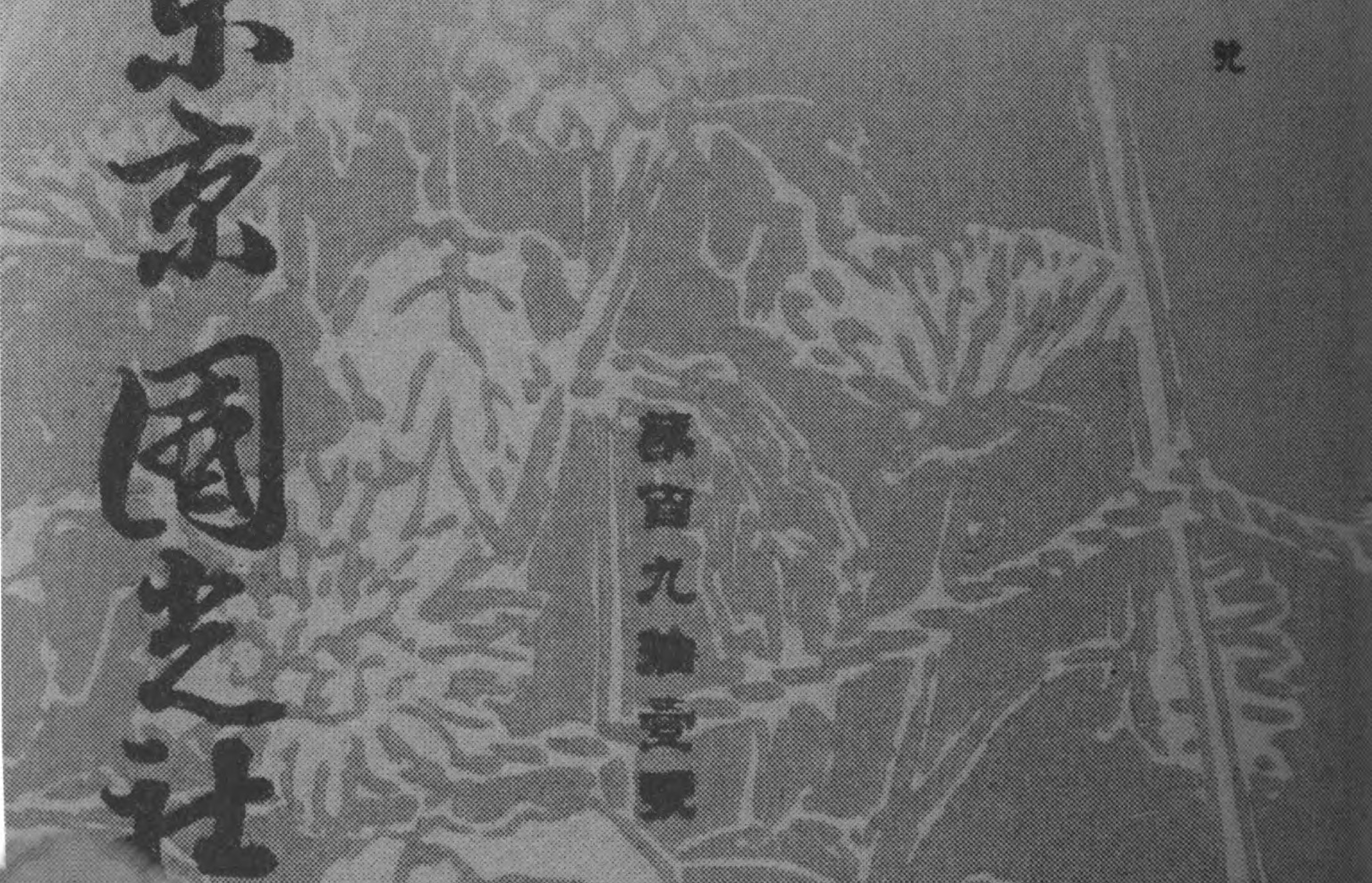
明治三十二年十月二十日發兌

女鑑



第百九拾壹號

東京國光社

女鑑第百九拾壹號

目録

間光興の妻



思慮

婦人は思ひ多し。げに、思ふ事は夏草の、いとしげかれど、あだし草のあだし思ひのみしげくして、眞に思ひ、眞に慮かる事少なし。思慮とは、よく、物々思ひ、よく、之を考へ、わきまふるを云ふにて、婦人の思ひとは、多く神經を云ふか。西洋には、婦人の神經の敏きを貴ぶといふ。ある貴夫人、いたく逆血性なりけるが、ある家の舞蹈會に招かれ、至りけるに、其の家の客室に、いみじう、薔薇さしありたり。夫人、りの室に入るや、其の香りのいみじさに氣絶したり。人々、之を見て、上を下へとさやきけるが、一紳士云ふやう、夫人は、日來、逆血性にて、薔薇の花の香氣には逆血すと聞けり。さしも、此の室の薔薇のいみじさに逆血せるにはあらずやと、主人おどろき、かれは、皆、造花なり。香りはあるにあらねど、神經を害せるにもやと

て、之をとりさり、さまゞに介抱しけるに、夫人、やがて、眼を開らき、つねに復りけり。之、實に造花を、まことの薔薇と一途に思ひ、其の香り、いみじう思ひて、かく氣を失へるなり。流石に、貴夫人の神經なりとて、人々ほめたゞへけりとなん。實にをかしき事にて、之を、誠に、貴夫人の精神とせば、憶病者も、皆、貴夫人の價値あるものなり。夜半、浴衣のはしあるを見て、幽靈と思ひあやまり、おどろきて、忽ち、聲を放ち、墓場より、燐火の飛び出でたるを見て忽ち、人魂と見て、氣を失ふのたぐひ、皆、神經なり。かやうなるを憶病と云ひて、思慮なき人の甚しきものとす。しかるに、かやうなる神經をも思ひと云ふ人あり。又は、人の、何事か云ふをるを見て、我事を云ふよ。或は、彼は、我をそしる。我を憎くむ。彼は我れに何せんとする。かくせんとするなど、それか、あらぬ事を案じ推す。之を邪推と云ひて、女子には、尤も多き思ひなり。之、また、心なき人の思ふ思ひなり。其の他、人をそねみ、人をうらやみ、又は、くよくよと益なき事に、心を煩はす。女の思ひ、大方は、益なき事にて、神經を害し、心をいたむる、甚だ多し。おろか

なる思ひなり。いたづらなる思ひなり。むしろ、あしき思ひなり。かりにも思ふべからざる思ひなり。思慮とは、世の道、人の理を思ひ、善か、悪かをかんがみ、又は、理か、不理かをはかり、熟思默考して、義に背かず、理にそむかず。而して、利を思ひ、益をはかり、何事も、世の道をふみ違へず。以て、世を利し、人を益し、已もまた、損せざらん事を思ひ慮るなり。たとへ、あしく思はずとも、たゞ、くよくよと思ひ、千々にくだくるのみにては休むに似たるのみ。否、中々に、脳を損じ、身体を害す、ねぶりたるにはしかず。婦人、誠に思慮ある婦人とならんと欲せば、世の道を尋ね、人の理を問ひ、昔をかんがみ、今を見、大利を思ひ、大益をはかり、而して、已を持すべし、思慮ある人は、惑はずと云ふ。婦人、よく思ひ、よくかんがみ、區々たる心を廢して、迷はず、惑はざる思慮を保ち、國の寶、家の寶たる、良き妻、賢き母になり給へよかし。





論説

日本女子今後の覺悟（七）

三輪田眞佐子

婦女の、日夜注意して忘るべからざるものは、身体の强壯ぞかし。勿論、今日は、識者の示導、茲に出づればにや、世人、稍、婦女も、男子と共に体育の必要を感ずるものゝごとし。されど、その實行に至りては、未だ著しき功驗ありと認むるに足らず。それは、我國の婦女には、体育の實行上、障害となるべき事情の存するにはあらざるか。若し、果して然らば、今後、女界のため、その障害を除かざるべからず。

れのれの思ふ所に由れば、今日、婦女の体育を妨ぐるものは、舊來の体育上、適當ならざる習慣を改良する能はざると、体育の方便は、女徳を損傷せん結果を生ぜんも知るべからずとする懸念の二者こそ、其の主なるものならめ。以下、その眞僞を正さん。

凡そ、何なる文明國にても、その風儀、舊慣の良からざるものなしとせず。我國には、古來、君子國の名を負ひて、人情、風俗いとめでたしと雖、物變り星うつるにつれて、多

少の改良すべきものあるは、固より、さるべき理にこそ。わきて、女界の事につきては改良すべきこと、決して少なからず。唯、つねに恐るゝ所は、改良の名に恍惚として、我天下無比の良風をも滅盡せしめんとするもの、世に出でんことを。偶々、かゝる論者出でんか。その反動より、改めばやと思ふ女風も、遂に守株せんとするに至る論者の、亦、出んこそうたてけれ。おのれは、御國のため、亦、同胞の女性のため至道と信ずる標準を以て、その採るべきを採り、その棄つべきを棄て、美を美となし、理を理とせんとなん。

そも〳〵、我國は、古來所謂、農を以て、天下の大本とする農業國なりけれど、固より、百姓の婦女は、兄弟、姉妹、打ちむれつゝ、田畝に出でゝ、桑を摘み、時としては、泰平を歌ひつゝ、河畔に、草を刈り、あるは、土塊をうちて、種まくなどしければ、春陽、その体を肥やし、秋氣、その心を養ふを以て、わざと、体育など言はずも、おのづから、强健なりき。亦、藩士のごときは、更なり。坐作進退、かならず、柔弱ならざるを以て、勢ひ、壯全なりき。その他、財產家、工商家などの婦女も、酒掃、應對の任に忙しきため、別に運動を行はずとも、自然健全なりき。更に、小女などは、綠蔭に、鞠をつき、庭園に、羽を遊び、天眞爛熳として、成育するより、無病を以て、常となしけり。

然るに、維新以來、社會の面目一變して、昔日、農を業とせしもの、今日、軍人となるあり。官吏となるあり。あるは、往年、山河を跋渉せし、健足も、近時、汽車に乘り腕車に眠る樣になりき。おのれ、幼きころ、西都より、籠にて、東海道を過ぎ、東都まで來りけるが、いまだ、見なれぬ景色ながら、旅の疲におきて、さまで樂しからざりき。然るに、今年、夏休を以て、浪花地方へ漫遊せしが、今昔の感、言ふに忍びざるものありけり。

斯く、天然の山川草木は、棄せずして、國民に適當なる運動を促し、亦、日時の家業は、知らず識らずの間に身体の活動を導きけるも、一朝社會の文物、一變しけるより、あはれ、所謂文明の利器なるものは、悉く、人の勞に代ふるものなれども、一得一失は、爭ふべからざるものなれどにや。出づる車あるものは足の運動する機會を失ひ、自ら、續くに機械あれど、以て、手の運動を欠くに至るべし。勿論今日の人事萬般は、われ等の知力を養ふに足らんも、体力を養ふ能はざるべし。茲に於て、人は、故ら適當なる運動法を設けて、体育を謀らざるべからず。亦朝夕の動作に注意して、強健の道を講せざるべからざるなり。

姑と嫁

九龍子

家庭ほど、人の一生に關係深きはあらし。世の諺に云はゆる、十歳で神童、十五で才子二十歳過ぐれば平凡の人となるやうに、人の心ざまは、神出鬼沒、しばしの間に、見違ふばかりうちかはるものなりとは云へど、確に栴檀は二葉より馨しく、家雀は百歳まで舞を忘れず。况して、人たる者は、たとひ遺傳にも因り天稟にも緣ること尠からざるにもせよ。主として親近せる人物に摸び、又周圍の境遇に順ひゆくものにて、孔子も既に性相近し、習相遠しと曰ひき。随つて習慣の本となり、はた摸擬順應の原始となる家庭の勢力や、影響や、まことにこよなく強大なるものなることを感じ得らるゝなり。而して、その家庭の中心となる者は、實に婦人にして、即ちその母と、又その祖母となり。さらに、之を言ひ換ふれば、所謂姑と嫁との二人となす。されば姑たる人、嫁たる人のれのがじゝ品位を保ち、行狀を愼しみ、一個の婦人として、充分の資格を備へ居るべきことは、云ふまでもなし。その姑と嫁と兩人の間の風儀交際を、かたみにいたく謹しみ合ひて、うるはしう圓やかに執り行ふことこそ大切なれ。

然るになにごとぞ、世間大方はかゝる尊き位地に立ち居り、かゝる役目を荷ひつゝあることをきづかでおるにや。さてはおろそかにさけしみゐてにや。とにもかくにも。姑と

嫁とのなからひいとゞ見苦しう、淺間しう、なさけなきことのみぞ多かる。親子兄弟親族の間にまで、破綻を惹き起し、甚しきに至りては、骨肉相離れ、夫婦相別れなどする者さへあり。畏しく忌しき事件、をり〳〵耳にも入り目にも留りつ。世道人倫の日に〳〵すたれゆくらんさま、口惜しとも口惜し。なにごとぞ、温く、又樂しかるべき家庭の寂しく荒れ亂れたるもの、世の中にいとゞ多かるは。噫、之を鎭むるに足る名案はなきか。噫、之を救ひ上ぐべき妙法はあらざるか。

そも〳〵をみなは、神經過敏にして、濫りに些細なる事物に執着し、外飾に拘泥し、又内秘を揣摩し、おのづから、早計短慮邪見となり、我慢となり、遂に他を嫉み、人を誹るに至る者なり。世間の交際、近隣の往來、永しなへにうちつゞくはまれなるを、まして、常に一家に在りて食住を同じうし、坐臥を共にする、接近この上なき、姑と嫁とのなからひにおいては、互に我儘出で易し。さるに彼等の思ふやうにならぬところより、不平も起り、小言も出で來りつ。又善き性よりも、惡しき質をのみ感づきて、こゝに猜疑の心を生じ、知ず識らず、相隔てそむるものから、うち解けず、うち和がず、果てはあるまじき嫉みをもなし、誹りをもなすに至り、世界にまたとなき樂園に、柔らかなる水の瀬が奔逸して、固れる、土地をも穿ち、剛やかなる巖石をも覆へすを見る。思へ

む止むを得ざる有樣なるかな。かの、我儘と邪見とは、げに〳〵畏るべき惡魔と謂はざるべからざるなり。若し、この二つの惡魔を驅逐することを得ば、庶幾くば、家庭の波靜かにして、無上の樂園、此の處に顯現れぬべき歟。

まづ姑はいかゞ心得べきにや。余の考ふる所にては、姑たる者が嫁に對しては、たとひ我が子に娶したる者なればとて、決して、我が生みたる子をあしらふやうの心得にてあるべからず。實際他人の子なれば、全く、他人として心得べし。我儘出づるは、元來、他人の子を、己が子の樣に合點して、之にあまへ、之れになづかんと爲すに依る。而るを此方はどれほど善き性の者なりとも、その思ひやり、そのあどけなさとても眞實己が生み落したる子の如くに成り行く能はざるゆゑ、ふと不平の念の萌え立つなり。若し、他人と共に明し暮し、他人と共に食事すと思へば、氣儘も出でず愚痴も零れざるはずなり林子平病革るや、そを看護したる姪、日下久子へ與へし教訓、能く、余が意に符合せるものあり。

夫れ世の中は客に來りしと思へば、世話も苦勞もなし。夏の熱さも、客なればたしなまねばならず。冬の寒さも、客なればこらへねばならず。心にかなはざる食物も、客なればほめて食はねばならず。親子兄弟いよ〳〵以て合客なれば、程よくあしらふべ

し。

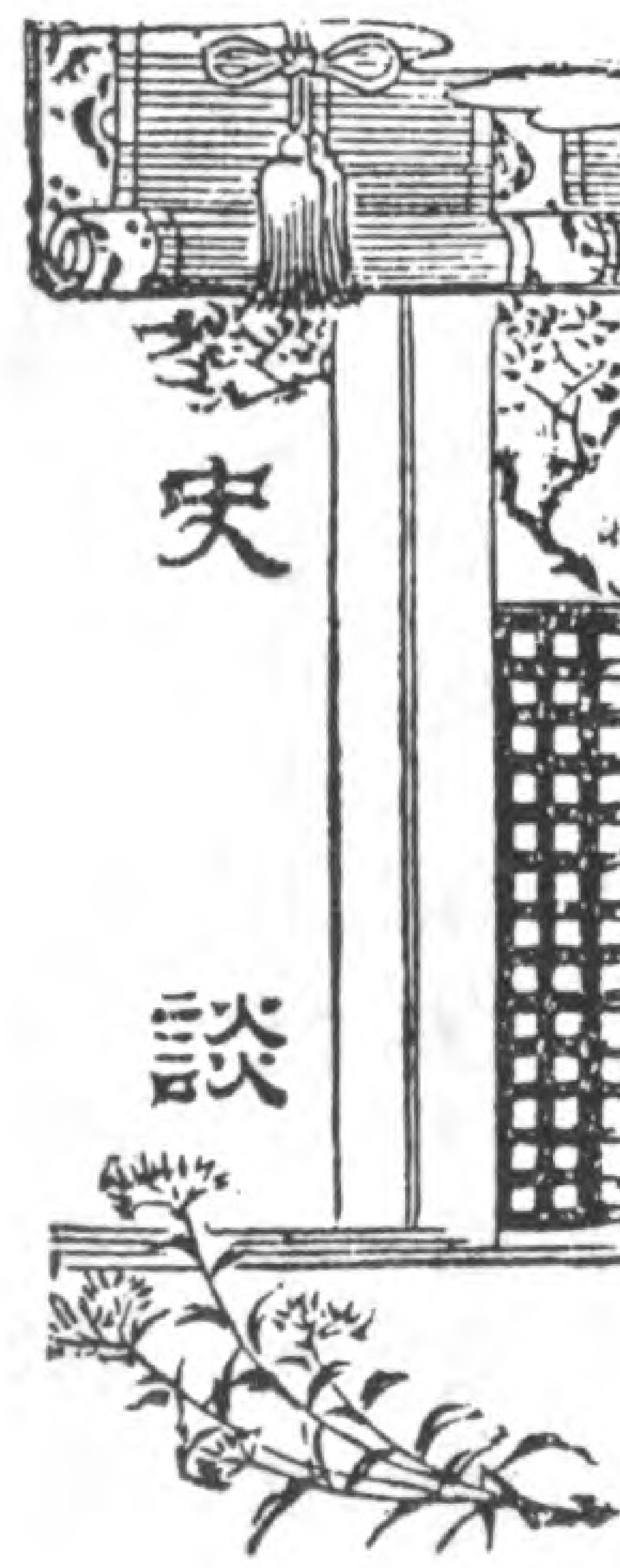
されどこればかりにては足らじ。苟めにも、己が生みし男子の妻となりて、既に親子の縁を結びつるその男子の守は云はずもがな。已れの夫、又、現に、已れ自身をも看護りくれ、はた孫を産うけて、之を生ひ長たしめ、以て已れ等が承け繼ぎし家を襲ひつゝ、千歳萬歳に傳へて、いよよ繁昌せしむる功勞を想ひて、その恩のために、之を敬ひ、その義のために、之と睦じうし、その敬と、その愛とを以て、その嫁を執りなさば、蓋し過なきことを得べけんなり。委しく云へば、退いては、之を他人の子と心得て已が氣儘を制し、進みては自家の相續者と覺りて、そを寵愛しつゝ、一方においては敬禮を致し、他方にありては和睦を務めんこと是れなり。消極と積極と、相和し相應じて、眞に圓滿なる妙用を現し得ること、余は、是れ之を天下の常理と信じて疑はず。

次に嫁たる者の心得は如何あるべき乎。余は、又消極の方にては、姑に向つての如く、飽くまでも、その姑を他人と思ふべく、同時に積極の側にては、深く、已が夫を愛するの情よりして、夫のために、夫に代りて、夫と一つ心になりて、又、懇ろに、已が夫の親として、かしづき、更に歸ぎし家を、已が永世の住み處と定めつ。隨つて、已れのために、はた、已れの子孫のために、誠に之を自家の先繼者、父母、祖先と悟りて、一面にては

虔んで之に恭敬の意を表し、他の一面においては、敦く、之に親愛の情を寄せ、その意とその情とをもて、並び進みなむ、以て中和の大道を履み行ひうべく、親んで昵まず、敬ひて疎まざるうちに、必らずや藹藹春の如き家庭を生み出さん。余はこの斷言の當に誤らず實現せらるべきことを、神明に誓ひて可なり。

親子別居の風、博く西人の間に行れつゝありと云へど、家庭の意義より考ひても、余輩が心情より省みても、又、我が國の習俗より慮りても、之を移す可からず、之を行ふに忍びず、又、容易に爲し能はざるべし。よし是ありとするも、若し其の兩者の心得が歪みてあるならば、到底親子の隔離を免るべからず。かくの如きは、余輩極力、之を避くるに勉めざるべからざるなり。

そは別問題として、いかに住み家を遠ざけ、いかばかり居室を隔つるとも、兩者の心得が、余が縷々前にかいつゞりたるごとくならねど、實にせんなきやう覺ゆめる。余はひとへに世の姑たり嫁たる人達の心得正しく、振舞柔和にて、家庭陽陽として緝睦快樂、やがて賢哲の士女を作り上げ、さては國治り天下榮ゆるの域にまでも到れよかしと念じて已まず、願ふらくは、海内の婦女子、余が情を酌み、余が志を察みて、おのもおのもふりかへりみつ、心をも留め、行ひをも改めたまひてよ。



間光興の妻

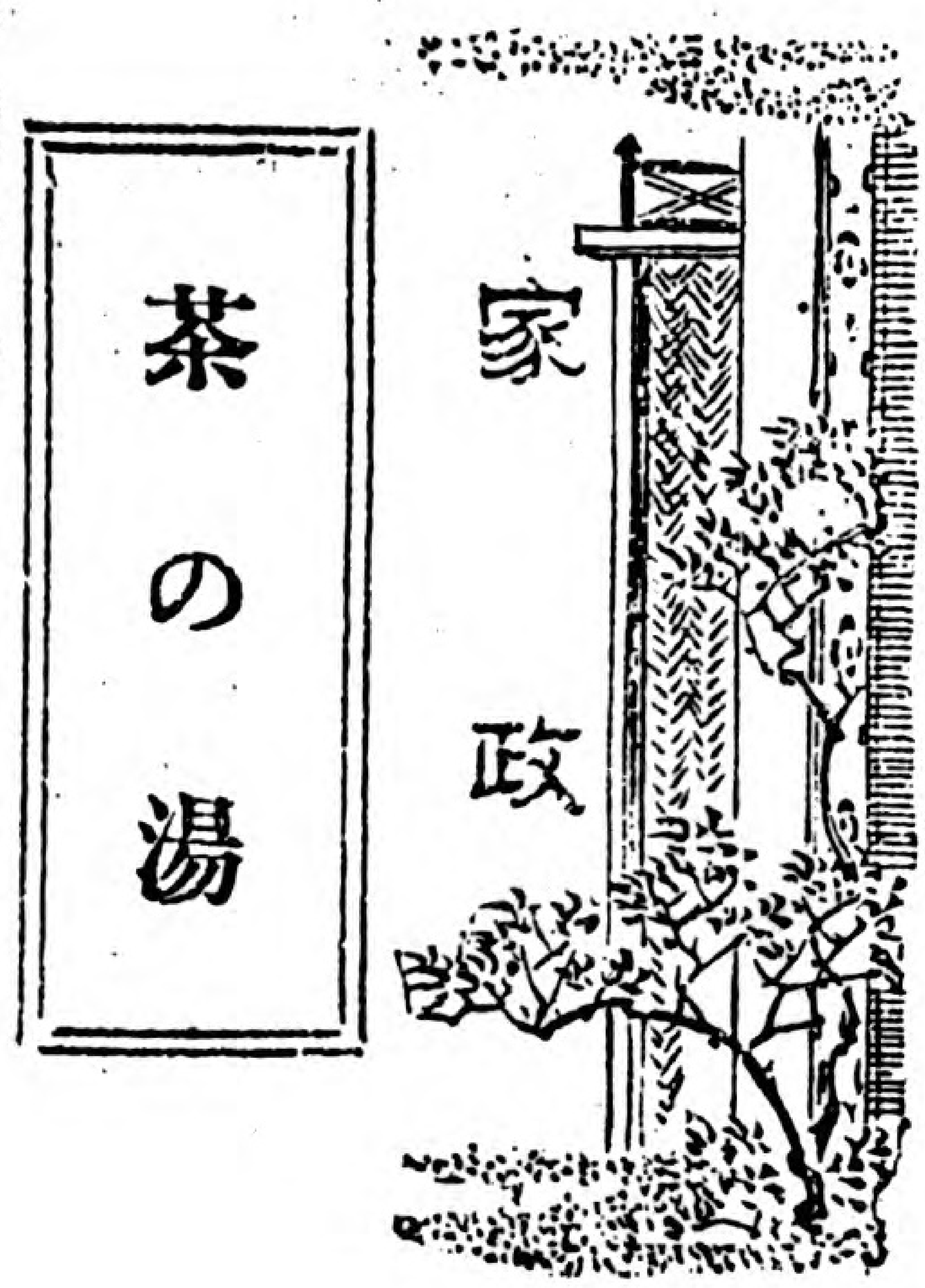
山本正周

淺野長矩の臣、間光興の妻、佐呉といへるは、主家滅亡して後、夫の命を受けて婢となり、吉良の邸に入り込み、何くれとなく、邸内の樣子を義士に通じけり。これより前、義士の面々にも、樣々に姿を變へて、吉良の邸に出入し、また、その門前近く住ひなどして、略略、邸内の地理は別りたれども、いまだ、義英の寢室の模樣のみ、探ぐるに由なかりければ、或日、諸士は、横川宗利の宅に密會して、評議を凝しけるに、光興進みいで、われ、疾くに、妻を彼の邸内に忍び込ませけるが、其の通知によりて、巨細の事を知るを得たりとて、寢室の模樣はしかじかなりと、手に取るごとく說き示しければ、大石良雄をはじめ、義士の面々、且つ感じ、且つよろこひ、愈、討入の計略をぞ定めける。されど、義英は、その頃、おほむね、上杉家にありて、仇を避け、已が邸に在ること希なりければ、諸士も、如何はせんと肝膽を碎き居りけるに、また、光興の妻より、今宵は、義英、事によりて、邸に歸れりとの密書來りければ、此の期を失ふべからずとて、遂に、元祿十四年十二月十五日の夜を以て、吉良の邸に切り込み、年來の大望を遂げにけり。光興は、兼て、妻より、邸内の事、詳しく聞き居りし事とて、打入の夜には、義英に、一番槍をぞ着けにける。かくて、諸士、皆切腹を申し付けられ、泉岳寺に葬られし後、光興の妻は和歌、二首を光興の墓に供し、其の側に自刄して、果てにけるが、年は、やう〳〵、二十七八なりしとぞ。

中江珉山の妻

有馬祐政

北村氏とのみにて、その名明らかならず。珉山は、姓、中江氏、伊賀の人。夙に、京都にいで丶、伊藤仁齋の門に學び、専ら、古學を唱へ、仁齋の成說を發揮せんことを務めと爲し、熾んに宋儒を評隲して、淺見絅齋、三宅尚齋等と、互に門戸を排擠し、相對視辨折せり。理氣辯論、四書辯論の著、此の時に成り、師說に交へて、自己の所見をも詳かに述べたりき。その氣岸高亢にして、放言自適す。寶永年間、大阪天滿街に居て、子弟に講說せり。然れども、その性、苟合を欲せざりしかば、家政、漸く困頓に陷いりぬ。北村氏、この間にありて、堪忍勞苦、いよ〳〵貧しうして、いよ〳〵節を立て、行を潔うし、その賢、普ねく、四隣の賞賛する所となれり。嘗て、その弟なにがし、罪過を犯して、ために、長く、一室のうちに禁錮せられしを、警吏、憐れみて、日暮、潛かに、彼を出して、そが郷里に歸省せしめぬ。北村氏、感喜措かず、輙ち、酒饌を設けて、儲待到らざるなし。なにがし、快樂さの餘り、就て、一宿をなさんとせり。北村氏、心情固より禁ずべからざるあれども、翻思靜慮、斷然、その不可なるを說いて、諭して曰はく、汝今夜、幸いに警吏の蔭補に依りて、料らずも、親族に相見ゆることを得たれば、その恩、既に十分なり。しかるに、汝、一宿したるため、姉、若し喚び付けらる丶こともありなば、汝、何を以て、自明することを得ん。啻、罪を、汝、自身に重ぬるのみならず。又、以て、その吏を累にかゝらしむべけれどとて、强ひて、彼を去らしめたりといふ。嗚呼、善々事理を解し、恩仇を辨じ、而も、且つねづよき情念に、克ち終ふせたる、この北村氏の如きは、眞に、閨門中の女傑と謂はざるべからず。世の婦女子、夫れ、己を省みて忸怩たるもののなきや否や。



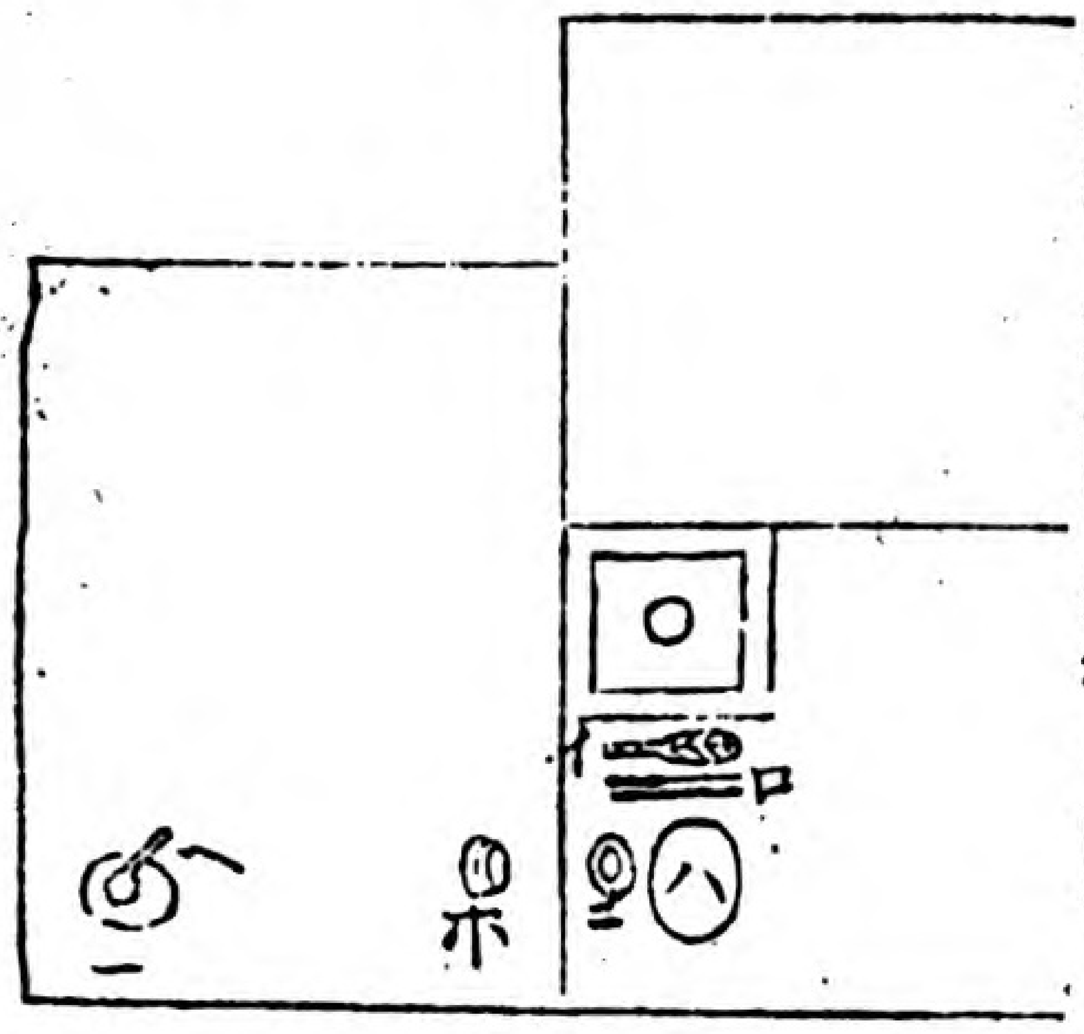
茶禮初學（承前）

孤峰菴祿仙齋不美
關　葦雄

臺目切點前圖及炭大目右手前炭圖

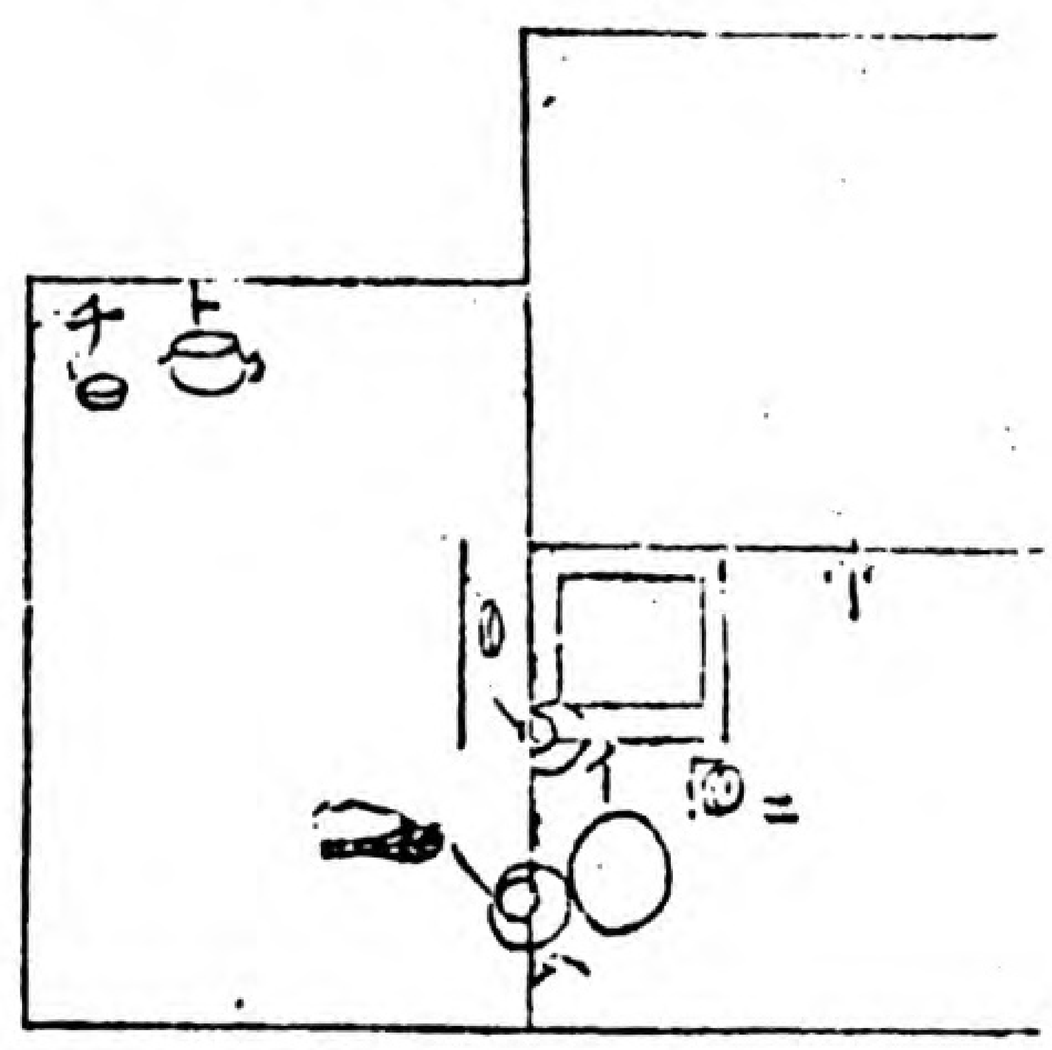
客居五德居方四疊半と同じ

並炭手前の圖



イ　羽箒
ロ　火ハシ
ハ　炭斗
ニ　鐶
ホ　香合
ヘ　灰フルヒ
ト　灰炮烙

第二炭手前の圖



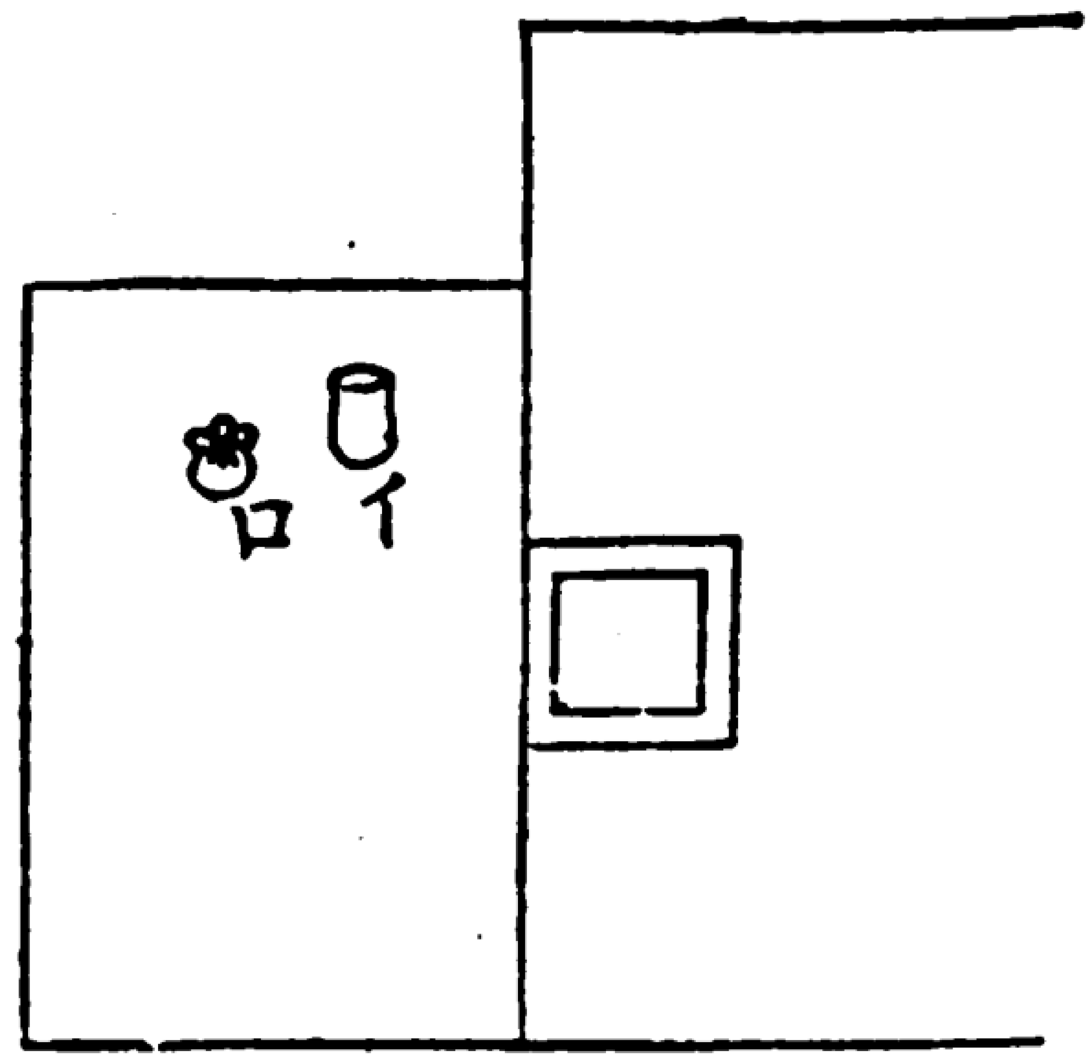
イ　右六灰蒔時
ハ　枝炭假置時
ニ　香合出ス時
ヘ　羽箒ツカヒテ此所
ド　釜
チ　鐶

香合三つ羽は、炭斗の眞を割て置なり。最、眞すぐに置なり。上たる釜は、勝手の方三つ割にして、一つ分に置なり。鐶は、少し流して置と可ニ心得一

註釋、不美曰、臺目、炭手前は、四疊半切の席の炭手前と差違ある事なし。唯、釜の揚け場所と、羽箒、一度遣ひたらむ、炭斗の眞を、香合と割りて、眞直に置と、其の三個なり。若、臺目杜有レ之席は、左の方狹隘にて、釜の上げ卸仕憎きものなり。注意すべし。

爐濃茶第一圖　同上

茶入飾付

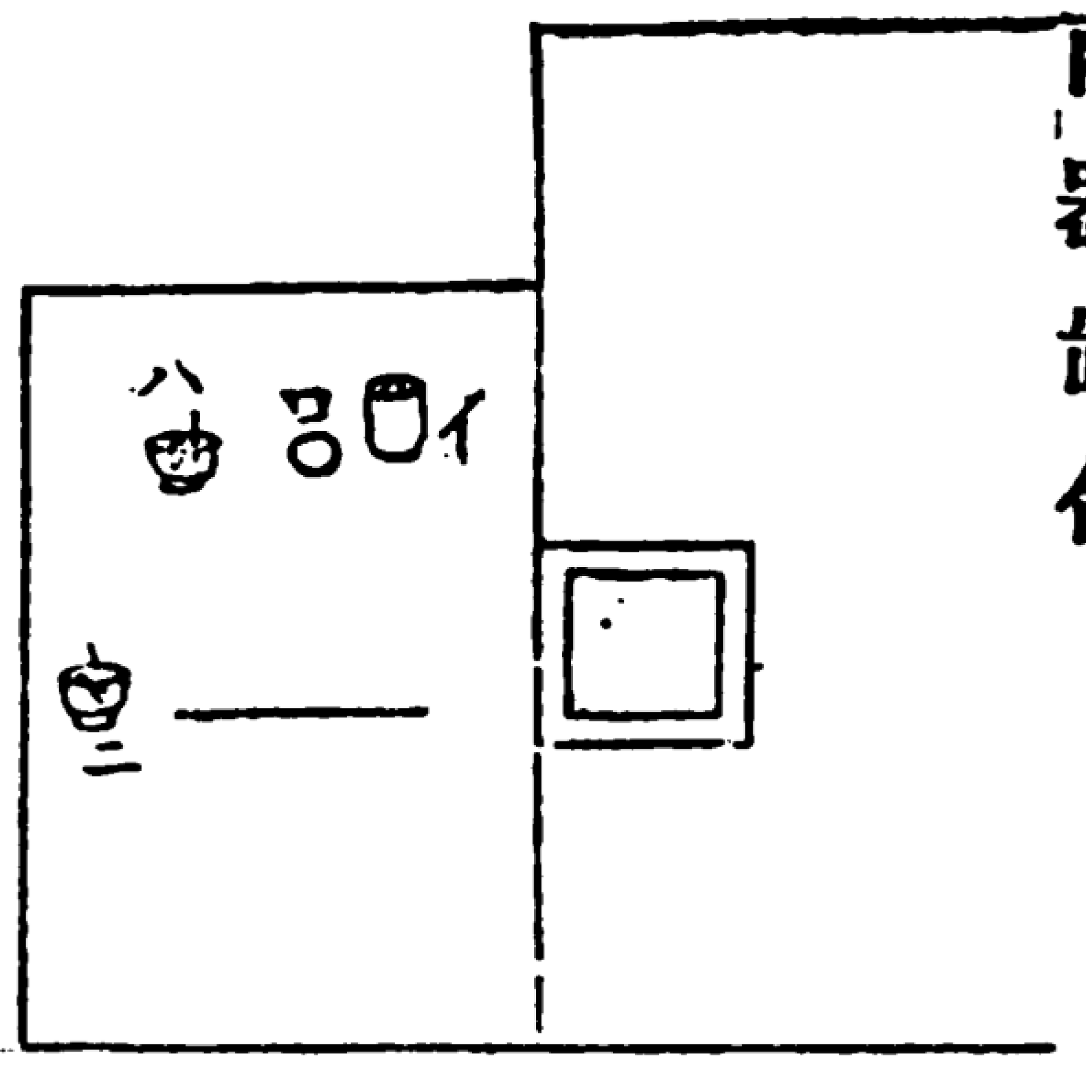


イ 水サシ

ロ 茶入

第二圖

兩器置合



イ 水サシ

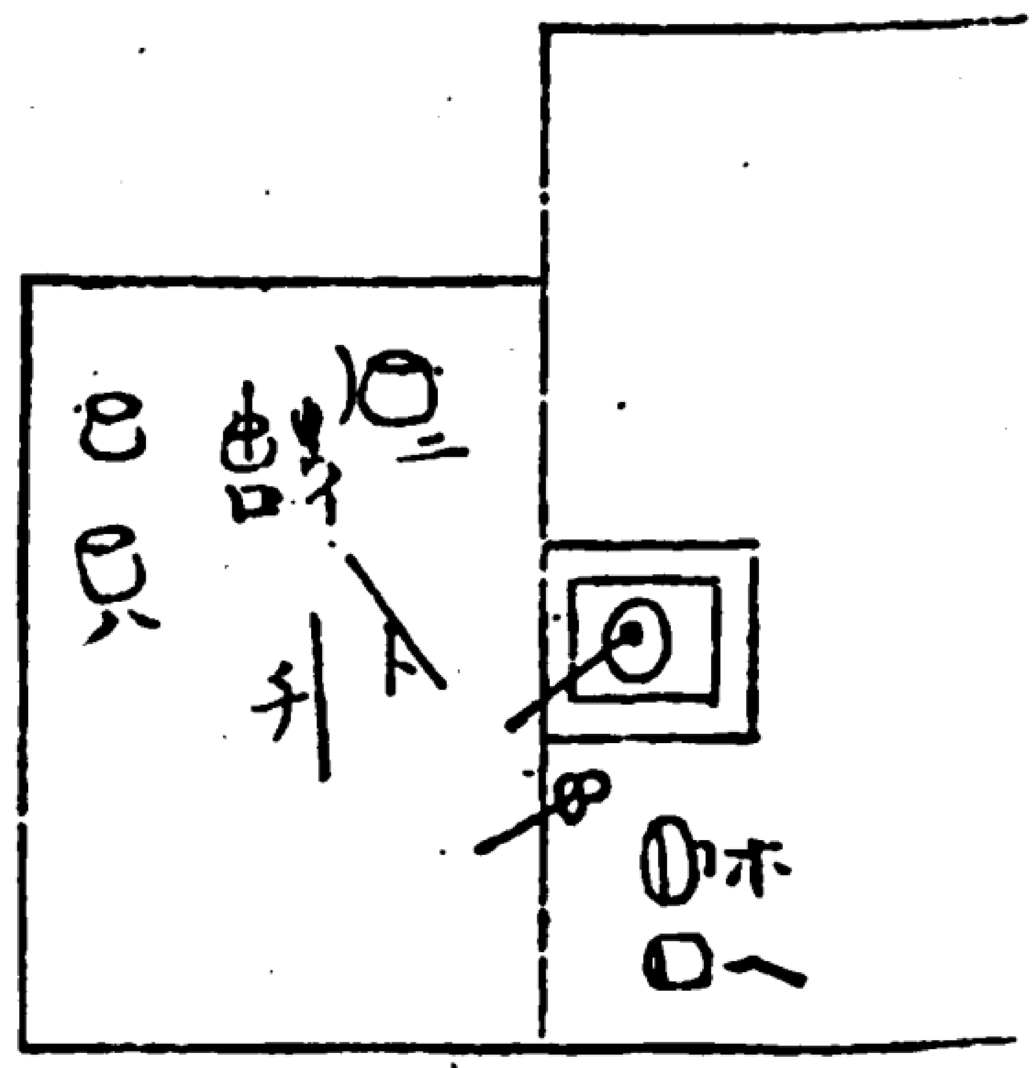
ロ 茶入

ハ 茶ワン

ニ 茶椀假置

茶を點帛紗を添出したる所

第三圖



イ 茶筌

ロ 茶入茶杓

ハ 翫(コボシ)

ニ 水サシ

ホ 茶ワン

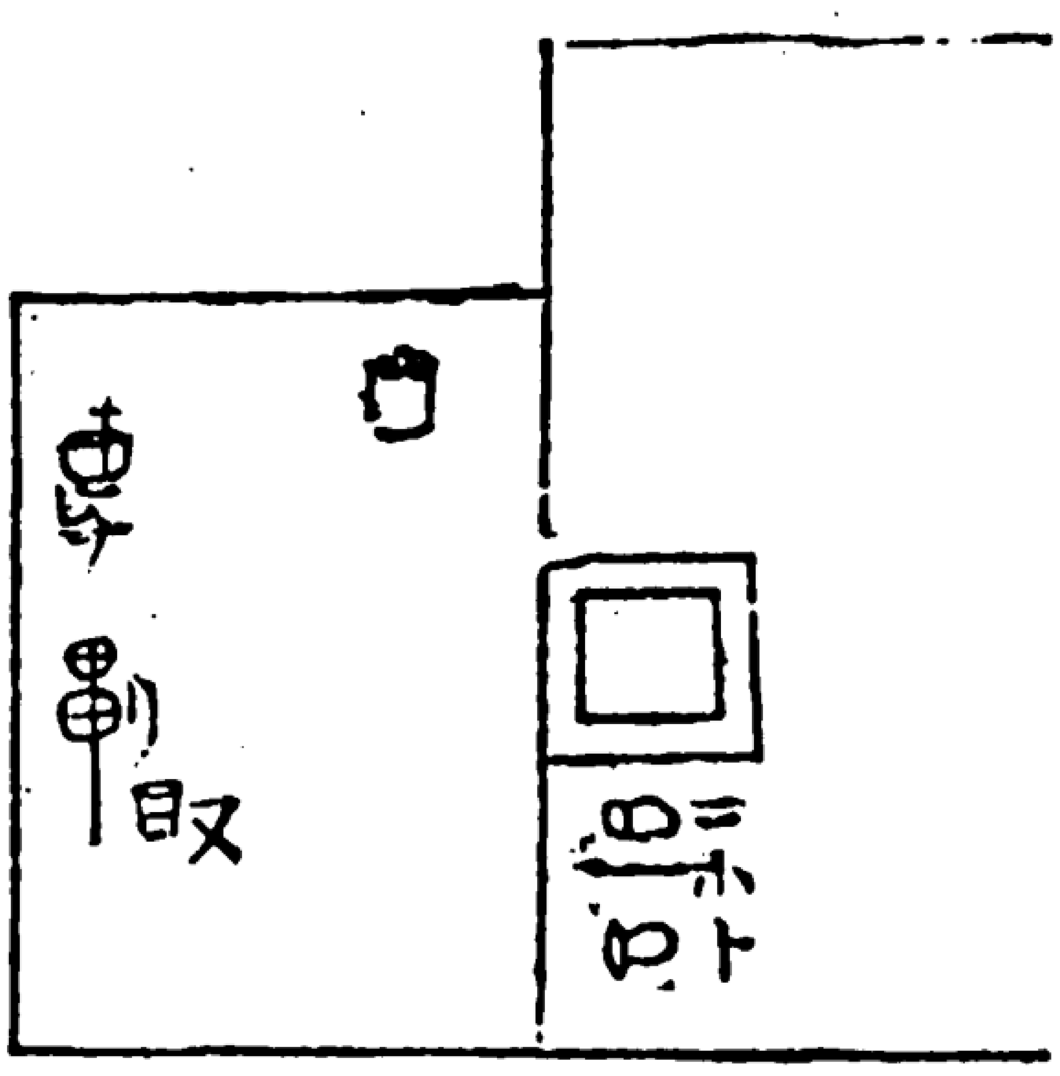
ヘ フクサ

ト 座スルヒザ

チ 茶ワン出シテ後向ヒザ

客方所望の三器を出したる所。茶入、茶杓、袋、客方より返戻する時は、此の順を反對にしたるものなり。

第四圖



ヨ 茶入

ホ 茶杓

ト 袋

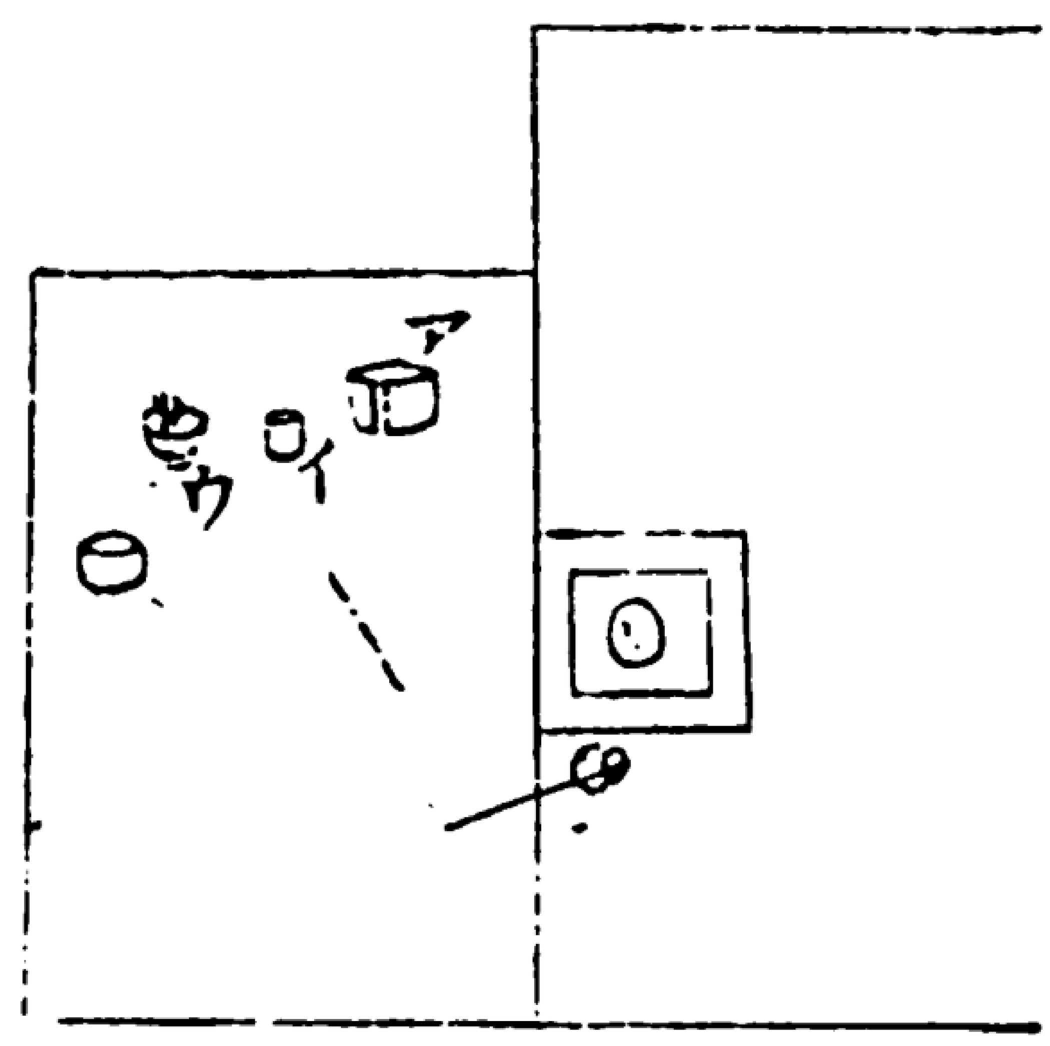
チ 茶椀假置

リ 柄杓翫へメトム

ヌ フタオキ

薄茶點前兩器置合

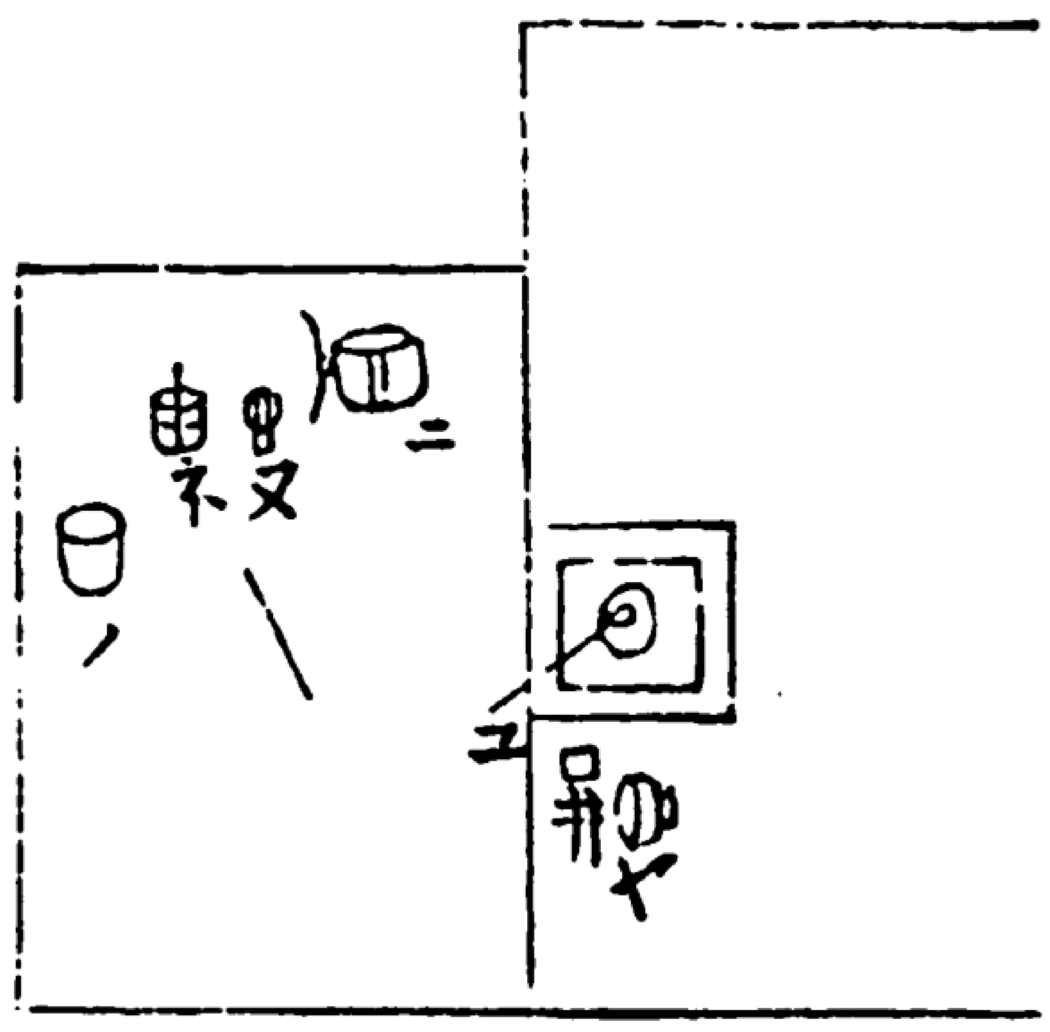
第一圖



ア 水指
イ 薄茶入
ウ 茶碗中ニ茶巾茶筌茶杓

點前茶椀出し所

第二圖



ニ 水指
ヌ 茶筌
子 薄茶入上へ茶杓
ヤ 茶點客方へ出ス所
井 蓋置上ニ釜ノフタ
ユ 柄杓

不羨曰、臺目の濃茶、薄茶の手前は、四疊半點に差違ゐるは、水指の置所、道具、疊を四個に割て客付の方ニ一個分に水指を置、向前は、二個割、眞中に置、則、圖を見て知べし、兩器(茶入茶碗)は道具疊を二個に割、其の眞中を兩器の眞として置付べし。茶入、茶筌も同斷、居前は、爐縁の外隅とあり。臺目柱ある席は、柱を、我躰の眞中と可ニ心得一。茶椀出し、中仕舞して、客方へ向ふ時は、右の方爐縁の外隅を眞にとるべし。

女禮

有住常子

吸物膳出し樣

吸物膳を、兩手にて持ち、左足より、しづかにすゝみゆき、上座の方にすはり、少しばかり、七目にすゝめ置き、三の膳へ向ひ、一すゝみして、すこし前へ引出し、下座へ取のけ置き、其の後に、吸物膳を据ゑ、手先をそろへ、かたよせたる三の膳へ向ひ程よく、前へ引持立なり、中酒の盃、三の膳にわらば、引替たる後、

盃を取て、吸物膳にのせて、三の膳を、兩手に持ち、正面座なれば、左右と、膝を引き、左膝にて立ち、兩足をそろへ、左足より、三足引き、右足にて、下座へ通り、左足より、しとやかにあゆみ、勝手に入るべし。但し、次第により、中酒すみて、のち、主客、盃の貳ある時は、先、肴物を出し、後、吸物を出すことなり。

肴出し樣

中さら、小皿等に、小串、作りみの類をもりて、中酒のさかなに出すなり。是は、膳、又は、びんに据ゑ、持出で、上座に、少しすゝめ置き、吸物膳に向ひ一すゝみして、兩手にて、皿を取り、見斗ひ、吸物膳の内に付け込み、あき膳を持て、前のごとく引き、しつかに、勝手に入るなり。

臨時の客の應接（三）

三石直子

菓子を、客人へ土産にとて、主人より紙を持ち來るべしとの言付あらば、給仕のもの、速に勝手方にゆき、奉書か、粘入か、半紙にても、二枚ばかりに、熨斗包と水引とを、盆の類に載せ持ち出で、之を座敷の末座におき、さて菓子をさげて、つゝむなり。其の包みやうは、先づ水引を、紙の下へ一文字に敷き、紙をすみかひに二枚重にして、其の眞中へ躰裁よくとり、やんはりとつゝみ、水引にて結へ、熨斗包を挾み、主人の前に持ちいで、差圖をうくべし。主人より、御供へ渡せよとあらば、其のまゝ持ちゆき、御菓子損せぬやうになど頼みて、供のものへ渡し、盆をひきて、又座敷へ出で、渡しゝ由を、主人に申じあぐべし。包に用ゐる水引は、赤き方を右に、ひきほどきに結ぶべし。

庭前の花を、客人に送らんとする時、主人より、其の事を言ひいでたらば、給仕は勝手方にゆき、花盆、なくば酒器に用ゐる廣蓋にても、鋏鋸を添へて、持ちいづべし。主人より命ありて、給仕の者、伐らん

ともる時には、花盆を掾の片角へよせ置き、挿花などに用ゐらるべき様子ならむ、餘り大からぬ、眞になるべきおもしろきさうなる枝に、大小三本ほど見つくろひ伐りそへて、花盆へ載せ、客人の側の掾へ持ちいで、根元を向へむけ、さて、主人に對ひて、不調法ゆゑ如何など、申しあぐべし。此の時、客人より會釋などありて、然なくも、主人より、其にてよし御供へ渡せなどあらば、花を掾の片角へおき直し、鋏鋸をとりて勝手方へ下り、紙二三枚と、熨斗包と、水引二三把とを持ちいで、掾にゆきて、右の紙を二ッに折り、花の根元をつゝみ、水引にて一所二所、見斗にて確と結へ付け、熨斗包をはさみ、花盆に載せ、遣ひ殘りの紙水引を片角へ寄せおき、供の者の前へ持ちゆき、御土産に御持ち歸りの、など言ひ聞せて、供に渡し、又渡しゝ由を主人へ申しあげ、さて、掾なる紙水引等を勝手方へさぐべし。

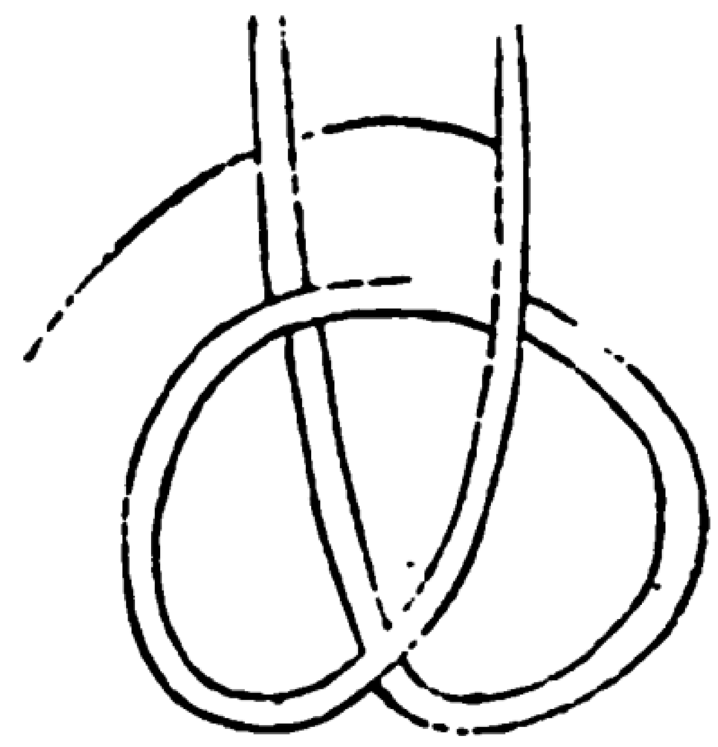
最初、枝を伐る時には、座敷より見通しの枝を、伐らぬやうにすべし。又包紙を、折形する時は、先づ、花の根元をこよりにて、二所ほど結へ、其の上をつゝみ、水引にて一所、ひきほどきに結ふべし。

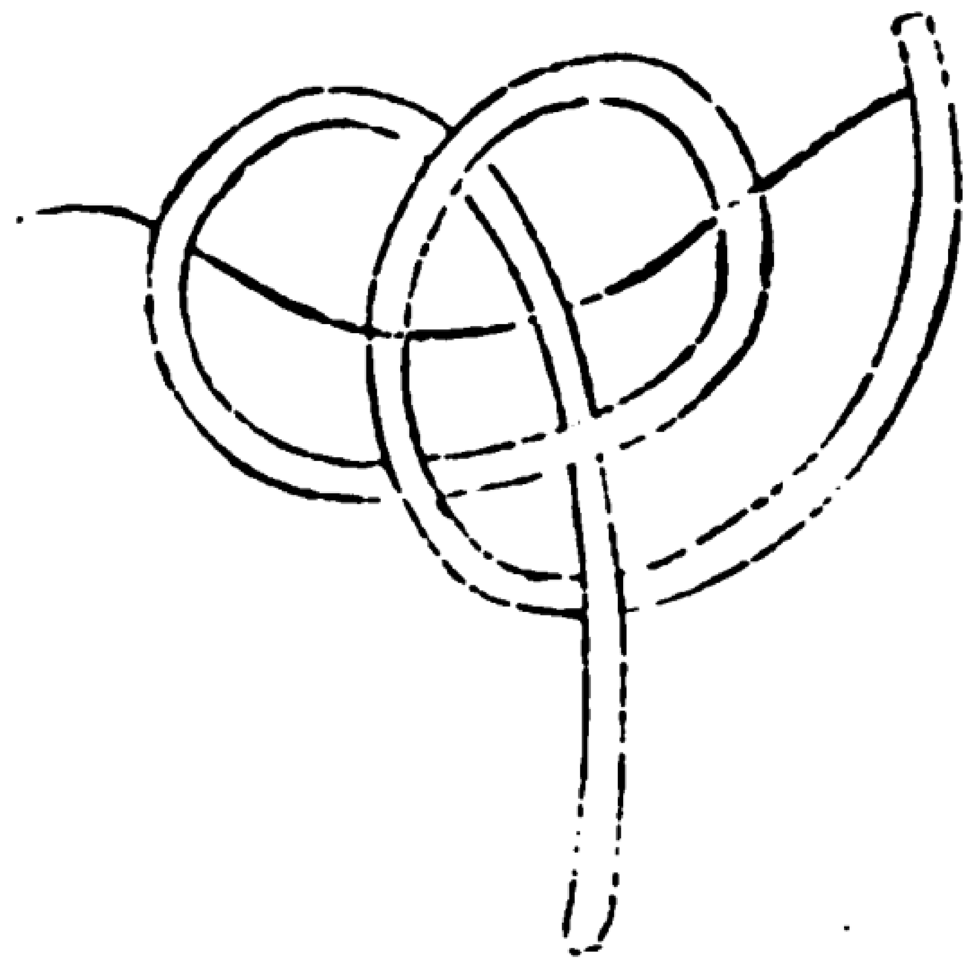
結方

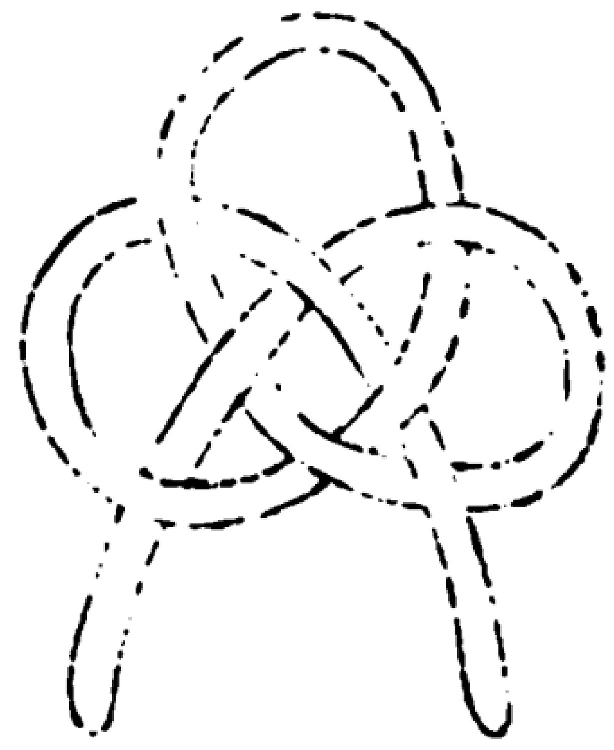
中島義一

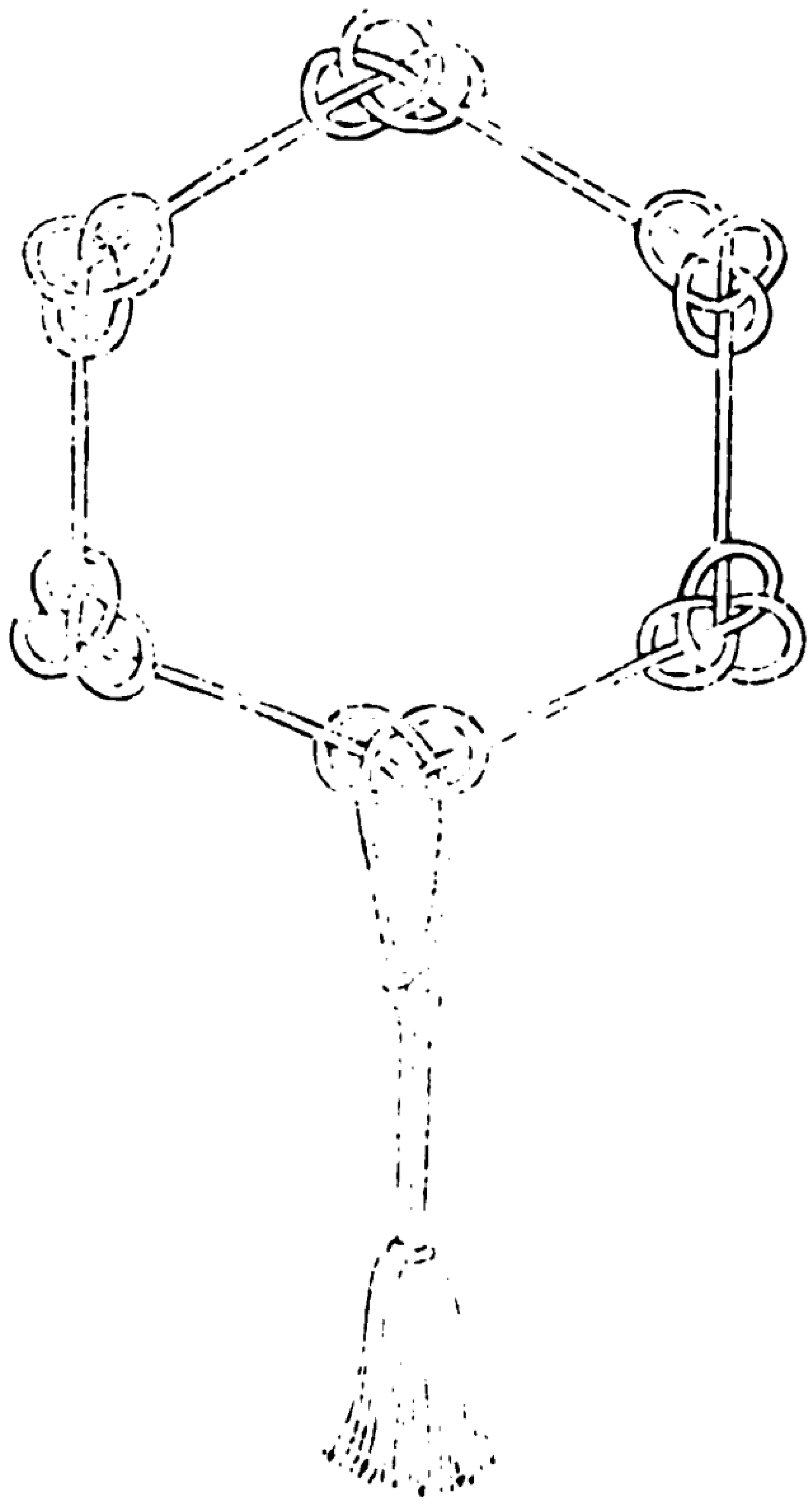
六曜結

是は、貴人の褥の四方に付くるものなり。前に出せし淡路結びを、五ッ調へ置き、六ッ目に、四ッ手淡路を付くるなり。また、其の下は結角なり。紐の記には、あはび結びとありて、ふさの上も、又あはびなり。


(第一圖)


(第二圖)

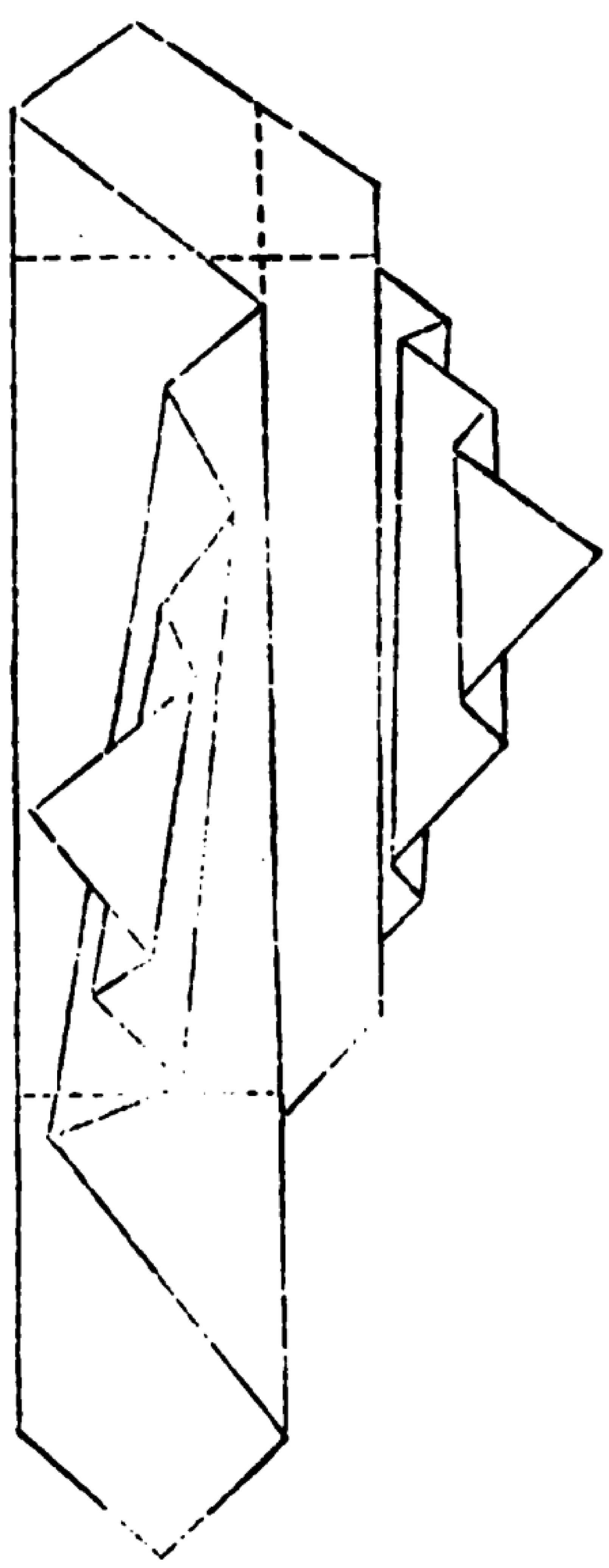

(第三圖)

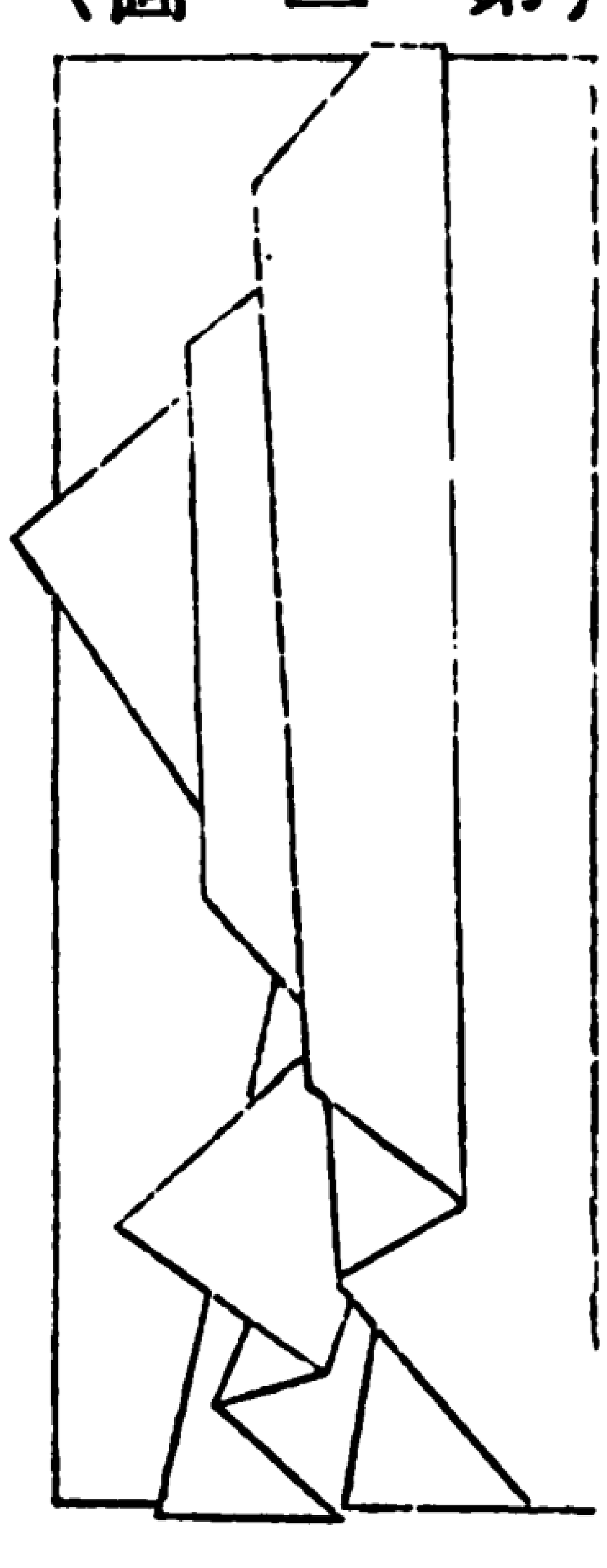

(完圖)

折方

有住くわう子

刺刀包（かみそりつゝみ）

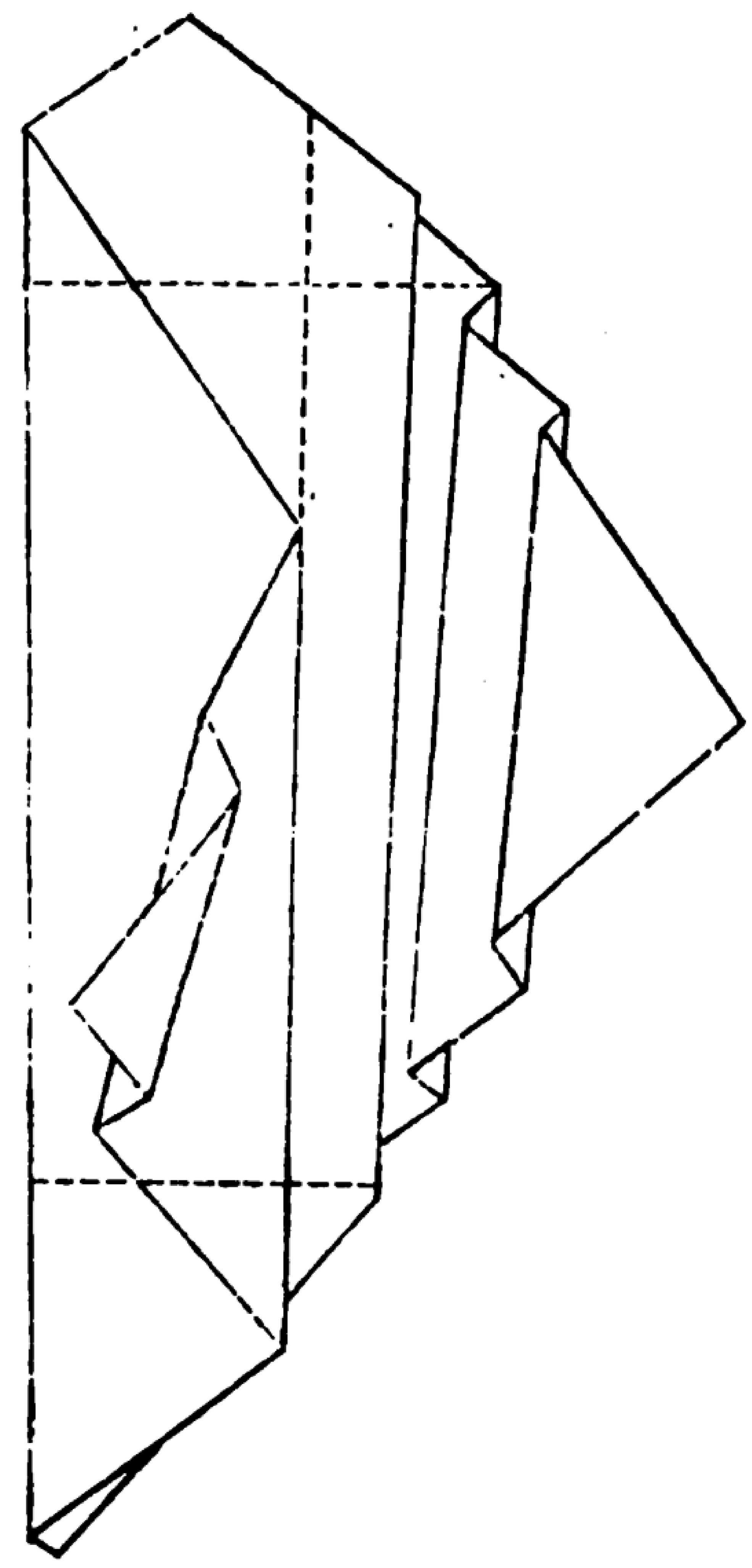

(第一圖)


(第二圖)

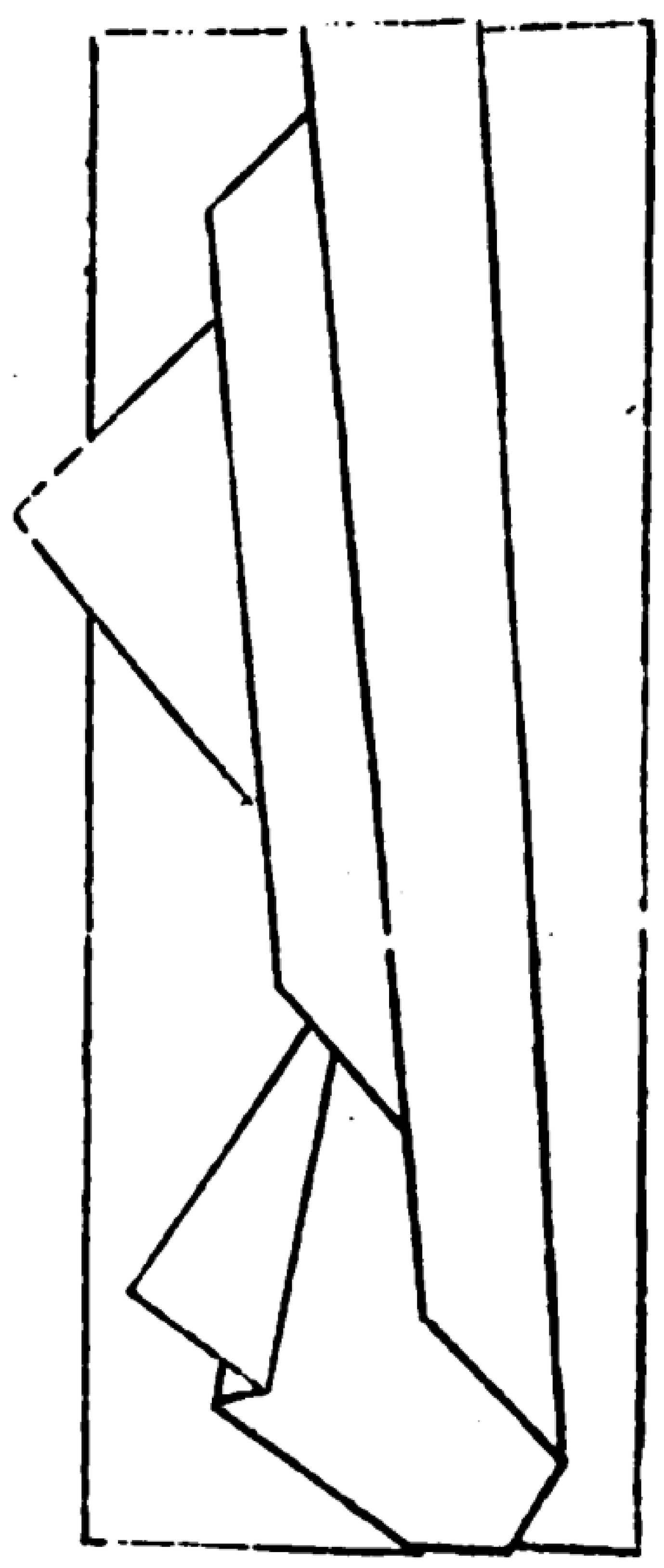
是（これ）は、常（つね）に用（もち）ゐる所（ところ）の品（しな）なり。水引（みづひき）をかくるなり。

同一式

（第一圖）



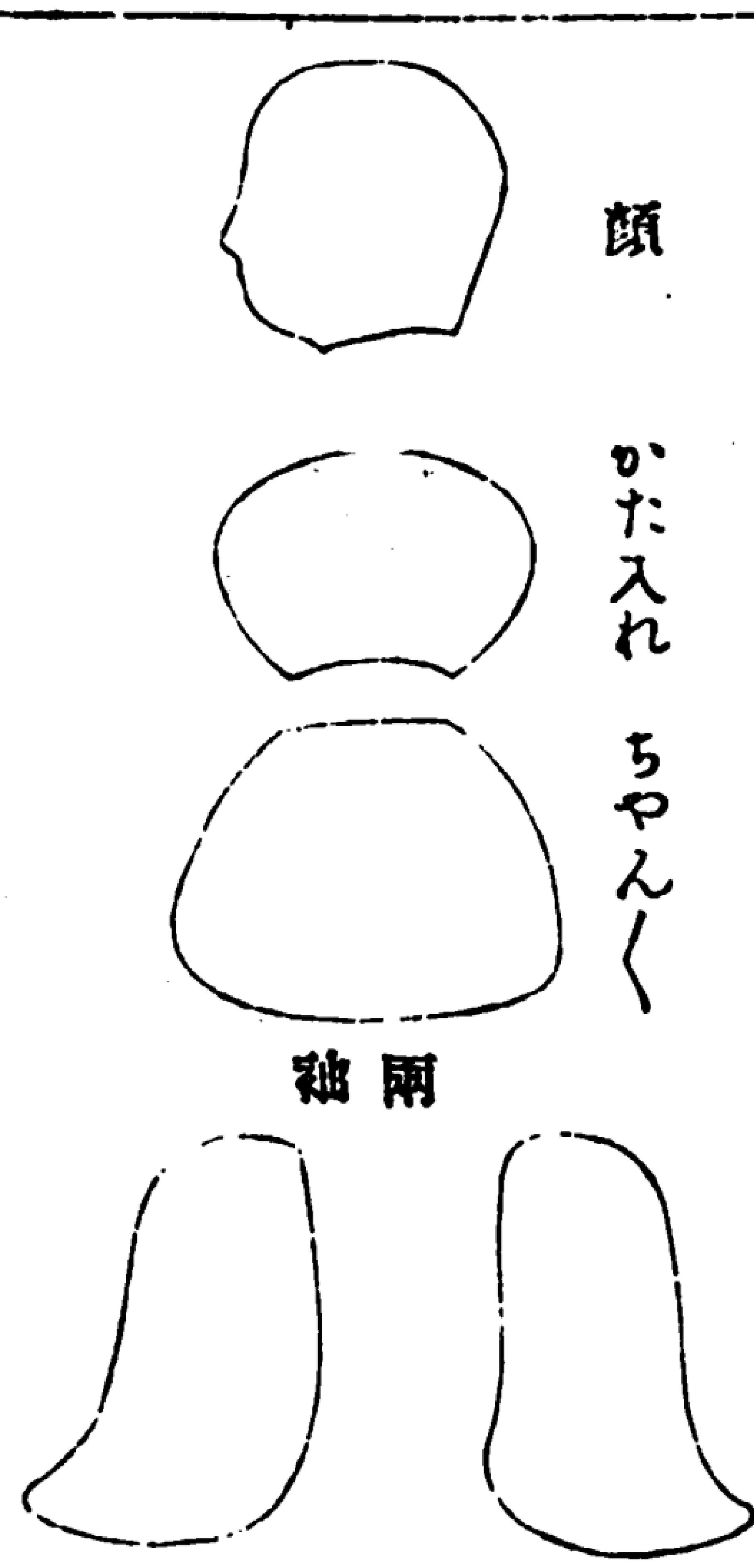
（第二圖）



たちぬひ

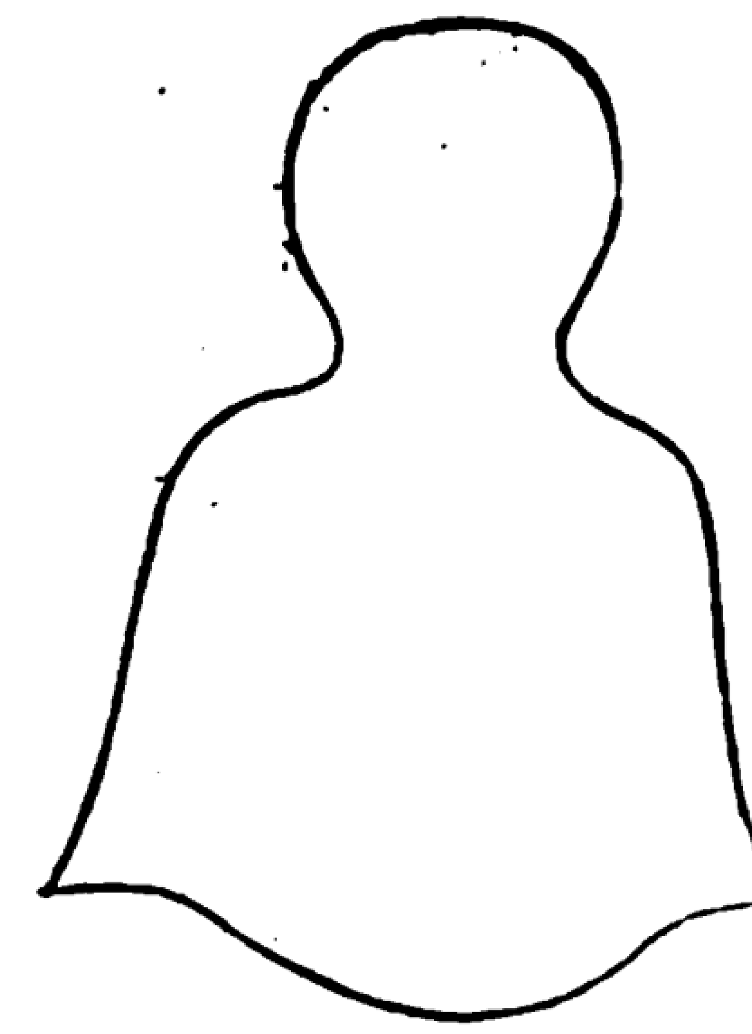
西山たい子

背負守　すわり人形



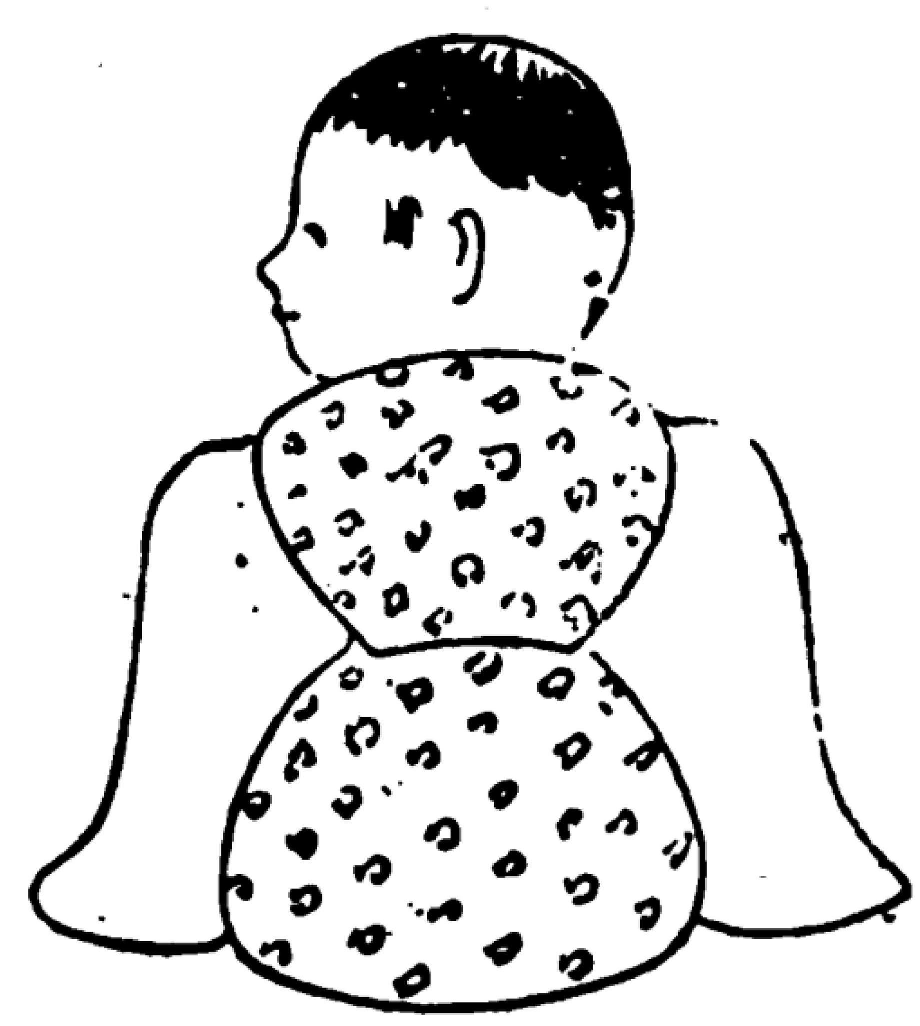
まづ、右圖の如き形に、厚紙を切り、顏には、白き切を、少しく、綿を入れてはりつけ、其の他、ちやん〳〵袖ともに、少しく、綿を入れ、思ひ〳〵の切をはりつけ、顏に目鼻を書き、兩袖、袖なし等をのりにてはり

つけ、裏をかやうの形に、千代紙を切りては

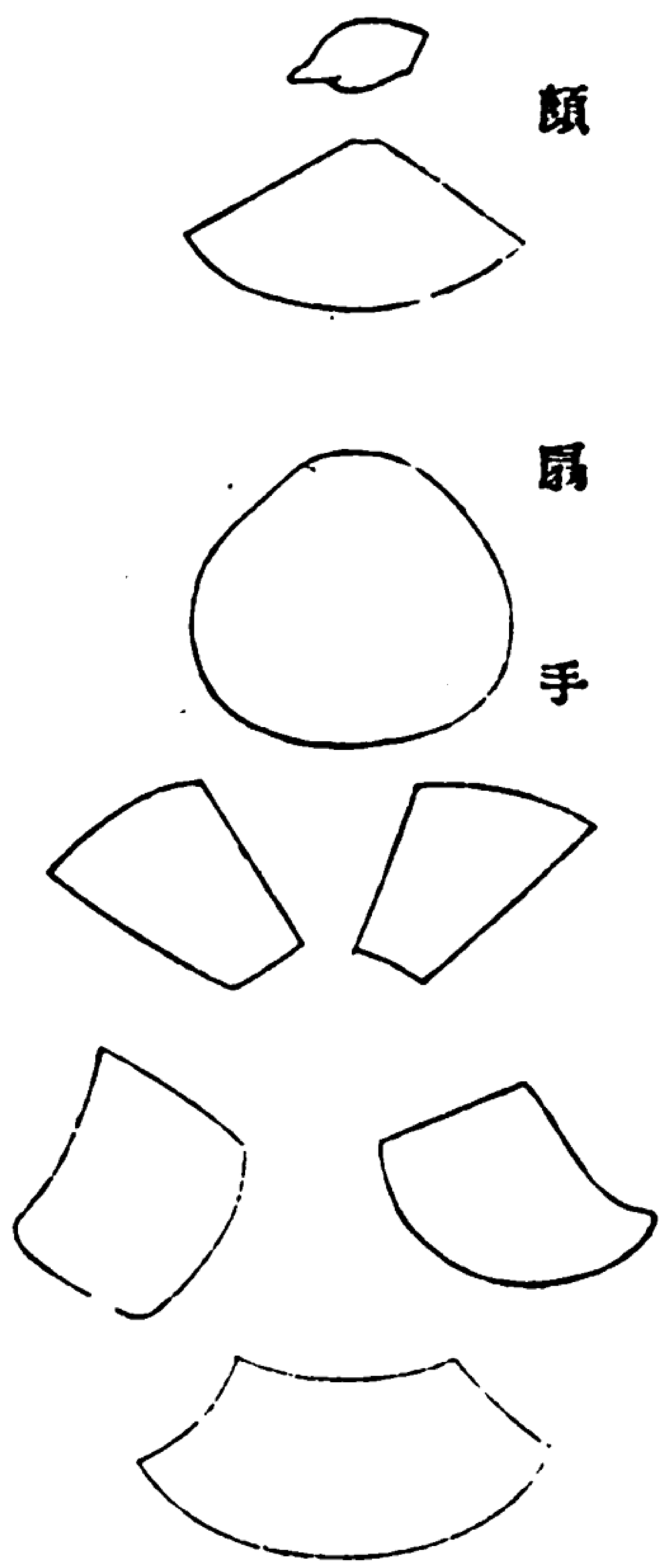


りつくべし。

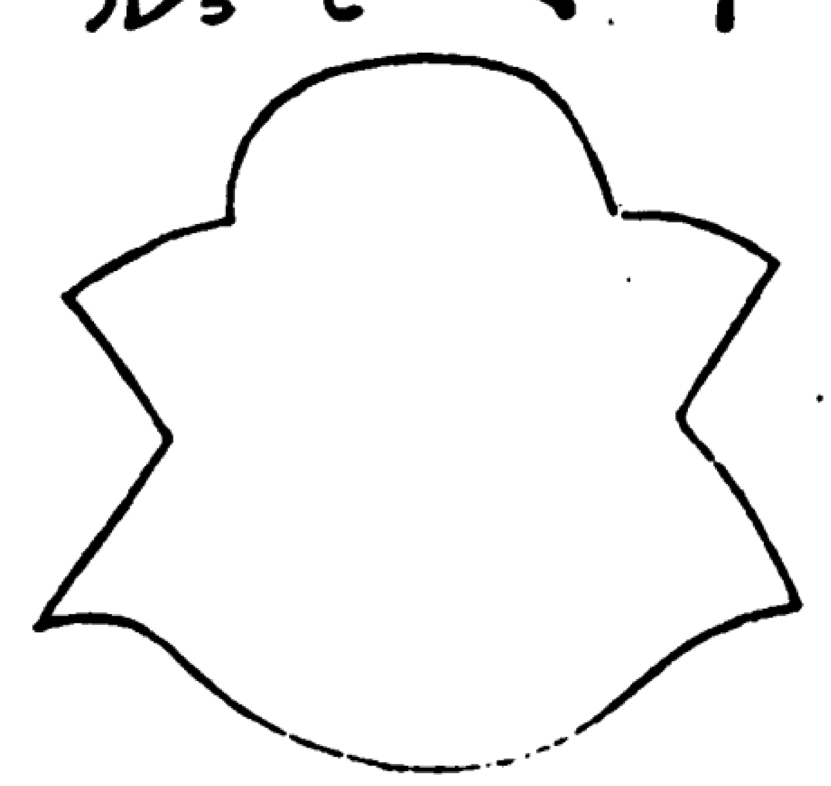
（その形）



福助形



之も、圖の如く、かやうの品々の形に厚紙を切り、顔と手は、白き切にて、顔は、眞中を、隨分あつく、綿を入れ、目鼻口等を書き、手には、少しばかり綿を。又、入れずともよし、之にも、ゆびの如く、條を書き、其の他、各、わた、少しばかりを入れ、思ひ〳〵の切れをはり、扇子、金紙等には、綿を入れずつくりたて、さて、左圖の如くにくみ合せて、のりにてはりつけ、裏を千代紙、又は、白紙等にてかやうの形



を切りてはりつくべし。

（その圖）



だいどころ

季節料理

鰯の酢ひしして

鰯の頭、尾、腸を去り、能く、洗ひ、水氣を去り、鹽をふり、酢に浸し、三時間程、壓を置き、其の酢を捨、新らしき酢にかへ、斯くして、四回程、酢をかへて、壓を置て最後に、酢を除き、暫時、壓を、なしたる後、取出して食す。鰯と共に、大根、茄子抔、漬込も可なり。

鰯に大根せんば汁

新鮮なる鰯を、三枚におろし、葛粉にまぶし置、大根を、薄く、短冊にきり、鹽ゆでになしたる後、鰯を、少しづゝ入れ火の通りたる時、すくひあげ、鰹節煮汁を、醬油にて鹽梅し、酢、少量を加へ、前の鰯と、大根を種になし、椀盛に、仕立るなり。

鰈のおろし煮

鰈を、能程にきり、酒に味淋を、能程に加へ、其れを煮たて、鍋の中に、笊をしき、其上に、鰈を置き、暫時沸たゝせたる後、醬油少しづゝ、度々にさし、鹽梅し、魚の火の通りたる時取出し、汁の中へ、大根のおろしをいれ、少し煮て、魚を、器に盛り、其の上に、おろし汁を注ぎ出すべし。

松茸の芥子漬

松茸の、未だ、笠の開かざるものを撰み、根を去り。砂を、能く洗ひ落し、鹽ゆでになし、冷し置、ゆでたる鹽水にて、芥子をこね、これに漬置こと、三四日の後、松茸を取出し、其の芥子に、麹と、醬油とを交ぜ能くかきまはして漬け込み、目貼をよくし、貯へ置き來春に、至りて用ゆべし。

菜花園

秋の草木いろ〳〵（七）

○薑　新生姜

俳　　　　　　　　　　　　露川

はしかみや葉はしかますに根はじかみ

狂　　　　　　　　　　　　若仲

からき世をなんと生姜とわたりけり
　　しほり汁とも身を成しても

○牛房引　漢名、惡實、一名牛房、きたきす、うまふぶき。

○芋　異名、土芝、蹲鴟、家宇、和名、露取草、白見草。芋の種類多し。本草には、十四種を擧ぐ。本朝、猶、有るべし。國々水土によりて、形も變れり。國所の方言によりて、俗言の名もあるべし。

○頭の芋　一名紫芋、頭芋とも云ふ。洛の東寺村、九條村のもの、天下の最上なり。芋の頭、大にして、凡、三斤斗の物あり。莖を、ずいき、又は、いもじ、又、いもばらともいふ。

○薯蕷　異名山藷、銀條、修星、山藥、種類多し。じねんじやうを野山藥といひ、土山藥ともいふ。里に栽るものをつくねいも、又、宇多芋とも云ふなり。別名佛掌薯と云ふ。芋の形、手をひろげたるごとき故なり。是を、近江の國にては扇芋といふ。又、杵芋、形杵のごとし、長芋、家山藥なり。皆、葉の形同じうして、甚分ちがたし。薯蕷、時々、風水、時候にかんじて、鰻に變ずる事、古代より傳へて、句にもよめり。

○零餘子　薯蕷の莖に生ずる者にて。食用とするなり。

○甘藷　元祿のすゑ、りうきうより、薩摩へわたりたるものなり。

○果　李、杏、棗、桃、栗、これを五果といふ。

○柹　異名、赤實果、凌金、霜長者、虬卵、鹿心、朱果。

御所柹は、和州、御所村より出るものを最上とする故

に、大和柹と云ふ。和州にては、平柹といふ。

○醂柹　澁柹を、石灰に浸し、又は、そばがらの灰汁に、二三日浸して、取出せば、味甘く變るなり。

○包柹　柹のよきものを器に納めて貯ふ、自然に紅熟す。

○釣柹　澁柹を糸につなぎつりて、乾ば、わぢ、甚だ美なり。濃州蜂屋柹を極品とす。藝州ぎをん坊、是に次ぐ。

○柹餻　澁柹をおろし、米の粉に和し、蒸して、餅とす、味もよく、食用に益あり。

○梨子　異名靑田果、千洙雪、玄圃實、百菓宗、快果、菓宗、玉乳、蜜文、水なし、山梨、靑なし、木なし、近江梨、松尾梨、空閑梨、生浦梨、犬殺は、津輕、秋田、兩所より出る大なるものは、周り、壹尺六寸あり。犬殺といふ。近江なしは、志賀野里より出る。同觀音寺梨、芦浦觀音寺より出。空閑なしは肥前より出づ。

○稻　異名、水影艸、富艸と云ふ。

十月手いれすべきもの（二）

收種すべきもの。

桐子　槐子　茶子　山茶子　茶梅子　栗子　決明子
鷄冠子　雁來紅子　金錢　苗麻　榧子　山茱　梔子　榠樝　橄欖　銀杏　木瓜　山查　秋葵子　樟子

澆泓すべきもの

牡丹　芍藥　林檎　梅　桃　杏　李

整頓すべきもの

諸般の蘭、茉莉　扶桑花　素馨　紅蕉　萬年靑　蘇鐵　千兩金　硃沙金、一切寒を畏るゝ草木は、皆、窖内、若くは、温室の中に移すべし。芭蕉、葡萄俱に、藁にて幹枝を包裹べし。





源氏物語講義（三十二）

下田義天類

いとすざましうものしときこしめす。此の頃のみけしきを見たてまするうへ人女房などはかたはらいたしときゝけり。いとおしたちかどかどしき所ものし給ふ御かたにてことにもあらずおぼしけちてもてなし給ふなるべし。

○此は前段に述べたる弘徽殿の女御の御擧動を評したる所なり。

○いとすざましうものしときこす。是は、陛下か風の音、虫のねにつけても、物のみ悲しくおぼしめさるるのに搗て、加へて、弘徽殿の女御には、久しく上の御局にも參上り給はず、御疎々しく過させ給ふのみならず、今宵も、今宵とて、彼の御方には、さも氣樂らしく、此の月のおもしろきに乘じて、夜深くるまで、琴や、笛の御遊興に耽らせ給へるを、いとすざましうものしときこしめさせ給ひたりとなり。すさましくは、薄氣味の惡き程なり。言の意は、荒涼しくの轉音なり。ものしは、優しからぬ事にて、武骨なる擧動なりとなり。之を束ねて約言すれぞ、甚薄氣味の惡き程、おとなけのなき擧動なりと聞食し咎めさせ給ひたりとなり。

○此の頃の御けしきいをみたてまつるうへ人、女房などは、かたはらいたしときゝけり。此の頃の御けしきは、陛下御物思にくれさせ給へる、此の頃の御けしきをなり。見奉るうへ人、女房などは、それを朝夕眼の前に見奉り居る殿上人や、女官がたなどはなり。かたはらいたしときゝけりは、弘徽殿の女御の心なき、今宵の御遊興をかたはらいたしと聞き

たりとなり。かたはらいたしと云ふ語は、例笑止といふ程の語なれども、こゝにては、傍若無人の所業なりと思ひとりたるよしなり。

○いと押たちかど〳〵しき所ものし給ふ御方にては弘徽殿の女御の御性質をいへるなり。いとおしたちは最押し立ちにて、甚差過ぎて、稜々しき性質を備へたる御方にてといへるなり。押立は、いらづくなりかど〳〵しきは、圭角なることを好む性質をいふこと葉なり。ものし給ふは、こゝにては、具備し給ふよしの義なり。即、物を顧慮する御性質に乏しく、只、一圖一轍に、甚、角たちたることを好み給ふ、御性質にて、物事を控へめにしなやかにするなどといふ風の美徳を缺ぎたる御方なりと、草紙地にてことわりたる所なり。

○ことにもあらずおぼしけちてもてなし給ふなるべし
ことにもあらずとは、陛下、御愁傷の事などをは、一向に氣に留め給はぬよしなり。おぼしけちてもてなすとは、覺し消して、立ち振舞給ふにて、聊も、念頭にかけざるよしなり。前の言葉と此の言葉との間へ、左の如き語を補ひて見べき所なり。ちと押立ち方々じき所ものし給ふ御方にて、座ませば、陛下此の頃の御愁歎を事にもあらず、思し消ちてかくの如くにもてなし給ふなるべしとやう續けて見べき所なりさて。此の一般の評は、第一に、陛下の御感情を寫し出して、弘徽殿の無情なる所を評し。第二には、殿上人、女房などの感情を寫し來りて、弘徽殿の女房の傍若無人なる御擧動を冷評し、第三に作者の言葉として、御性行を解説する体に評論したり。其の批評の体、最こまやかにて、且、順序あり此の三段に評し分けて、其の意を明にしたる手際に注目すべし。さて、こゝに弘徽殿の記事をさし挿みたるは、例の主客を説き分けて、正と邪とを對照し讀者が、源氏の君に對する同情の度を高からしめむとかまへたる作者の意匠なり。

以上を取束ねて申せそ、陛下ニハ風ノ音虫ノネニ付ケテモ物ノミ悲シク思食サルヽノニ、夫ニハ頓着シ給ハズ、弘徽殿ニハ久シク、上ノ御局ニモ參上リ玉ヌノミナラズ、搗テヽ加ヘテ、今宵ハ月ノ面白キニ興シテ、カク、夜更クルマデ、音曲ノ御遊樂ヲ催シ居ラルヽトハ、餘リニツレナキ所業ゾト陛下ハ、其ノ御擧動ヲいとすさましうものしときこしめす御樣子ナリ。夫ノミナラズ、此の頃殊ニ、御愁傷遊バシテオハシ坐ス、陛下の御けしきを傍ヨリ、朝夕ニ見奉るうへ人女房などは、今宵ノ弘徽殿ノ御擧動ヲかたはらいたしときヽけり。元來此ノ弘徽殿ノ女御ト申ス、御方ハ、いとおしたちかとかとしき所ものし給ふ御方にて座坐セバ、一向ニ物ノ思ヒヤリモマシマサズ陛下、此ノ頃ノ御愁傷ヲモ更ニ頓着スベキ事にもあらず、何デモナキ事ニ思し消ちてカクノ如ク、無遠慮ニイトスザマシク物シク、又カタハラ痛キマデニハもてなし給ふなるべしト作者ハ、推察致シマスと申す程の意なり。

秀歌集

鹽井正男

○

きかずともこゝをせにせむ時鳥
山田の原のすぎのむらだち

○これは、西行法師の歌なり。○きかずとも、よしやきかぬまでもといふ如き意なり。きかずはほとゝぎすの聲をきかずなり。○こゝをせにせん。こゝを時鳥をきく場所と定めむといふことなり。せは、其場所、其時といふやうなる意をあらはす詞にて、後撰集「こゝろみになほ下り立たむ泝川うれしきせにもながれあふやと、」うきせ、あふせ、こひしきせ、

りかむせ、たつせ、やるせなどいふせ、皆然り。こゝのは、その場所の意なり。○山田の原伊勢の度會郡、外宮のわたりなり。○すぎのむらだち。一叢になりて立てる杉の木だちなり。なほ千載集に「立田山松のむらだちなかりせば何處が殘る錦ならまし」の松のむらだちなどいふも、おなじ手ぶりなり。この句の末に「この所ぞ、必ず、時鳥のなくべきやうす見ゆる故に」といふ如き意をそへて見るべし。

○一首の意はあはれ、山田の原の杉のむらだちよ。こゝぞ、ほとゝぎすのなくべきやうと見ゆる故によしやきかねまでも、こゝをほとゝぎすをきく場所と定めむといふことにて、いつもながら、この法師の會釋なく、思ふまゝをつくらず巧まず、あるまゝにうち出でたる、なか〳〵に、自から巧みて及ばざるしらべも趣きもありといふべし。

○

夏衣きていくかになりぬらむ殘れるはなは今日も散りつゝ

○これは、源道濟の歌なり。新古今集夏歌の部にあり。○春を送りて昨日の如しといふことをよめるなり。○「春を送りて昨日の如し。」この題の意は、春日は、既に過ぎ去りて、風月なほ、春のけしきをとゞめて、昨日に似たる趣きをいへるなり。昨日とは、過ぎ去りし春日を、おほよそにいひたるなり。今日の前の日をいへるにあらず。

○夏衣きて。夏衣を着てよりといふことなり。春はすぎ、衣がへもありて、夏の節に入りたるなり。○いくかになりぬらむ。幾日になりたる事ならむかといふことにて、いくかは、幾日にて、日數の定まらぬをいひ、かは疑問の詞なり。はや夏の節に入りたれど、風月の、なほ、春の昨日に似たるものあるに蕊き感じ、夏衣を着てより、はや幾日たつだらうかと、自からいぶかりとひたる心なり。○殘れる花。春すぎたる後に、なほ木ずゑに咲き殘りたる花なり。

今日も散りつゝ。今日も、なほ散りつ散りつ散りて、居るよしいふことにて、もはおなじさまなるもの事を並べも、重ねもするにいふ詞にて、今日もにて、昨日も、一昨日も、今日も、おなじく花の散るをあらはせるなり。散りつは散りつ、散りつと、くりかへしたる詞づかひにて、深き感動をこめていふ時に用ふ。古今集に「春がすみたてるやいづこみよし野のよしの丶山に雪はふりつ丶」とあるつ丶に同じ。

○一首の意ハ、マア——夏衣を着てより、幾日に成つたことだろうか。春の節は既に送りたるに、なほ咲き殘れる花は、昨日も散り、一昨日も散り、今日もちりて居るよ。夏の節に入りたれど、風月は、なほ、春の昨日に似たるけしきがあるワイといふことにて、意は明からり。巧みたる意匠のあるにあらねど、いくかになりぬらむといふかりてうちいで、今日も散りつゝとと丶めたるわたりの情に詞に、おのづからなるけしきの面白さよ。限りなき、深き感のあふれでたればゆるや。歌は、かくざまにこそあらまほしけれ。

○

忘れめやあふひを草にひきむすび
かりねの野べの露のあけぼの

○これは、式子内親王のみ歌なり。新古今集夏歌の部にあり。○齋院に侍りける時、神だちにてよまれたるなり。○齋院。さいゐん、又は、いつきのゐん、とよむべし。賀茂の大神にいつきつかへたまふ皇女、やがて、いつきのみこのおはします所をいひ、また、いつきのみこの事をも申す。なほ、伊勢の大神宮の齋宮の如し。賀茂の大神は、天子の御產土神なれば、殊に傳くあそばされて、天子の御位につかせたまへる時には、伊勢の大神宮と共に、內親王、又は、女王の、未だ、嫁ぎたまはぬおん方を撰びて、齋宮(伊勢の大神宮のいつきのみこ)齋宮(賀茂のいつきのみこ)とさだめつかはされて、いつき仕へしめたまふ

なり。御産土神とは、その文字の通りにて、うぶすなは、その人の生れたる土地にて、その土地を守護する神をうぶすな神といふなり。齋はいづくといふ事にて、いづくとはいみつくにて、汚穢なきやうにして、謹み仕ふるをいふなり。齋院に侍る時とは、齋院にておはせる時、やがて、賀茂のいつきのみけにてわたらせられたる時といふ事なり。〇神だち。神館なり。たちは建つを躰言にせるにて、建物の意なり。やがて、館（やかた）なり。賀茂神社の祭りの時、賀茂の神社より、北の方にわたれるみあれ野といふ處に、かりの神館を建てゝ、そこに、一夜とまらせたまふ事なり。神だちとは、神事にかゝれる館なれば、しかいふ。

〇忘れめや。忘れんや、忘れじといふ事にて、忘れざる意を、強くいひたる詞づかひなり。やは反語なり。めはむの活きたるなり。忘れむやといはずして忘れめやといひたるは、語調の爲にてかく。むよりやにつづけずして、めよりつゞくる事は、其の例少なからず、萬葉集にも多けれど、古今集以後のを、一二首あぐれど、古今集五の卷に「うゑしうゑは秋なき時や咲かざらむ花こそちらめ根さへかれめや」後撰集十八の卷に「あしびきの山下とよみ鳴く鳥もわがごとたへず物思ふらめや。」拾遺集一の卷に「散りそむる花を見すてゝかへらめやおぼつかなしと妹はまつとも。」古今集に「たねしあれど岩にも松はおひにけりこひをしこひばあはざらめやは」十四の卷に「みよし野の大川のべの藤なみのなみに思はゞわがこひめやは。」續古今集十二の卷に「あだ波の高師の濱のけなれ松なれずぞかけてわがこひめやも」など、いと多し。此の集の春の部にもありたり。文章の如くなる語調をさけて、詩の語調を得む爲めに、かく常の用ひ方をはなれて、めやといひつゞくるなり。この忘れめやの句は、最後におきて、露のあけぼのを忘れめやとつゞけて見るべきなり。〇あ

ふひ、草の名、双葉の相對して出る故に、二葉葵とも、二葉草ともいふ。四月の賀茂の祭には、必ず、これを用ふるゆゑに、かもあふひの名さへあり。祭りにあづかる人、冠などにかけ、また、この神だちをも、この草にて飾りなどするなり。○草にひきむすび。草は草枕を略せられしなり。即ち旅寢なり。葵を草枕にひき結ぶとは、葵にて飾りたる神だちの中に、一夜のたびねしたまふけしきを、かくいはれしなり。ひき結びはひき結びてといふべきを、てを略きたまへるなり。本居翁は、ひき結ぶとかひきむすびしとかなくては、詞とゝのはずといはれたれど、かゝる時に、てといふ助詞をはぶくことは、つねの事なり。○かりねの野邊。かりねせる野べといふ意なり。かりねすといふべき意を、かりねといふ躰言のみにてきかせて、直ちにかりねの野べとつゞけたまへるなり。○露のあけぼの。露ふかくおける曙といふことなり。曙とは明仄といふ義にて、仄に明くなりたる夜明けの時をいふ。あかつきといふに同じ。露ふかくおれる曙を、露の曙といふ事は、花あかく咲ける曙を花の曙といひ、雪白くふれる曙を雪の曙などいふに同じ詞づかひなり。なほ、花の春、月の秋、雨の夕など、皆、似たるいひかたなり。この句は、露のあけぼのをと、をの助詞をそへて見るべし。はぶきたるなり。露のあけぼのを忘れめやと、上にかへしてむすべる歌なり。

○一首の意は、葵を草枕にひきむすびて、一夜かりねせる、此の野べの露ふかきあけぼのゝ、あはれに神々しくゆかしきけしきを、いかで忘れんや、いつまでも忘れじといふこゝろにて、神だちにかりねせられたるあした、身にしみておぼえたまへるみこゝろをよませたまへるなり。歌もまた清げにゆかしく、忘るべからざる風情なりや。本居翁も、石原主も、共に、三の句、四の句、詞づかひとゝのはずといはれ、本居翁はひきむすぶかりね野べにあらずぞ、ひき結

びしかりねの野べといはではかなはず。さなくむかりねせし野べとなりてはとゝのはずといはれたれど、皆、詩調の妙を忘れたる難なり。かくいはんには、調は平凡となり、また文章の如くなりて、詩趣を欠ぐべし。歌は文法を以て説くべからず、詩趣を以て味ふべきのみ。



漫録

神國女訓抄（三）

山口道貫

神功皇后、三韓、御退治のとき、神祇を祭り給ふには、皇后 親神となり給ふゆゑ、嚴媛の號を授け給ふ事なし。伊勢の齋宮、賀茂の齋院、及び、御物忌子良、皆、女人を以て、神を祭り給ふ古實なり。吾神道にて、女人を貴ふ事しかなり。然るに中世より、神道、漸くおとろへ、人の心根ゆがみ、本を忘れ、正きを疑ふ。其の虚に乘じて、隨機の方便門弘り、女は、五障三從の罪深く、神明を祭れど、神罰を蒙る、只、佛は、大慈大悲の惠深ければ、衆生を濟度し、救ひ給ふのみにして、罰を當たまふ事なく別して、罪深き女なれど、古來の誓願を以て、女を轉し、男となし、成佛せしめ給ふものなれど、此の如來の御蔭にあらざれど、女にたすかることなしといひ、ひたすら、已が勝手にまかせて、難有神國の人民をしてゆくりなく、西の戎の敎におとし入れんとす。それ天竺などは、遠國なるがゆゑに、陰陽の氣候も片にして、常に熱氣にくるしみ、身に衣服を着くる事もなく、首髮なども暑さつよきがゆゑに、延る事を得ず縮みて、蜂の巣の如し、かくの如く氣候偏まる國なれど、人物も偏にして、罪深きといふ理りもあるべし。かたじけなくも、吾國は、天御中主尊の御鎭座まします高天原の眞下に當り、萬國の

中央にして、陰陽中和の風土なれど、女人は、陰中に陽を含み、男子は、陽中に陰を具す、故に、男女ともに、淳に正直に、親につかへ、君を敬ひ、夫婦兄弟むつまじくかりそめにも濁り亂るゝ心きさゝば、祓ひ給へ、清め給へと、天神地祇に仕ひ奉りて、高天原の神城に神留る事、ゆめ〳〵疑ひあるべからず、彼の天竺國にて、女人を賤み、惡むとは、各別の相違なり。しかれども、道は、人にとりて弘まり、道人をひろむるの理りにあらざられど、中古亂世の折しも、神道の正きはおとろへ、邪統暴行して、わが宗門に入れはべるを專一となし神祇を一禮すれど、蛇身を更ふるといふ。或は神祭に雜行と稱し、女人は、わけて罪深けれど、神明の罪を蒙るなど、利口辯舌にまかせて、世の人をして神をうとんし、只、佛にのみ親しません事を謀る。其の世智辯佞にたふらかされて、我本國の神恩をわすれて、國つ神の怒を犯し、底根の國の苦をまねくこそ、本意なく、口惜しきわざならずや。

續人名（六）

釋法忍

いにしへより、聖のおきてにもたがひ、をつとの心にかなひしつまなりとも、しうとしうとめのこゝろにいらざれどりべつし、夫の心にはあはざれども、しうとしうとめの心にかなひぬれど、いたさぬ法なり。しかるに、女のあさはかなる心から、わがをつとひとりの心にさへかなへどよき事におもひて、をつとのみを、大事にかけ、しうとしうとめへそりやくし、あひよめ、こしうとなどへしたしみなく、かへつて、いろ〳〵の有なしごとを、夫の耳へふきこみ、をつとの威をかりて、をのが心のまゝにせんと、かれこれ、夫の心をたぶらかし、おのが、つとめの道にそむくさへあるに、しんみのおや、兄弟の中らひあしくし、家をさはがすもせけむにまゝある事なり。もつとも、をつとのたわけゆゑとはいひながら、かやうの女は、いぬねこにも

おどり、女の風上にも置がたし。あさましき、心ざしなり。されど、いかなる心よきしうとしうとめにても、などかこらへ、給ふべき。そのうへ、あひよめ、こしうと、その外かたはらより、あしさまにいひ立てんに、なにとて、をつともそひはつべき。よしや、をつとうとまずとも、しうとざりにさられんに、いかでか身を全うして、をりなん。此の理をわきまへざるは、あながちおろかなるばかりにてもなく、わがまゝなる心より、おのれを高ぶるゆゑ、禮義の道をうしなひ侍るなり。さるによつて、女は、取わきへりくだり、したがふを道といたしはべり。をつとの心に入る事、一つには、しうとしうとめの我を愛し給ひて、つねゞゝ夫へも、よきやうにいひ聞せ給ふゆゑ、をつとも、ふたおやの心にもかなふよと、よろこぶ心から、少しの事はふせうするゆゑ、波風もなくをさまり、また、しうとしうとめの、われを愛し給ふも、わがつとめばかりにもよらず、あいよめ、こしうとなどのわがことをほめそやし、よきにいひなし給ふゆゑ、夫婦あひもよく、家内のものどもしたしみふかきこともしうとしうとめよろこび給ふゆゑ、少し、心つかぬ事も、目にかかる事も、それなりにすみて、おだやかなり。此のことかどりを、よくゞゝかんがへ給ひ、あひよめ、こしうとと、したしく愛くしうし給ふべし。

いかほどかしこき人にもあやまちはある物なり。されど、人のつまとなりては、其の家の人と、つねゞゝしたしくすれば、たとひ、少しのあやまちありても、いひあらはす人もなく、かへつて、心つかぬ事は、そばより氣をつけたすくるにより、なす事、する事、しうと姑、夫の心に叶ひ、その身のはたらきと成侍るなり。また、うちとのものものとしたしからざれば、よきことはとりやはすものなく、あしき事は、すこしの事にても、をひれをつけていひ立て、そのうへ、心付ざる事を見ても、氣を付んともせず、かへつて、おちどあれかしとそばよりつきたつれは、いつとなく、舅

姑の耳へも入て、あしくおもはれ、をつとにもうとまれ侍べるものに候へど、此のことわりを、よく〳〵、わきまへ、人ごとに、にくまれぬやうにしたしみ給ふべし。然かし、此のしたしむと申すにわけおはしまし候。すべて、世の中の男女にかぎらず、心あひのねんごろのといふを見侍るに、禮義もなく、實義もなく、唯、めつたにくつろぎたはふれ、くるひ、ざさらなる出合をねんごろの、こんいのと申候へども、これは、大きなるひがごとにておはしまし候。まして、人のつまなどの、人として、心やすだて、たはふれくるひ、あとさきのかんがへなく、をつとの留守にも、他のをとこと酒ごとし、あるひは、一つこたつに入、またわ、さしむかひにてはなしあふなど、いかに、心やすき人にても、たがひにあるまじき事にておはしまし候、か樣の事より、他の口にもかゝり、夫のうたがひもうけまたは、實にいたづらごともいでくるものにて、おはしまし候。是らは、うは氣のしたしみにて、まことのしたしみとは、申しがたし。まことのしたしみと申すは、たとへ、ふだん出あふ人たりとも、禮義をみださず、實義をもつてまじはり、つゝしむべきをつゝしみてそこいなくねんごろに取はからひ、たがひにたすけ、あひとひ、そうだんのちからとなり、いつまでも、心のかはらぬを、まことのしたしみとは申し侍ふなり。かやうに、禮義正しく、眞實をもつて、したしみ交る人は、つゝしみふかきものゆゑ、中々無遠慮なることは、かつてなきものなれば、惡事のおこるべき樣なし。されど、けや〳〵しき事もなく、また、うと〳〵しきこともなきものなり。是まことの心ざしなり。たとへば、松のとこしなへに、色かはらぬがごとし、これらのしやべつをわきまへ給ひ、御したしみ有たき御事にておはしまし候。

さゝし草（四）

故　兒島顚齋

他國に住居する時父母の命あらでいそぎ古郷にかへり孝養を盡すべき事

他國に住居して、いかほど安樂にくらしぬとも、古郷なる父母、歸り養へとのたまへど、居宅をもすて、官祿をもかへり見ずして、家にかへりねんごろに、孝養を盡すべし。

明の陳茂烈といふ人は、御史の官なりしが、母老ぬる故、身しりぞきて、孝養をとげたしと情をのべてねがふやう、我母ことし七十七なり。君の恩は、なほ、盡さるべけれども、母の齡は、ふたゝび得がたし。臣つねに、母を思ふことやまされど、君に報する心おのづから亂る。母も、亦、臣を思ふこと切なる故、身をたもつの念すくなからんと、泪ながら申あげゝれど、君もあはれにおぼしめし、御いとまを許したまふとなん。

本朝にても、陳茂烈のごとき人もあるべし。われ、常にかしこく、殊勝に覺ゆるは、寛永のころ、近江の國に、中江與右衛門惟命といふ人あり。世に、關西の聖といふ。家にさきぬる藤、ひともとありしかば、すなはち、人呼て、藤樹先生と稱す。父は、すでに身まかりぬ。先生いとけなきときより、書をよむことを好みて、母につかへて孝なり。もと、伊豫の國の大洲の城主加藤氏につかへて、母を、その所にむかへ養はんといひしに、母、いなみてしたがはず。先生つゆさらかふ氣色なくして、任をやめて、古郷にかへらん事をこへども、君ゆるしたまはず、先生、うちなげきて、いはく、われ不孝なりといへども、祿のためにつながれて、をらむやと、ふみかきおきて、ひそかにのがれ歸りて、母のよろこびを得たりとなむ。今にも、先生の住み給ひし村は、むかしの風儀のこりて、人みな、質朴淳和なりとぞ。その餘徳の大なる事感ずべくも、また、たふとき事なるべし。

寶暦年中のことにて、美作の國、田殿の人稲垣淺の丞隆秀とて我播磨なる安志侯の儒官なりしが、父の心にしたがひ、古郷へしりぞき、みづから鍬鋤とりて、朝なゆふなに農業をいとなみ、餘力あれど、聖賢の書をよみて樂しめり。父の命といへど、いかほど辛きことゝをもつとめて、露ほども、その心にそむかずして、あつく、孝養を盡しぬ。委しきことは、中井竹山のあめる華孝状をみるべし。さて、陳茂烈は、家に老親あれど、三公にも換へずといふ賢行家にて、我爲にする學者君子の儒といふべし。嗚呼、世には、兄なく、弟なくして、已、ひとり、父母に孝養すべき身なれど、學にあそぶとて、古郷をひなびたりとおもひ、もとより、學は道を修むるためを悟らずして、ひさしく、京に、住居して、春は、嵐山の花に醉ひ、秋は、鴨川の月にうかれて、家なる父母の、明くれ門に倚りてまちぬるをもかへりみず、或は、あやまりて、色にはだされ、金にまよふ心出來るより、おのが家をすて、余所の家の子となり、いつしか、生の親には、日に疎くなり。或は、老親を家にのこし、おのれ官祿をもとめて、頑として、その榮にほこるも有べし。是らの輩、陳茂烈、惟命、隆秀の、三人において、ふかく恥ることをしるべし。

記者、こゝにいひおく事こそあれ。支那の如き國から、さては、我國の武家の世の諸侯に事へて、祿を食むものこそ、右の如き行ひにても、いと／＼めでたけれ。しかはあれどかしこくもあら人神のしたしく政をきこしめさるゝ御世にありてたとひ、老親あれども、勅に違ひまつりてはいかに。古郷の山はさけ、海のあせなんと聞きぬとも、己が、まけられしつとめをおこたるやうの事ありてはよけむやは。重盛、もし、忠の一をだにまたく、えせずぞ、小松の大將、傳家寶刀烏丸のもとにたふさではあるべからず。世の孃たち、此處に心をそゝがれて、うつくしきうみのこの、かしらにとゞめさせん事を、ひた

すらにのぞむになん。されば、右の事柄をよまれても、よく心せられて、なほもひたがひそ。

日本人の性質（四）

大鳥圭介翁講話

醫者の話でありますが、東京大學の雇に、スクリツパと云ふ人があります、私も、能く知つて居りますが、此スクリツパは、外科醫でありますから、手を切斷するとか、乳を切斷するとか云ふのでありますが、スクリツパはさう云ふ患者に對しては、看護婦の看るやうな白い着物を着て、襷を掛けて、天に向ッて頻りに瞑目をする頻りに考へて、さうして暫くあッて、パット目を開いて、直くに手術に取掛る、人が傍に見て居ッても、平氣なものである、あれまで氣を掛ければ、遣り損ひもないだろうと思ふ、然るに、日本の名高い醫者でありますが、乳癌を切るときに、どうするかと云へば、卷煙草をふかしながらやつて居る、それを見て、餘り二人の行ひが違うからと云ふて、話した人がある、其日本の醫者と云ふのは、東京一の名醫である、スクリツパは、天に向つて瞑目する所を見れば、天に祈るのだろうと思ひます、卷煙草を吸ひてやつても、仕事は能く出來る、やり損ひがないかも知らぬが、其氣の掛ることは、實に雲泥の違だ、まア醫者に例へて見れば其通りだ、劍術でも、なんでも、氣の掛らぬものは、見て居つて面白くない、此醫者の話が、餘程面白いことだと思ひます、……さうして物に氣が掛らぬければ長く堪ふると云ふことも出きないだろう、總ての人が、何事を企てるにも眞誠に本氣になつてやれば、大抵のことはいけるだろう、多くは、半途にして止めると云ふのは、先刻御話申す通りに、最初から眞實に力を盡して考へたのでないから、途中で止めると云ふことになる、それで御同前が學問をするにも、商業をするにも工業をするにも。工業をするにもスクリツパが一生

懸命に瞑目して祈るやうに見ゆるやうに、誠心誠意でやらなければならぬと云ふことを、私は、自分の息子や、隣の人などにも話して居ります、私も子供が三人ありますが、常にさう申して居りますが………人間並より秀でた人にならうと思つても、其道があつて、其順序を踏まなければならぬものである、尤も男子の爲すことは、天下に名を揚げて、人の模範とならぬければならぬけれども、先づ、地道を踏んで、どうしたらよからうと、よく〱考へなければならぬ、少年の時は、有名の人になりたい、金持の人になりたいなどゝ、色々に心が變はる、十五六のときには斯う云ふ學問をしたい、あゝ云ふ學問をしたいと云ふやうに、いろいろ變はる、それは變へてもよろしい、併し、各々專門を極めたら變へてはいかぬ、自分の最初の見込は、誤りかも知らぬが、能く人の意見を聞き、自分にも考へて、一度極めた以上は、決して變へてはいかぬ、……

…自分の悴は今年大學を卒業するので、二十五六でありますが、常に申して聞かせて居ります、大變エライ人にならずともよい、一ト通りの人になッて成長が出來れど、運と云ふものがある、良い機會良い機會に向つて來る仕合の人もある又運の惡い人もある、時世の循環と云ふものは急度よいと云ふことにはいかぬ、所謂至誠事に臨めど、本氣でやれど天之を助くるのであります、只若い時分に名を擧げる人になりたいと云ふてもいかぬ、非道なことをして榮華を得やうとしてはいかぬ、男子事を爲すには至誠で事をなさなければならぬと云ふことを申して置きます、先づ此位のことで雜駁の話でありますが今日は先づこれで………（完）

飛鳥井家和歌の法式（七）

秘傳和歌切字可意得事（三）

正　徹

あらき風わか葉な吹きそ鳴く雲雀

子を思ふ身の野邊の芝生ぞ

此のそ、文字、二侍り、第二の、そは成敗なり。結句はてに留たるは、いひ切て、物をしへたるぞなり。かやうによめるは、同字ながら各別なるべし。

同

雨そゝぐ門田の草に花ぞ咲く

おく手になして去はしかへすな

三句にて、花ぞ咲くといひ切て、末にしはしかへすなと成敗し侍し也。かやうの歌をのみ去ためて、手爾波を心得べし。前にも、先達堪能も、おほくよみしなり。それも、手爾波違ひていひおほせられぬ。歌おほく侍り、用心、專一たるべし。

花の色もなとか此の世に出さらん

雲に月日の光をぞ見る

此の歌のやうによめる手爾波も、常にある事なり。只、古歌、新歌にかぎらず、手爾波、また情の一ふしあらんをも、心を付て見るべしとぞ。

春の雁夕の雲に聲すなり

哀歸らぬ老のなみかな

三句にて云切て、かなとはてたる歌、おほく侍り。

露分ておもひ入野の初尾花

いつしか餘所にぬるゝ袖哉

此のいつしかは、本歌のいつしかにかはるなり。いつしか人のうとくなりにけるかなと云ふ心なるべし。人丸のさはしかの入野の薄はつ尾むないつしかいもか手枕にせむ。此のいつしかはいつかと云心なり。しは助字也。萬葉に、いつしかも神さひけるかかく山のむすきかもとに苔の生ふまで、此のいつしかも、別のいつしかなり。切字にてはなし。かやうに分別大事なり

定家

霞がは花うぐひすにとぢられて
　春はこもれる宿の曙

一句に、かはとうたかうて、三句にてとぢられてといへるかやうの事、手爾葉分別あるべく候。

宮内卿

花さそふひらの山かせ吹きにけり
　漕行ふねのあとみゆるまで

三句にてけりと云切て、末にて、までと首尾し侍る歌なり。只、詞のつゝき縁を以て、心得侍るべし。

俊成

春ならでさくら谷には見にゆかじ
　ことしもこりぬ道の遠さに

三句にてゆかじといひ切つて、道の遠さにといへる、是も、首尾したる歌なり。かやうにあれむとて、心相違しては、詞はかゝり首尾する事も侍り、詞と、心と相應せん事、尤なるべし。

春日野の飛火の野守出でゝ見よ
　今幾日ありて若なつみてん

此のてんといへる大事なり。かやうの手爾波能さくりしりて、我讀ん時も、其の心相違なきやうによむべし。

（つゞく）

教梯抄（十七）

夫木集雜

六帖題父　中務卿のみこ鎌倉

きみのため人をたつねむたらちねの
　親につかふるこゝろをも見む

新撰六帖

たかんな　藤原光俊朝臣

いかむかり雪のしたなるたけの子の
　おや思ふ人のこゝろしりけむ

拾遺風体抄雜

同　同

題不知

こゝろから何なげくらむよそに見む
惜かるべくもなきわが身かな

藤原秀實

同　同

行く末をいかなるべしと知らぬこそ
なかなか人のたのみなりけれ

左近中將經道卿

同　同

おもふこと誰にかたちむなさけある
人こそひとのおもひをもしる

前參議雅有卿

同　同

ひとゝかく生れたる身のうれしさを
いたつらになす我がこゝろ哉

慈鎭和尚

臨永集雜下

題しらず

くれ竹のよのことわりとなくさめて
身のうきふしもよしや歎かじ

前大僧正道益

同　同

權大僧正雲禪

思へむぞうきもつらきもなけかるれ
わか身のあだはこゝろ也けり

家集

彈正親王西芳寺におはして法談の後
歌よみたまひけるついでに

夢想國師

思ひなすこゝろからこそ身のうきを
よのとがとのみかこちける哉

同

題しらず

我のみとかしこかはなるはかなさよ
はかなかりせむ賢からまし

家集

はいにもあらで年月經ぬることを

兼好法師

うきながらあれむ過行く世のなかを
へがたきものと何おもひけむ

金葉集雑上

百首歌の中に述懐のこゝろをよめる

源俊頼朝臣

世の中はうき身にそへるかけなれや

おもひすつれど離れざりけり

新古今集雑中

和歌所にて述懐の心を

定家朝臣

君が代にあはずはなにをたまのをの

ながくと迄はをしまれし身を

同　同

家隆朝臣

おほかたの秋の寐さめもながき夜も

きみをぞ祈る身をおもふとて

続後撰集雑中

述懐の心を

前大納言忠良

世のうさを今はなげかじと思ふこそ

みをまもりはつるかぎり也けれ

節女歌集（二）

依月待友

笛の音を空にすませて月よしと

此山さとにとふ人もかな

柴の戸にさし入る月のかげきよみ

こがれてとはむ友をこそまて

雨後の月

かきくらす雨のうらみも吹ちりて

松のあらしにすめる夜のつき

雲間の月

しら雲のひまの匂ひのこぼるゝは

月のかつらの露にやあるらむ

心さへくもりみはれみあふくかな

いづこに月の光りみゆると

海邊紅葉

わかの原浪も千くさの色みせて
いそ山もみちいまぞてらせる

いそちかくこぎ行舟も紅葉の
色にうかれてしはしたゆたふ

紅葉淺深

染殘すくまもあるらしむら紅葉
一木の枝もいろごとにみゆ

光りなき谷でけなからうすくこく
そむる紅葉のいろに匂へり

風前紅葉

ゆふ風のそよくもたのし向の尾の
松に色そふつたのもみぢ葉

露ちりて心ありけになびくかな
風も紅葉のいろやそふらむ

紅葉露滋

こぼれきつるうさをわすれてみてをなむ
露もおやある山の紅葉

紅葉のにしきにつゝむ玉かとよ
いや置きわたす今朝のしらつゆ

野の秋風

やどるともめにこそみえねおのづから
くさ葉にそよく野べの秋風

花すゝき分行く野べのゆふまぐれ
身にしみそめて秋風ぞふく

深夜の鶉

山の端にまち出し月もさよ更て
かたふくをちにうつら鳴なり

吹まよふ秋風さむみさよ更て
うづら鳴たつ小野のかやはら



（つゞく）

十番歌あはせ（上）

諏訪忠元

初秋扇

第一番

左　津軽承昭

いまはとて扇もはこにおきてけり
　秋をしらする萩の葉風に

右　勝　蜂須賀茂韶

おのづから扇もけさは忘られぬ
　袖ひるがへす秋の初風

左の歌扇を箱におきつるは、萩の葉風の、秋をしらするによりてなるべけれと、右歌のことくおのつから忘れつるかた感情ふかゝらむ。

さもこそは涼しかるゝめ扇をも
　わするゝまでの秋のはつ風

第二番

左　松浦詮

きのふまてしはしもおかぬさし扇
　はや忘れよと秋風の吹

右　勝　井上正直

秋くれと露のひるまは一としきり
　扇の風をからむとそおもふ

左、是も、扇を忘るゝは、前の番ひとおなしけれと、おもむきかはりて、をかしう承りぬ。右は、左とうらうへにて、扇をからむとおもふ心詞ともに、いさゝかもたゆみなく、よくうたひあけ玉ひて、感情ふかし。

秋くれとおふきのかせをからはやと
　れもふこゝろそ人の眞心

また

しら露の老るまといひし言の葉に
　秋のあつさのしられぬるかな

第三番

左

きのふけふ初秋風ぞ立にける
　扇捨よと云ぬ斗に　　南部利剛

右　勝　　蜂須賀筆子

けさよりはわきて涼しな手にならす
　扇に秋の風かよふらし

左、初秋風といふ事あしとにはあらねど好ましからぬ詞にや。結句も、少しあらひたり。右はかひがしく、よみ出給ひて、感情あり。

　手にならす扇にかよふ秋風は
　　たゝすゝしさの外なかりけり

第四番

左　　前田利嗣

手にならす扇の風もおのづから
　涼しく成て秋はきにけり

右　勝

秋きても露のひるまはあつくして
　扇の風ぞ猶たのまるゝ

左風の涼しくなりて、秋のくるは、ことさらにめづらしきふしもあらず。右露のひるまはあつきなどおもむきあり。

しら露のひるまの暑さうへしてこそ
　扇の風をたのむなるらめ

第五番

左　持　　本多忠貫

秋くれど暑さの夏にかはらねば
　ならす扇もわかれさりけり

右　　寺田政成

おのづから扇の風のすゝしさも
　きのふにかはる秋はきにけり

左右きのふの夏にかはらぬとかはるとのけじめはあれど

秋のきてあふきの風はならす手の
　みぎもひだりも涼しかりけり

家兄遺文（四）

白松園主人

ねざめ草紙

第十八段

江良淵といへるは、かたへに深き山をおひ、岩いかめしくさし出て、いと心ぼそき淵なり。かれ、さと人、蛇の池ともいふめり。ある夜、若者ども二人そこにいきて、おそる〳〵網おろしけるに、忽、物かゝりてけり。ひきあげむとするに、えもいはずおもくて、網もちぎるばかりなれど、手をゆるぶるに、する〳〵とひきこむ。ひきあぐれど、又、重くてあぐべからず。二人の者いたく驚き畏れ、さゝやくやう、こは池主なる蛇のわざなめり。とかく、一人がかへりて、おとなびたるものをよびてむ。其の間、こゝに網とられぬやうにすべしといふに、留守をゆづりあひて、つひに網をむくひにつなぎおきて、二人ながらかへりいにて大人びたるものにかくとつぐるに、なでうさる事あらむ。石などにうちかけたるにこそとて、とりあはぬをしひてゐてゆきけり。さてその男あかはだかとなり、水底をさぐり見るに、はやくも、大きなるまろき石にうちかけたるにぞありける。

第十九段

ある秋のころ、山手大神宮といふ社に詣でけり。この社といふは、そのかみ所の守の、山口太神宮の遥拝所にとてたてたるなり。されど、昔は参詣の人、くびすをつぎて、いとにぎはしかりけれど、今は世くだりて人影も見えず。いかめしくたてめぐらしつる瑞籬も、大方はくづれはて、庭は千草おひかはし、清むる人もあらねどや、かれしど、うづだかくふり積みて、足もいれがたきばかりなり。伏しをがみながら、殿の屋根を見あぐるに、葺萱、かしこゝはげ渡りて、扉などくろ〳〵と、雨じみたり、軒はしのぶ生ひ繁り、くもの糸ひきわたし、虫のふしどゝなりにけり。あなかし

こ、やんごとなき神も、世かはりては、御心のまゝに〳〵かなへさせ給はぬかと、そゞろに涙落ちにけり。かはらぬ物は、たゞ岩間にさける秋の花、萩尾花などのみなり。瀧もむかしは、音もとゞろにおちしかど、今はかれはてゝ、水一トしづくだに見えず、(自註、かきくもり瀧の源雨もふれ水見てだにも人のくろかに)苔あを〳〵と生ひむしけり。かたへの清め水の屋の杜に、たがわざにや。

五十鈴の瀧のおとこそたえにけれ
　　いくよもつきじ神のめぐみは

と、おともあやしうしるしたり。しるべの童がいふ。このほど若き女たゞ一人、ねぎ事などありけるにや。たえず詣でけるが、そがわざならめといふ。男などにあかれけるか、昔にかへるべうねぎまつりしにこそあらめ。かくあれはてたれど、神のめぐみは、昔にかはらず、いとたふとくて、はやくもねぎかなへさせ給ひし事の、いと畏くもうれしくて、かくはつゞけゝるならし　いといみじくもあはれにこそは覺えしか。

第二十段

ある深山に、大熊一匹、谷間におりて岩をさしあげながら、下なる蟻を、その子にひろはせゐたりけるに折ふし夏にて、雷にはかにいみじうなりいでけるにうち驚き、おぼえず岩をも手より放ちけり。熊おどろきあはてつゝ、岩をあげ見るに、はや及ばず、下なる子は、むざんにもひらめになりてしにけり。自らあやまちて殺しけるをもえ悟らで、他の敵のわざぞと心ねてまなこを怒り牙うちならして、怒れるさまいとすさまじ。をりしもあれ、雷獣といふけもの雷におそれて、そこに走り出でけるを、熊は、子の敵と見てければ、飛びかゝりて、忽ちにくひころしけり。子をおもふ心はいみじけれど、おのがあやまちをば、え悟らで、怨を他にうつしけるなん。さすがに畜生なりける。

(ねさめ草紙をはり)

(以下次號)

ちゝのをしへ

ちゝのみ

世の中は、直なれど立ち、曲れど倒る。即ち板垣を見よとの太田道眞が言、誠にさることどなり。其の子道灌が、屏風をもち出で、曲なれど立ち、直なれど倒る。之は如何にど、いひけるも、其の奇才、實におどろくべしといへど、そは才ある人の一時の興にて、もし心より直ぐなら



ず倒ゝるは必然。屏風とて、まげて下につけなど、忽ちに倒るべし、蒲生下野守より、土井大炊頭殿へ子細ありて、安達内匠と云ふものを使者として遣はされけり大炊殿、之にあひ給ひて、使の用事を問ひたまひけるに、内匠、手をつき、うつぶきたるまゝ、しばらく物を言はず、大炊殿は、之を見て、何としつる。目暈やしつる。腹痛にもあるか。物も、言はぬはと思ひ給ひける程に、内匠申けるやう誠に粗忽の身、御口上の一くさりを忘却つかまつり候恐れ多き事ながら、御次へ退き、思案つかまつりて申

上げたく候と述べければ、大炊殿さゝ玉ひ、さやうなれど、くるしからず。それにてゆる／＼思案つかまつるべしと仰せて、座を立ち玉ひぬ。あとに、内匠はやう／＼思ひ出で、あらためて大炊殿に面會し、さて、口上の首尾整ひけるとなり、大炊殿、いたく感ぜられ人多しと雖、内匠如きの使はあらじ、當座の首尾あはするを、専らとして、忘れぬる事をもおかしくし、よき程につくろひかへるを。内匠の行ひ實に感ずべきなりとて、下野どのへ、ほめ聞え玉へりとなん。人によらで主人の使を忘るゝ不調法者とそしらんを。大炊殿も大炊殿、又、人の笑ひをも恥かしさを忍びて、眞實に使を全うしたる、内匠の心ぞへもよみすべきにこそ。

滅金

田端の留守居

滅金とは、黄銅、銅等の金類に、金銀をきせ、殊の黄金、銀と見せ、時計のふち、指環、煙草入、煙管、女子のかざし等、其の他さま／＼のかざり物に用ふ。げに、他目にはたま、光る黄金しろがね、まばゆきぞかにおぼえ、さらに、黄銅銅など、思ひもかけず覺ゆれど、久しく使ふに從ひ、おのづから外がはの金ははげ、銀はおち、遂に本性あらはし、其にせものたる事のあらはれて、まこと、銅、黄銅、そのまことにおかんよりは、中／＼見ぐるしとも見ぐるし。人も、また、内心をおきて、外貌をのみかざるものあり。内心は夜叉の如き恐ろしき刄をさめ、形を菩薩の如くてらふあり。心は私慾深くて、外貌を清廉潔白によそほひ、外無邪氣げにて、内邪心深く、内うばらのとげ／＼しき心にて、外薔薇の花の香さへ、床かしげによそほひ、殊に仁あり。義あり。禮あり。智あり。信あり。げに人も人、殊の人あつぱれ君子賢人、淑女の風采をよそはひて、内、匹夫匹婦にだもしかざる行ひ、これえせ賢人、えせ淑女にして、例の金滅金銀滅金とことなら

す。はじめは、誠に賢人、淑女と仰がるゝも、久しくなるに從ひ、滅金はげて、本性をあらはし、小人俗婦、惡人毒婦の本性あらはれなむ、匹夫匹婦よりはいよいよにくゝ、すさまじく、はづかしきものに見られつべし。あはれ、人々、滅金はやめて、心を黄金にし、心よりみがき上ぐべし。くらからぬ心の玉は誰ももつものぞ、みづからあやまりて、あかゝね、しんちゆうとなし玉ひそ。めつきの金となり玉ひて。はげやすき滅金などにはなり玉はで、心より玉としみがき、黄金としたて玉へや。

うれし涙（上）

石川彦太郎

何時の頃にかありけむ。國も、さだかに覺えねど、玉敷の都には、程近からぬ、深草村の、寂しき片山陰に親子三人、いと睦まじう住居けり。兄は清雄とて、今年二十歳にもなりぬれど、公の召しに應じて、身を軍籍におく事とはなりぬ。然れど、あとには、只、父と十三ばかりなる妹、澄子とのみ殘れりけるが、素より、淋しき田舎わたり。其の上に、今は、親子二人暮しなれど、さうぐゝしさ言はん方なく、花の晨、月の夕都なる兄の事忘れ難く、常に便りをのみ待ちわび、父も、亦、御國の爲にこよなき勳功を立て、譽ある名を擧げてんものと、其をのみ、ひたすら念じわびつゝ、互みに物語りてなむ、徒然を慰むよすがとはしける。

斯くて、ある日のことなりけり。都なる清雄のもとより。文おこせたり。妹は喜びて、そを、父の御前にさし出せど、父も、大にうち喜び、取る物も取り敢へず、封かき切りて、讀みもて行くに、こは、そも如何に、昨日の夜、門衛に立ちける間に務めを怠りて、暫時眠りたるか爲め、直ちに、軍隊の掟に觸れ、死刑の宣告を受けねばならぬ事となりけるとよ。哀れ、こを讀みたる父の驚きや如何なりけん。又歎きや如何なりけん。哀れ、そを聞きたる妹の驚や如何なりけん。又、

悲みや如何なりけむ。共に涕にかき暮れて、聲も惜まず泣き叫びぬ。

泣く聲に驚きて、隣の媼馳せ來たり、何事ぞと、頻りに問ひ寄れど、父は漸く、涕を拂ひ、事の由を物語りしに、媼も、たゞに驚の外なく、暫時は、言葉も無かりけり。やう〳〵にして、媼はなく〳〵、父子に語りて云ふやう。實に、花に嵐、月に雲は、世の習とは云ひながら、恨めしとも、亦、悲しき、極みになむ。故郷に居給ひける程は、里人どもに愛ではやされし花の姿の麗はしき優しき御子なりしに、澄み行く月の淸らなる、高き心の數多の人々に仰かれ慕はれし、御兄上なりしに、一度過ちありしとて、其の花を散らす、無常の嵐の怨めしさよ。其の月かくす心なき浮き雲のつれなさよ。媼が心は、此の花によりて、春の長閑けさを覺え、此の月によりて、秋のわびしさを慰めし物を、口惜しき事してける物かな。今より後は、何によりてか殘れる春秋を過ぐさんとて、さめ〳〵と泣き、はらはらと涕を流せど、さらぬだに打ちしほれたる親子のけはひ、又も、目も當てられぬばかりになむなりにける。軈て、父は涕をぬぐひ、媼に物語るやう、事既に斯うなる上は、徒になげくも悲しむもせんなき事、今は是迄なりと思ひ明らむるより外なけん。我素より、今更怠れる、我子の死を驚くにもあらず。又、悲しむにも非ず。始より、國にさゝげたる命なれど、生きて歸るものとしも思はざりけり。せめては、國の爲に、我大君の爲に高き勳功を立てゝ、譽れある死をこそ願ひつれ。然るに、敵の彈丸に殺されず。戰場の烟の中に葬られずして、あたら命を怠りの刄に斃さんとは思ひかけきや。思へど〳〵、世に恥かしき子持てる親かなと。又もうつぶして、泣きぬ。

時に、門前、鈴の音高く響きぬれど。妹は、涕を拂ひつゝ、出でゝ見るに、兄よりの玉章なりけり。またも、膽つぶるゝばかりの心地して父の御前にさし出せど、父も、また、驚きて、開き讀まんとすれど、手ふるひ

て、落つる涕の玉は、讀み行く文字の數よりも、茂けれど、嫗に見てよとさし出しぬ。嫗ひらき見れど、昨夜の文は、今日、父上の御手にて開かれたるなるべし。御驚、御歎き、御腹立の程、さてこそとは推し量り侍れど、今はせん術無きこととなれど、御明らめさせ給ひて、不幸の罪は、幾重にも許し給ひてよ。おのが命の玉の緒も、最早、二十四時間の後には絶え果つることゝなり侍りぬ。明日は、早や、斷頭臺上の夕露と消え死の神の御供して、あの世の人とならむかと思へど、流石に悲しうて、せめては、今一度、なつかしき父上の御顔も拜し奉らま欲しく侍れど、如何はせん。死期、既にせまりて、故郷の山、雲井に、遙けく、徒に、このまゝにて止まんことのうたて口惜しさ、推しはからせ給ひてよな。陣頭のけざまに斃るゝことありとも、脊に、矢を負ひてな歸りそと門出を警しめ給ひし、父上には、こたびの、己振舞をこよなう恥しき物に思し給ふならん。然れども、このたびの事は、深き故由のある事にし侍れど、願はくば、左に記すことども、一わたり見給ひて許し給ひてよ、

去にし長月、十三日の朝まだき、白尾山の戰に、敵を撃ち退けて、翌十四日の夜、我營內に歸りしが、其の日のことなりき。兵士は、何れも、數日うち續きての戰に疲れたるが上に、其の日の行軍道程は、ほと〳〵いつもの二倍に餘りて、何れも、皆、困じ果てたるが中に、同鄉より出でゝ、親しく睦びかはせる友人、桂次は、殊の外に弱りて、身につけたる武器も、いと重げなるが上に、足さへ病みつれど、步みも敢へず、勞はしげなるを、打ち棄てゝ歸る心地、如何でかし侍らん。況いて、故里を出つる時、彼が父母より扶けやりてよと、わざ〳〵賴まれて侍れど、いとゞ忍び難くて、遂に、彼が、背嚢も、銃劍も、おのれ携へ、おのが肩に、彼を扶けて、夜に入りて、やう〳〵歸り來りけるに、生憎、その夜、十二時より

の門衛は、悲しや、友人、桂次の順番と定りぬ。斯く疲れはてたる彼、死ても、此の重大なる責任を果し得べうもあらず。依りて、おのれは、彼を、いとほしく思ふの餘り、おのが疲勞をも、打ち忘れて、遂に、彼に更はり、此の警固の大任に當り、はては、斯る始末となりぬることそ悔しとも、亦、かなしかりけれ。

斯れは、世の常の怠りとな思し給ひそ。我邦の爲に、我、同胞の爲に死ぬる我身、恥しとも、悲しとも、思はぬのみか、なか〳〵に、嬉しく、喜ばしくなむ侍る。なほ書き記したき事共、數多あれども、流石に、涕にかき暮れて、文字見えわかねど、是にて、筆止め申すべし。あなかしこ。

と讀み終れど、今迄うちしほれたる父、俄に氣色立ちて、喜ばしき色、面にあらはれてぞ見えたりける。然れども、亦、何思ひ出でけん。再び、悲みの涕に、乾かぬ袖をぞぬらしける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

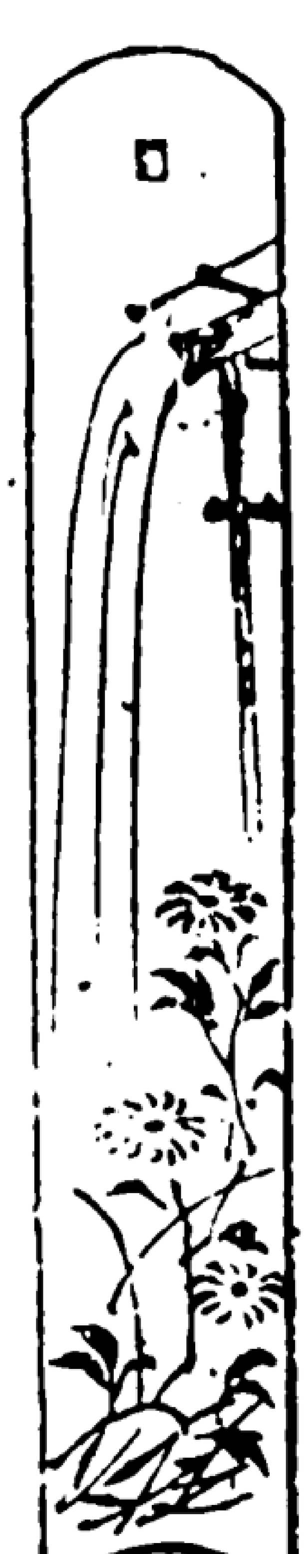
尾の上の松に落ちかゝる夕日の影のよわり行く有樣を見ては、兄の心も、斯くやと告ぐるが如く、松が枝より落ちて、山際に沈む影の、わきて早きは、兄の死に近つくも、斯くぞと知らしむるにやと思はれて、立つに、立ち難く、居るに居る能はで、獨、小庭に下り立ち、彼方、此方をながめやるに、夕烟、野邊のあなたより、こなたの山下かけて、一村たなびき渡り、麓の古寺、入相告ぐる鐘の音、微かに鳴き渡り來る厂金の絶えては頻り、しきりては、又、絶ゆ。物思はざらむだに、露けき秋の暮なるを、況いて、澄子の心のうち思ひやるこそかなしくも、亦、哀なれ。

けふは、長月望の夜、冴かなる月は、野末の露をかき分けて、あらはれ出でたれど、泣き暮したる澄子の曇れる目には、左まで、澄めりとも、清しとも見えず、なか〳〵に、彼の霧のあなた、月の出でたるあたりこそ、今はの兄上の居ます處なれど、思ふにつけても、

耐へ難うて、垣根の石に腰うちかけ、傍なる楓の枝の撓みて垂れたるに、手うちかけて、せまれる息をふと吹き出せど、野末を渡るさよ嵐、梢の紅葉を散して諸行無常の理を說き、澄子の髮を吹いて、亂れたる心をそわらはしける。

澄子は、何思ひけむ。俄に立ちあがり、周章しく、おのが室にかけ入り、硯に向ひて、一言二言書きしるしたる文を、その几机の上におき、兄の最後の文を懷にして、父の見給はぬを幸に、門おし開き、かよはき足を急かせて、馳せ出てたる。村はづれなる辻堂の前よりふりかへり見れど、我庵は、早や、夜霧の中に包まれて、窓もる燈火のしめりたる影のみ心細げなりけり。

澄子は、只獨り、月影、冴え渡る野路をたどりて、千草の花におく露を踏み亂し、弱り行く虫の聲々、驚かしつゝ、行くに、未だ、夜路などあるきしこと無き處女子、心の中は如何にはやれども、足は、軈て、疲れを覺ゆ、時々、小川の流れに、口そゝぎ、涸れたる咽喉をうるほしなどして、休息ふ程に、裳裾は露にそぼぬれて、何となく重げなるに、夜寒の風のつめたさが、衣を透して、身を刺すやうなり。然れども、休らふこともえせで、なほも辿り行く程に、野邊も過ぎ果てゝ、山の麓に着きぬ。是より、一里ばかり山路、晝の程は行き通ふ人も、多かれど暮れての後は、人影絕えて無く、只、遙かなる高嶺より吹きおろす夜あらしに、松の梢の騷ぐ音、岩角に衝き當りて碎くる、谷の水の白玉、何處ともなく聞ゆる、さを鹿の妻よぶ聲、をり〳〵驚く、木傳ふましらの鳴く音、是等の外には、絕えて見るものも聞くものも無き物淋しき山路、一たびも踏みしこと無き處女子の只ひとり越え行く心のうち知るものとては、をり〳〵曇る月より外にはなからむかし。



意氣（四）

白魚女史

そむきても、なほ、捨て離きはうき世、花子の父は春川梢、號を樂山、仁者にあらずと云ふ印を押すもをかし。今年、四十二三歲、國學者として、名も卑くからず。ある高等の學校の敎授となり。位も可なり、人望も卑からざりしが、心剛直、とかく校長、敎頭等と論あはず。遂に敎授を辭し、官省に就きしかど、此處には、なほ。遂に世をおもしろからず思ひ、都をすてゝ、山には入るものゝ、流石に、身、妻子は捨てかねつ。從つて味噌、醬油、酒の通ひなくてな叶はず。是非なく好める文章をつくり、又、近邊の名なき學校に出で、賜るにまかせての給料、多くもあらねど、乏しくもあらず。磊落か。區々たる心か。たゞ娘を肴に酒を飲み、文章に不平をならすをこよなきなぐさみとすれど、人も、また、をかしくも、おもしろくも思ひ、好みて、之が、文をよむ者多し。

春もやよひ、をちこちの櫻、今を盛り、音に聞ゆる音羽山、よき人のよしと云ふなるよし野山、さては、小倉山にくらぶ山の花、くらべんとはせず、梢は、たゞ同病、見る人もなき、此處山かげの櫻を日毎に尋ねて、もろともにあはれと思へと歌ひ、家路をも忘れてながむる夕つ方、むかしむかしの嫗と云ふほどよりは、少し若きが、川へ洗濯にはなくて、山へ柴こり。さのみは多からぬを重げに、まろびつ、こけつ。

爺は、何をかなしをるらんと、梢、ふと眼をとゞむるに、何處らには見もつかぬやさしきかひな、華奢なるくびす、色もさのみは黑からで、頭に霜ふりたれど、何處にかは殘るむかしの香り。もしや引田部のたぐひにはあらずや。さやうの赤猪子、ひとりものにも見えず。さては、むかしよしある人の妻か。さなくとも、何れ、深山木にも花、材料袋にをさめんものとて、袂の手帳をふとさぐり見て杖をひきつゝ、あとをしたひ

ぬ。

彼方はかくとも知らず。草履やちぎれけん。やがてうちすて、足や痛めけん。にはかちんば引きつゝ、たどり／＼山路を下りける麓に、若き男子と行きあひけるが、ヲー、一作、よう來てくれし。少し足を痛めたり。之れもて行きてたもれと背なる柴を下ろすに、男はにがき顔、さやうのもの今日でなくとも事足りなん。捨て行き玉へ。僕は之より散歩に行くなりとて、すげなく過ぎんとする袖をとらへて、こ、こや、一作なさけない。又、彼處の銘酒屋に行くならん。其方は如何してさやうに情なくなりたるぞ。それは、父上の癇癪、堪忍袋も切れやう。やけも起らんが。われは病故、父様とて、つねはおやさしかりしを、人のために、にはかの瓦解、今、一身だいをと思ふやさきへ、あの御病氣の、身躰はきかず。氣はあせる。其方をいつまでも掃除夫となしおく事のくやしさ、かなしさ等に氣はもや／＼それ故の御癇癪、其の內に病も怠らば、お氣も靜まらん。どうぞ何事も病故と思うて、今迄通り辛坊してたもれ。のう一作、實に、今まで、一年ごし、數ふれば、四百日からの父様の御かんしやく、一言もさからはず口がへしもせず。男の身によく辛坊してたもると、母は、つね／＼心に泣きをるばかり。やけを起すも道理にはあれど、不びんと思へや。母とて、お前と同じ事あひ身、互ひ身、父様の御病氣の介抱、お前へのきがね。貧乏世体のくりまはし等、實にあけしいまもなき、此の母をも不びんと思うて、一作、共に辛坊してたもれ。今少し目鼻もあかば、其方の氣にあふ嫁を向へて、初ひ孫が世話、其方の孝行の報いには、必ずしてんと思ふに、のう一作、今少しの辛坊をのうとて、泣きつ、くどきつする母親の涙、しめりて聞きたる一作は、又や面の色をかへ、誰が、氣にあふ嫁などが、くるものか。僕は掃除夫、いやしき／＼掃除夫、親にさへ下げすまれをる掃除夫の所へ、何、氣にあふ嫁の來らん。かけても及ばぬ事、嫁など、僕はもたぬ。一生もたぬ



おくびにも云うて給はるな。孫の世話も、僕の世話もうもいらぬ。用なしとて、引く袖をもぎらんともがくを、母親は、なほ一生けん命、しかととらへて、一作なせ、さやうに情なき心にはなりしぞ。それは、其方も好みて、掃除夫となりしにもなきを。父上がわけくれの掃除夫呼はりは、氣にもさはらんが先きにも云く通り病故、何もこらへてと言葉も半ぞ、一作はぢれつたげに、うるさし〳〵、もうるさし、父上の癇癪より、母上のれ說敎、馬の耳にはとうていひゝかず。向ふのあき寺に行きてとき給へ。蜘蛛からうけらかまれには道心起すものもあるべしとて、袂をふり放つを、こや、一作、其方は氣にてもちがひたるか。あまりなる母を輕蔑のし方、やけにも程がある。其方とて、根より敎育のなきにもあるまじ。論語の、一つ位はよみたるもの、盗泉の水はのまずと云ふ事も聞きつらん。ヲーなまいき。なまいき、母樣はなまいき。かは知らねど、それはかりの事は云はでも、其方も知りをらん。何はとも、今日はやらぬ。歸りてくれ。たのむ。母が手を合せて拜む。わはれと、思うてくれと、つよく出で、またよわく出で、ほろ〳〵と涙をこぼす、頭の上の電信線につむくらめ四六羽。誰により翅は生ひしの先きの日の句思ひ出でゝ、一作思はずもあたりを見亘したり。

愛しき人々のために

まにく陀



昔、あるところの飼犬が、午餐の料に、一片の肉を貰ひました

凡べて、犬といふものは、自分の好なものを貰うたときには、大層喜んで、口に咬へて、驅けあるくものですが、今、非常に好きな、肉をもらひましたから、堪へられませむ。方々と驅けあるいて居ます。丁度、御庭の泉水に架つてをる小橋の上に、往ッた時で御座い

ました。

フイと、下を見ますと、下にも、自分と同じ様な犬が、自分のものよりは、少し大きいかとも思はれる肉を、咬へてをるのを、見つけました。

この時に、悪犬が、

イヤ。彼犬の肉も、食ッてやらう。

と思ひまして、其の肉に、飛び付かうとする拍子に、口を開けたから、自分の咬へて居つた肉は、泉水の中へ、落ちてしまひました。

肉を咬へて居ッた犬も、其と同時に、見えなくなッてしまひました。

左様でしやう。下の、犬と見ゑたのは、自分のかげが、うつたのでもの。肉が、パチヤンと落ちたのですから、水がうごく、沈埃がさわく、其で、其のかげは消ゑてしまうたのです。

わるいこゝろを起したばかりで、其の犬は、遂々自分の午餐を、なくしてしまひ、夕餐まで、空腹をせぬければならぬやうな、困苦をうけました。

太郎サン、この御話をきいて、何と思ひます。操子サンも。

文林



水邊薄　東久世通禧

大くらの入江のはちすうらかれて
尾花のなみにあきかせそふく

秋山路　鍋島直大

けはしさも忘れてのほる山みちは
先にもみちのあれはなりけり

菊　高崎正風

いろ／＼にさきにほへとも菊の花
かはらぬものは千歳なりけり

田上雁　　津輕承昭

秋風のひたふきならすおとたえて
門田しつかに雁そなくなる

夜虫　　池田政禮

賤かうつきぬたも月にさゆる夜は
野になく虫のこゑしきるなり

曉紅葉　　前田利鬯

有明のつきかけうすくなるまゝに
あかく見えけり峯のもみち葉

故郷擣衣　　長谷信成

故郷はうつらなくまてあれたれと
なほすむつきに衣うつなり

雨中思月　　諏訪忠元

ともすれとはれもやむとふる雨に
みえぬこよひの月をしぞおもふ

松風入琴　　岡部譲

妻ごとのしらべにかよふ松風は
いつの世よりか契りそめけむ

瀧邊紅葉　　宮地嚴夫

岩はしるたきつ流をもみち葉の
にほへる枝のうへに見るかな

河邊菊　　坂正臣

香にゝほふ波こそたてれおほゐかは
みきはの菊のはなのさかりは

秋晴　　大口鯛二

こゝちよく晴渡りたるおほそらに
見ゆるは秋のひかりなりけり

菊をかざして　　鍋島榮子

人もまたたゝにすきうく思ふらん
折かさしゆく野ちのしらきく

旅宿鹿　　前田朗子

いつかたにを鹿なくならん旅やかた
まくらに聲のちかくきこゆる

萩ちらんとす　　柳原愛子

虫の音はまださかりなるにはの面に
　うつろひぬへく見ゆる萩かな

山路霧　小池道子
もみち葉の色は夕日にてりなから
　山みちくらしきりふかくして

初紅葉　松平健子
もすのなくかたへを見れど朝露に
　ぬるてのもみち色つきにけり

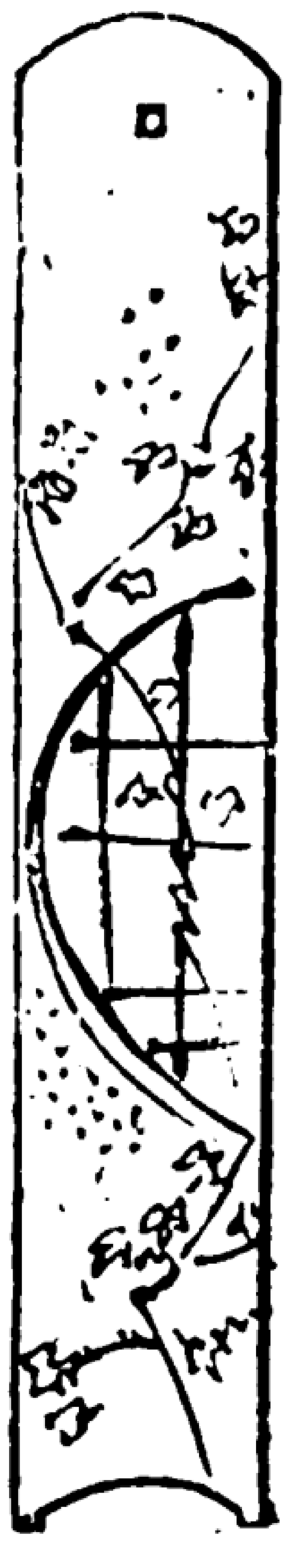
秋眺望　下田歌子
うちなひく尾花のすゑに道みえて
　夕日かけそふかはそひのさと

庭秋草　佐藤艶子
こそよりも咲そひに鬼八重むくら
　拂はぬにはのなゝくさのはな

雨後紅葉　鶴久子
今過しあめのなこりにうつくしく
　ぬれ渡りたるはぢのもみち葉

秋日山行　岩崎寧子
山つたひ落くりひらひきのことり
　わりてひらくも忘れけるかな

菊をよめる歌　海上壽子
花にさく、秋をたのみて、春へより、心を盡し土もかひ、水もそゝぎて、植ゑたてし、まがきの菊は、うるはしく、咲き出にけり、さまざまの、色はあれども、金なす、その菊はしも、折りとりて、小瓶にさせむ、我家も、富むこゝちせり、銀なす、しら菊はしも、折とりて、かざしにさせむ、我身の老もわすらえ、おむかしき、花にもあるかも、あはれあはれ、そか菊の花、しら菊の花。



つきせぬなげき（二）
師岡須賀子

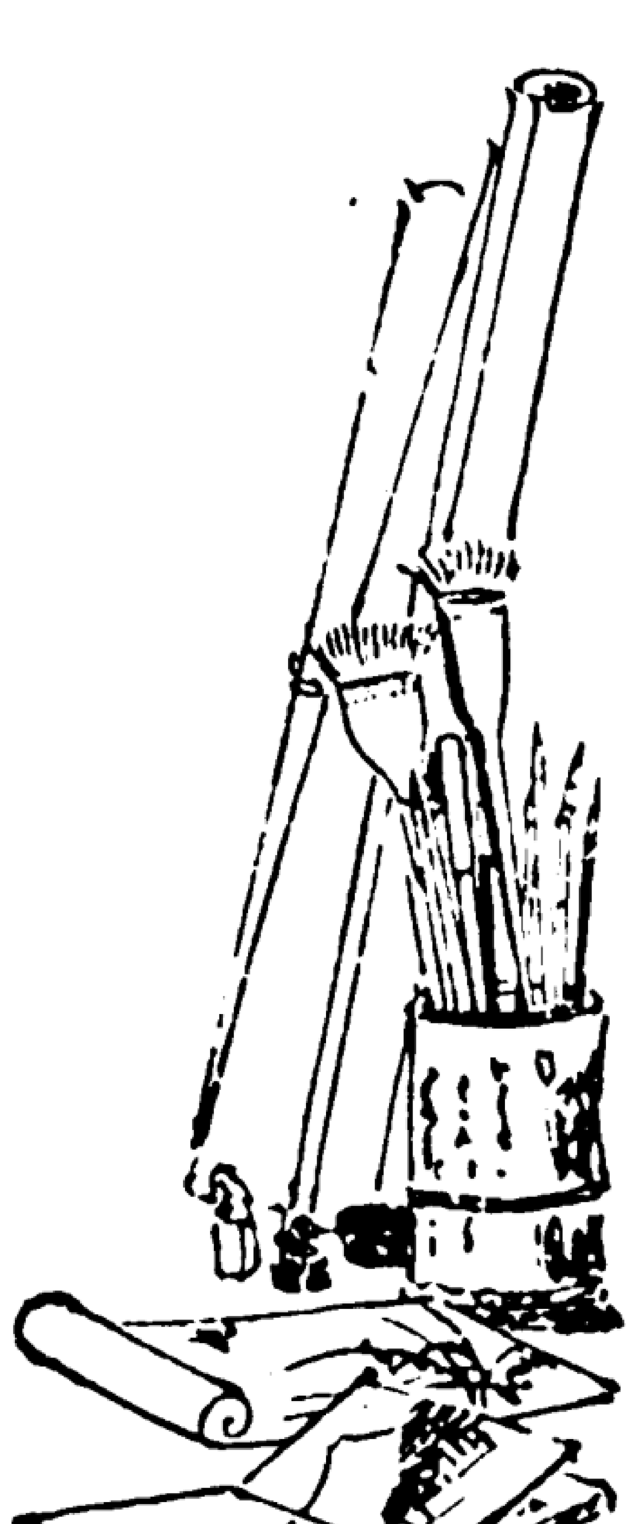
其れよりは、思ひの外に早うよろしき方におはすに、

年のいそぎの事繁きにつけても、疾く病癒えたまひて、來ん年の初には、その御祝も合せてめでたくしたしやなど、一向祈られぬ。程なく暮れて、今年となりぬ。元日の朝、祝物とも、御枕邊におきならべたるに、いと喜びたまひて、やをら起き上り給ひし折の事なん、去年の暮の危かりしにもまして、怖ろしき身もふるふ計なりし年の始め、人のおとなひ、文の往來、いとゞ繁きに讀みて聞かせまゐらすも、少しはまぎれ給ふやと計になん。此方よりのは、歸省療養中と印刷せるなれど、驚きて見舞ふ人々も、少なからず。代筆せらるゝ程篤しくやなど問ひ遣すも、數多なるが嬉しきものから、心細くてなん。かくて、十五日となりぬ。この日は、朝より、風強く、寒さもわけて、甚しかりしにや、その夕つ方よりは、又々、去年の末の如くなり給ひぬ。母上も、千代子も、心も空にて、醫師も、繁く見舞つ。手當のさま〴〵なるに、我身にかへてもとのりつゝ、二十二日となりぬ。今霄は、醫師も、三人あり。兄上なる人も歸り來ましぬ。明日は二十三日にて誕生ましゝ御日なり。何して、御祝し進らせんなど、打よりて問ひまゐらすれど、只、嬉しげに、何事にか云はるゝ樣なれど、今は、少しも聞きとれず。年の初の程より、漸々咽喉には、濕潤の擴りて、御言葉の、いとつらきやうにて、絶えず承り居る母上と、我等三人ならでは、醫師にすら解せざるまでになり給ひぬるも、心細さ限なくて、はふり落つる涙を强ひてまぎらはすも、我のみならずかし。醫師は、いつれも御容体よし、宿泊らずとも、宜からん。明日早朝見舞せん。若し痛み給はゞ、とせよ、何時には、かくせよなど、樣々注意して立ち出でつ。それより霄のほどは、變ることもおはせず、十一時半よりは、御顏の艶、云はん方なく艶めき美しくなりて、御手足の先腫れ、御脈も遠く暖み、少くなり給ひぬ。急ぎ人々を起してさま〴〵に、手當し、おのれと千代子とは、互に、御肌をあてつゝ、御藥はもとより(ペプトン)の

灌腸、葡萄酒、葡萄糖の注射怠りなし。人を電信局に奔らせて、醫師に親族に云ひやるが歸り來る程も心元なしや。かくて、午前四時にもなれど、何れの醫師の家も遠けれど、未だ來ず、其の程の事、今思ふも、夢心地なり。御藥の料は、ます〳〵多くし、灌腸の度は繁くなりぬれど、只、御咽喉の鳴りたまふのみ。御脈は滋くなれども御目の動くこともなし。あはれ、父上よ、父君よと、右より、左より呼びもし、叫びもしまゐらすれども御答もなし。されど、御顔の色の美しきと、身内の暖まり給へれど、せめては、何れの所より、醫師の來は、何とか術もあらん。早く〳〵と祈るも、只、心の空なり。今は、御脈絶えぬ。此れ迄の御事ぞと兄上はいふ。其は口をし、今、一度灌腸してをとくといといよゝ心も空、又しまゐらするはと、息出て、御口動かし給ひぬ。嬉しとは世の常、誰も〳〵蘇生る心地、いかで〳〵、この間に、醫師をと待つに、三十五分といふに、又々もとの如くなり給ひぬるに、此度こそはと思ひしらる。實に人の世の悲しき極余りの事に聲も出でず、涙はもとよりなり。轟き渡る車の音に驚けど、醫師親族の人々の續きて來るなりけり。今少時早かりせどとは誰も〳〵思ひて、言葉には出でず。それより、例の作法になし進らする程も、只、夢の樣なり。今日しも、御誕生日よ、御祝せんといひつる物を、其の日しも刻くなり給ひぬると思へど

かなしさに忘れぬ日とはなりにけり
千年の數といはひしものを

かくはかり術なきものか昔しには
死なぬ藥も有りと聞きしを　（つゞく）





●御救恤　七月中旬、鹿兒島縣下に於ける八月下旬香川外五縣下に於ける風水害にかゝりしへ、左の通り御救恤金御下賜せさせ給へり。

金五千圓　麑島縣　金六千六百圓　香川縣
金六千圓　高知縣　金四千五百圓　兵庫縣
金四千三百圓　岡山縣　金千六百圓　愛媛縣
金千五百圓　德島縣

●東宮殿下の御仁德　去る十三日天野靜岡縣警部長沼津御用邸に伺候せしに同縣下水害の情況を御下問あらせられ甚憫然におぼしめされ直に中山太夫を以て、金三百圓を下賜せさせ給へり。

●東宮立妃の御發表期　東宮立妃の御事は、來る十一月天長節を以て發表あらせ玉ふ可き御豫定なる由、扨て、入内の大禮日に就ては、目下有栖川宮殿下を始め奉り、伊藤、大山、松方、土方等の東宮御所祗候、及び、德大寺内大臣、田中宮内大臣、中山東宮太夫等、我國古來の典例と海外、各國の儀例とを參酌して協議中なり。但し、其の期日に就ては、二個の意見に分れ居る由にて、即ち、一は明年中に佳節の日をゑらびて行はせらるゝを可とすと云ひ、他の一は、先づ、立妃の事を發表あらせ玉ふ上は、大例の典式は東宮御所御造營竣りて、後新御所に於て行はせらるゝを可とすと云ひ、未だ、評議一決せざる由なり。又、立妃の御式の後、皇太子殿下歐米各國御遊覽の事も、有司中には非常に企望し奉る者多けれど、是、亦決せられざる由。

●各御息所　皇室の愈倍しに繁らせ玉ふこと、最とも喜ばしき限りなるが、扨、今維新前後より、我皇族御結婚の御關係を記し奉つれば、概ね、左の如しと承はりぬ。

故有栖川大宮殿下　濱口伯
故北白川宮殿下　島津公
小松大將宮殿下　有馬伯
伏見中將宮殿下　有栖川宮殿下
有栖川中將宮殿下　前田侯
閑院中佐宮殿下　三條公
小松少佐宮殿下　岩倉公
山階大尉宮殿下　九條公
華頂大尉宮殿下　德川公
久邇中尉宮殿下（御撿定）　島津公
梨本中尉宮殿下（同）　鍋島公

●節婦孝子の行賞　淺田神奈川縣知事は、賞狀を節婦伏見きく、孝子中里定市に與へたり。近來、世人の德性廢頽し、市井無賴の徒多きにも拘はらず。此の善行彰表を見る。筆にするも心地よき限りなりかし。さて、其の節婦といふは、神奈川縣相模國津久井郡湘南村中里市左衛門妻伏見きくといふ者にて、稟性溫順、善く、夫に仕へ、夫が脊髓病に罹りて、身體自由を失ひ、生計困乏の時に際しても、更に貞實を忘ず、艱難に堪へ、湯藥の資、看護の力、一として、其の不足を感ぜしめたる事なし。實に、十有二年の永き間操行、一日の如く、貞烈、以て龜鑑たるべきに依り、金三圓を下賜して、其の善行を褒められたり。又、孝子といふも、同市左衛門の養子にして、中里定市といふ資性、實直年、僅に十四なれども、養父が前記の重症にかゝり、起臥心の儘ならざるに當り、能く病蓐に接して、養母と共に介抱に、力を致し、幼弱の身をも顧みず、耒耜を採りて耕耘し、其の外、勞役に服して傭銀を藥餌の料に供し、養父の爲には嗜好なるものを購ひ求めて、これを薦め、誠悃慰藉至らざるところなし。寔に孝養の實を擧たる者なりとて、賞狀と金二圓とを下賜せらる。

●孝子爲助之碑　萬治年間の孝子丹後國天田郡雀部庄蘆田爲助の美德を頌表せんため、同村民等紀念碑を建立せり。刻字は伏見宮殿下の御染筆に成れるものにして、建碑式には、知事旅團長等の列席ありて、盛大に行はれたりと。

●貞婦　陸中の藤田常吉妻チヨは、能く、舅姑に事

へ、夫に對し貞操を盡し、家政に精勵し志行を變せざること十八年、一日の如し。事縣廳に聞え金二圓を賜はれり。

●孝子　尾張の武田又吉といふは、四歲にして、母を亡ひ、父は逃亡し、祖母は病に臥して起居自由ならず、やう〳〵、祖父に育てられしに、家計困難なるより、その祖父又縊死せり。又吉、幼年を以て獨力家政と看護とに任じ、孝養怠らず、四隣、其の孝を感せざるはなし。縣廳、金を賜ひ、之を賞す。

●孝女　岩代本宮に髮結を業とせる、ステといふ者あり。元は鎗一筋の家に生れしも、家道衰へ、兄は放蕩に身を持崩して、逃亡し、父は中風症に罹り、母は眼病の末盲目となりしを、ステ一心に孝養を盡し、辛くも一家を維持するうち、兄は諸方を漂流ひて突然てのごろ歸り來り、我儘の振舞多きも、ステ怨みず、益益、之を敬ひしに、流石の兄も翻然として悟る所あり、今は兄妹、心を合せ父母に事へて孝養怠なしとぞ。

●また　羽前和田次兵衛の妻イトは稟性溫順家政に黽勉し、中風症に罹れる姑を看護すること、二十五年片時もなほざりにせず。縣知事。金八圓を賜ひ、之を賞せり。

●奇特の少年　仙臺市畠山重德、(十二)父は戰役に死し、母もまた病死して、二人の幼妹と共に、叔母に養育さる。重德、母の遺言なりとて葬儀の費用を節して、得たる金十圓を婦人慈善會に寄附せりといふ。いとたのもしき心なり。

●師範學校女子部　熊本縣師範學校には、從來女子部の設置なかりしが、社會の進步に伴ひ、女子教員を要するは勿論、男教員として小學教員に充たしむること、到底期し難きを以て、來る三十三年度より、女子部を新置せん筈なりといふ。

●昨年と今年との火災比較　昨年一月より同九月に至る迄の間と今年とに於て、東京市内の火災數を比較すれば、左の如し。

	昨年	今年	増	減
一月	四二	四二	—	—
二月	二七	三一	減	
三月	二九	五一	同	二二
四月	一六	三七	同	二一
五月	一一	二〇	同	九
六月	一〇	一五	同	五
七月	二	二八	同	二六
八月	一一	一四	同	三
九月	一〇	一一	同	一
計	一五八	二四九	同	九一

尙。一月より八月に至る迄の燒失戸數を比較するに、今年は昨年より二千九百七十七戸を減じたりと。

●くさ〳〵 ▲感心なる女生徒　毎日、愛知育兒院の前を通行する、十二三許りの女生徒あり。石筆かんざしの類などを、院內の貧兒に與へ、其の喜ぶを見て、己も嬉し氣に行き過ぐ。掛員、時々、其の宿所氏名を聞くも顏を赤めて微笑するのみ。家庭の敎へ想ふべし。▲百四歳の書家　舊仙臺藩士岡村鶴翁、書を能くし、又畫に妙なり。年百四歳矍鑠壯者の如く、筆硯を載せて、信州に遊び、需に應じて、龍蛇を走らす▲感心なる生徒　北海道檜山支廳管內、乙部小學校生徒、打續く不漁に、父兄の困難を察し、女生徒八十四名は、校內運動場にて、養蠶を爲し、男生徒三百五十名中、十三歲以上の者は、山野を跋涉して、野菜を採り來り、其の他は草履を作りしに、繭三石餘、草履六千足餘を得、滿一年間の授業料と、筆紙の料とを拂ふて、尙、餘剩あり、生徒等面白がり、其の業を繼續せんとす▲生徒の美德　備中笠岡高等小學校生徒安福慶路外二名、歸校の途中、十二圓餘入の財布を拾ひ、警察へ持參すれば落主あり。厚く生徒に謝し、金二十錢宛を贈らんとせしに、三人固辭して受けず、警官落し主と共に、百方諭告し、各書籍を購はしむ。事校長に聞え、平素の敎訓を實行したる者なりとて、賞狀を與へらる▲四十五人の喜　神戸居留地の山田藤太郎と呼ぶ小年、父より、一圓九十五錢を貰ひ、大阪見物に往かんとする途中、神戸孤兒院に至り　大阪へ往けど、自分一人の樂

みなれども、四十五人の孤兒が喜ぶのは、何樂ですと述べ、之を寄附して去る。▲土皇日本鳥を注文す土耳其皇帝鳥類を愛せられ、宮中五千餘名の鳥飼あり。此の頃、日本鳥類の聲色、共に美なるを聞召し、在土京山田寅次郎に命じ、五ヶ月以内に日本の、あらゆる鳥類を蒐集せしむ。

●七日の暴風

降りつゞきし時雨の、いとゞあしきげうなりけるに、加へて、暴風荒びいてぬ。朝のほどは、例の暴風とのみおもひをりしを、正午近きころより、風勢ます〳〵加はり、近年、例なき吹き荒びやうなりき。往來の人もとだえぬ。たま〳〵あるは、笠の緒をのみ頭に結びつけたる、傘のほねのみさゝげたる、さてはうちまろばされて、泥まぶれになりたるなど、見るだにいたはしきありさまなり。まして、塀垣の倒されたるところ數を知らず。家さへ崩れたるもの、百餘と聞きぬ。都にては、死傷も多からざりし由なれど、彼の箒川の椿事こそ、いと無慘なりしか。日本鐵道會社、奥羽線の滊車箒川の橋を渡らむとする時列車の中央なる、一等客車より顚覆し始めて、將棊倒に、唯機關車と、貨物緩急車とを殘して、八輛の列車、皆、河の中へ墜落し、死者廿名ばかり、重傷五十餘名とぞ聞ゑぬる。同會社より、醫員看護婦を派遣し、宇都宮停車場を治療所として、夫々手當をおろそかにせず、新聞社、亦、特派員を派して、其の慘狀を世に詳報せり。唯、彼の憐むべき人々に對する世間の同情の甚だ冷なりしが如きは、いとせめて、口惜しかりき。多くの死者の中に、我子、病氣重体との電報を手にせるものありきとか。其の他筆をやるにもものうきばかりなりき。これについで、田子の浦の海嘯も、亦、悲慘を極めたり。同じ日怒濤は、沼川尻なる、高サ五十尺にもあまれる砂山を越して、浸入し來り、富士全郡を水底にかくしいれぬ。沼河の河口に、砂土堆積して、退潮を妨げ、死者數百名に上りぬべしといふ。其の他の損害推して知るべし。但、沼津の御用邸には、何の損害も加

へざりしと、この慘狀を聞しめされて、かしこき御わたりより賜金の御事ありし由は御仁德と題して前に記し奉れり。この暴風の全國にて加へたる損害はあげても數ふべからず。午後六時頃より和ぎて、翌日は、全く收まり、空にさへ、一點の雲も見えず、昨日如何なる事のありけむも、更に之知らぬ樣なりき。こゝにかしこに彼害の實跡のなかりけんにはよ。

●うとましき歌つくり　兼題の和歌を送るに用ゐる印紙の中には、國法にふれ、人として爲まじきことを、敢へてしたるものあり。其等は、皆、さすがに匿名にてなれば、固より、わが投稿の規約にも背けるを以つて、嘗つて受取ることをせず。あはれ、昔此の三十一文字の歌にて、荒夷の心をもなごめ、鬼神をも泣かしめしは、眞情よりよみいでしがゆゑなり。汚はしき心にて、歌つくりたりとて、なか〳〵、世の害ともなりぬべし。歌つくらむよりは、田をつくりて、先づ大方の事には、事かゝぬやうにし、おのれの心を正しくもちなして、さて、後にうたよむことをならふべし。あな、うたて。かゝることを、記さでは得あらぬことを。





教の庭

十月廿日兼題　野逕菊

天　信濃國諏訪郡玉川村　岩川まち子

わけ行かむよはひものびん白菊の
はなさかりなる野べのほそみち

地　金澤市川岸町、二十六番地　熊谷文子

なつかしみみちのほとりの叢菊を
くさかるこらものこしおきけん

人　甲府市山田町　名取正代子

一えたを我にゆるせよたらちねの
よはひをのへのしらきくのはな

秀逸（七首）

大君のちよのかざしにさゝげまし　香川　宮武文子
よのあきしらぬのちのしらきく

賎の女も千代のかざしと手折るらん　秋田　佐々敏子
野路にはへるしらきくのはな

行きかよふ賎が袖さへかをるなり　東京　田中すゞ子
野路のしらぎくはなさきしより

あかつきの霜やれけるとわけゆけむ　肥後　木川里子
野みちはきくのさかりなりけり

菊のはなみる度ごとにたちよらば　肥後　村崎包子
いつかはつべき野べのほそみち

何斗りゆくてののべに咲きぬらん　東京　新泉松子
あふひとごとにきくのかぞする

心なくきのふはふみし野路の草の　岩代　安藤意子
なかにまじれるきくのひともと

（以下原稿到着順）

八千種のはなはうつろふあきの野に　山田裕子
よろつ代かざすしらきくのはな

霜ながらそでにうつりてかをるなり　友永章子
すそ野のみちのしらきくのはな

秋ごとにいろうるはしくさきみだれ　那須昌子
わくるひとなき野ぢのむらきく

白つゆにひさしほいろをまさりけり　黒田明子
たがまきすてし野ぢのしらきく

おく露もにしきとみえてやまかげの　虎口資子
みちもせにさくきくのいろいろ

ふみわくる人なき野路のきくのはな　溝口貞子
われはたをりていへつとにせん

ひとゆかぬ野みちなれども菊のはな　田代綾子
千代をしめてそさきにほひぬる

ゆきかよふ人のたもとをとゞむらむ
黄ぎくしらぎくにほふ野べかな　高橋天類子

秋の野をふみわけゆけばしらぎくの
はなをほしかとおもひけるかな　服部倫子

八千草のはなにくからぬ野べのみち
にほひをそふるしらきくのはな　石井豊子

いろいろの花もみゆれどあきの野の
ゆくてにまどふ黄きくしらきく　佐々小夢子

露かざしにほへる野べのほそみちは
黄きくしらきくあらそひてたつ　佐々有鄰子

おのがしゝ秋の野みちに咲き出てゝ
世のうきことをしらきくのはな　田代艶子

朝ごとにしもをしのぎてさきいづる
野ぢのしらきくわすられぬかな　淺井靜子

里ひとのかよふ野みつのしらきくは
けふもさかりをながめてそゆく　中村壽枝子

わけゆけばそでにはかなくちる露も
千代の香そするの路のしらきく　永井さい子

萩をはなふみしをり行くみちのへに
世のうきこともしらきくのはな　鈴木秀子

ひとりのみ千代をしめてや野のへ菊
うき世のあきをよそに見るらむ　鈴木那美子

賤の女がゆきかふ野路のきくのはな
をりてかざしていへつとにせん　道廣やね子

いろいろの千草のはなにおくれても
にほひはまさる野路のしらきく　澤田春子

行くちにおのがさまざまさきいでて
あきのあはれのしらきくのはな　將徳永識子

旅びともゆきなづむまでみちのべの
ちくさがなかにまけるあきゝく　徳永純子

旅ひともこゝろしてゆけあきの野の
みちもせにさくきくのさかりを　徳永萬壽子

あはれあはれ人めやさしき白きくの
はなれて野へにさきにほふなり　石川久子

名にしおふ栗のへをすぎゆけば
いろかゆかしききくそにほへる　石川南江子

おく露にぬるゝもうれししらきくの
はなのさかりの野へのほそみち　石川樂子

こゝろなき草かる子らものやおもふ
野へのゆくてに匂ふしらきく　川類子

服ふさちたもとつられてのへゆけば
みちもせに咲くしらきくのはな　小笠原元子

あさまだき匂ひゆかしくはなさきて
たをるにおしきのちのしらきく　立田原國子

もみぢかりたどるのみちにしらきくの
はなもにほひてゆきかてにする　立田原直子

さとの子がすさびにうゑけむみちのへに
ひともとさけるしらきくのはな　立田原富子

もゝくさの花のとまりかあきの野の
野みちにのこるしらぎくのはな　志栗多ひさを子

みちもせに色香もたかきしらきくに
野邊にさきそろふ秋もきりけり　佐加井ため子

秋もやゝくれゆく野路にさきかけて
あはれもふかきしらきくのはな　坂田喜美子

八千くさは霜にうつろひゆく野路に
千代もとにほふしらきくのはな　名取よし子

虫の音のかれ行く野路ににほふかな
あきのわかれもしらきくのはな　西川順子

千歳まてよはひな野邊のみちもせに
　咲きこそまされしらきくのはな　仁保しま子

いさすゝきまれくまに〳〵來てみれは
　やさしくにほふのぢのしらきく　淺山涙子

わけすくるのちのしら菊おりさりて
　われまつこらのいへつさにせん　横山柳子

朝しものいろにまかひてしのきくの
　さかりにゝほふのへのなかみち　横山壽賀子

あきふかみおくつゆしけき路のへに
　千よなしめてもさけるきくかな　木村くに子

ゆきかよふ野守のいほのみちのへに
　千代なしめたるしらきくのはな　河村君子

菊のさく野みちはよきてさほらなむ
　よしやもすそはつゆにぬるとも　山根久子

こささはんよすかたになき秋の野の
　こみちのきくやしなりなるらん　田村多豆子

貞さかりに野ちのしらきく花さきて
　わらへも千代なうしにかゝらむ　村上みさ子

おほ君のみかづかぶやくしろしさて
　野みちに咲けるしらきくのはな　森みき子

草ふかき野すゑにさける一もとの
　きくはこの世のいろならすして　辻本たき子

ぬれつゝもなほわけゆかんしら菊の
　にほひこほるゝ野邊のほそみち　河口文子

野じゆけばさかり久しききくのはな
　いろさりぐくりにさきいでにけり　頴川智か子

ひさしらぬ淺茅がなかにさきにほふ
　黄きくしらぎくあはれなりけり　佐藤きみ子

はてもなく咲きける野ちの菊のはな
　いざひさねたないへづさにせん　岡伊勢子

つゆふかきあきの野みちのきくのはな
　おのがまに〳〵さきにほひける　藤勝米子

荒れはてし野邊のほそみちさきくれは
　黄きくしらきくなほさかりなり　小島操子

ゆきなれし野邊のほそ道このころは
　きくのさかりにまよいけるかな　北島松子

せめて香を袖にうつしてかへらなん
　手なりも惜しき野路のしらきく　北島功子

しら菊のさける野山にわけ入れは
　うきよはなれしこゝちこそすれ　杉村壽賀子

虫の音も千ぐさもかれしあき野に
　あせぬはきくのいろかなりけり　田中睦子

わけて來し人のたもさのかほれるは
　ゆくての野路にきくやにほへる　瀬谷涙子

つゆしけきのちのしらきく風すきて
　わけゆくそてもなほにほふらん　椎野ぬき子

おくしもさ千代のちきりや結ふらん
　のみちはるかにさけるしらきく　東野さく子

つれにゆく野𨘢のほそみち迷ふまて
　咲きにほひけりきくのひさむら　禿眞澄子

誰がために香に匂ふらむやまさとの
　訪ふひさもなき野ちのしらきく　門馬きよ子

八千草のかれたるのべのつゆしもに
　さきてぞしろきしらぎくのはな　來栖登美子

ゆきくれて立よるのべのしらきくは
　つきのかけかさあやまたれけり　大谷美子

ゆきゝする袖のにもさの香もたかし
　野邊のこみちにきくさきしより　伏脇米子

さゝ人のゆきかふ野路のくさむらに
さきいづる菊の香こそたかけれ　武田粲子

ちよふともにほふさきくの花さきし
あきののへをばあそびくらしつ　河方㐂代子

みちのべにさきてよにほふきくのはな
野もりやしれるひとのみなくに　齋藤みさを子

あしとめてながめけるかな秋の野に
にほひ出でたるしらぎくのはな　岡田春子

匂はずばいろなきくさにうもれなむ
野みちに咲けるきくのひともと　市川さゝろ子

おのづから道のかたへに咲きいでゝ
にほふもゆかししらきくのはな　羽室象子

秋はうしと世の音の楽にいつはりの
ありとてあをく野路のしらきく　山田嬉笑子

もゝ草をわけゆくそでにしらつゆの
こほれて匂ふきくのひともと　山田靜子

咲き匂ふ千くさのなかにきは立ちて
かをるもゆかし野路のしらきく　兒平ちか子

まくさかる賤ものこせし野への菊
かほりはかりをそでにつゝまん　高原松枝子

わけいらばつゆやみだれんしら菊に
ゆくかたまよふあきの野路かな　岩波はま子

秋の野のとふひともなきみちのべに
世をしらきくのはなさきにけり　上田みち子

八千草はしをるゝ野ぢにさきいでて
いろ香めでたききくのはなかな　岩波のち子

朝またき野路をわけ行くころもてに
かをこそとむれしらきくのはな　齋藤はる子

ゆかしくも野路に咲きたる菊のはな
行き來のそでに香をぞとむる　橫山ふち子

秋の野をわけこしひとのそでかをり
のべのほそみちきく咲きにけん　村田嘉子

賤の女が折らぬたもとさにほふかな
わけゆく野路の千代のしらきく　靑木たま子

千代かけて香にこそ匂へゆきゝする
ひともまれなる野路のしらきく　内海順子

いろ〱の花さく野路にうつろはぬ
きくのひともといへつとにせん　河田いし子

しもかれし千草のはなをよそにみて
ひとりさきめく野路のしらきく　羽田三綾子

たよるへきまがきもみねぬ秋の野の
みちにみたるゝしらきくのはな　小村球子

そでふらばつゆやこぼれん菊のはな
さきし野みちぞこゝろおかるゝ　長尾五十子

吹く風の香をとめ來ればあきふかき
野すゑはきくのさかりなりけり　津村さみ子

淋しさもわすれてかよふのみちかな
とり〱さけるきくのにほひに　氣賀澄子

たどりゆくのぢのゆくてに千代しめて
にほふもゆかし白らきくのはな　降田楓子

夕つ方家路てらしてなつかしや
いまをさかりの野べのしらきく　高草木謙子

露わけてゆきかふ野路に八重ひと重
千あきもにほへしらきくのはな　坂本遊多歌子

菊のはなゆきかふ野路にさきそめて
うつらふ色もしらずやあるらん　坂本登子

露ながら野べより野べにさきみちて
いとうつくしきしらきくのはな　中原虎子

さなしかの妻てふはぎの花なよりも
野路のしらきく香こそふかけれ　德永廣子

おく露なしじにかざしてきくのはな
ゆきかふひさのあしもさにさく　德永九貝子

牛かひもゆきにもどりにこゝろせよ
ひさむらさけるのちのしらきく　福岡郁子

香もたかく野路に匂へろきくのはな
まちますはゝのいへづさにせん　佐藤秀子

家つさになりてかへらんはゝのため
よはひのぶてふ野路のしらきく　村松月子

賤の男もあはれさみしかそのまゝに
かりのこされし野ちのしらきく　依田登久子

たなられさ思ふこゝろもたゆたひぬ
うきよそなれし野ちのしらきく　淀　あさ子

いくはくの人のそてにや匂ふらん
わけゆく野みのしらきくのはな　稲原苴子

しら菊のさける野みちはこゝろなき
しつもゆきゝやたのしかろらん　二宮卒江子

あへきつゝの匂ろ野みちに嬉しくも
さきに匂ひけりしらきくのはな　二宮敏子

ひさ枝はやみふすひさのいへつさに
折りてゆかしき野ちのしらきく　二宮春枝子

里の子かわくろたもさにか匂ろらん
野路のしらきくつゆながらにて　竹村竹里子

人さはぬやさたつれむさ野路ゆけは
香もなつかしききくぞさきける　椋田凉子

道すからうつける香をはつさにせん
手折るになしき野へのしらきく　山村隆子

家つさに手折りて行かんませ結はぬ　吉崎世根子

里のこのすさひさならんのぢのきく
野もりかかさの白らきくのはな　林　文子

こゝろなきさゝのわらへにたなられて
ひさはだなりていへつさにせん　藤村幾子

人も我もおほしたてれさいろ〳〵に
みろひさもなき野路のしらきく　戸倉信子

しつの男も小菊のはなやおもふらん
はなさきに匂ふのぢのむらきく　北原季子

わけてゆく野ちに思はぬきくのはな
こゝろして行く野への匂そみち　竹村良子

秋ふけて野ちわけ行けばうらがれの
いさやたなりていへつさにせん　都水春子

秋ふかき野みちのきくのさびしげに
くさばにまじろきくのひさもさ　目黒佐喜子

賤の女のなりはひはけむたもさより
なになこてふさかたろなろらむ　今井まん子

都にてかつてめでにしものよりも
きくの葉もろゝ野邊のみちかな　横手たつ子

心あらば野邊のしらきくなげくらん
ひさし匂まさろ野邊のしらきく　横手こう子

まくさかろ鎌なのかれてあはれにも
ゆきかふひさのかろにまかせて　黒子玉枝子

あきくさにはらひし露の名こりにや
野路にさきけりきくのひさもさ　淺川ひろし子

おさな子がつむ手のがれて逕の邊に
しもに見まかふ野路のしらきく　寺田みち子

打ちまれくのちのなはなの影みれは
いまなさかりさけろきくかな　伊東いさ子

にほひ香しろくきくさきにけり

いざしばし野路のいほりに休らはむ
のきはにちかくきくそにほへる　伊東千代子

いへつとになりてそへはや茸がりの
かへさの野ぢのしらきくのはな　加藤數子

さとのこかまなひの道のかへるさに
のちのしらきくなりてきにけり　服部萬子

かへるさいはてやならむ我こさき
ひさもこそあれ野路のしらきく　河合縦子

あさ露にぬれしもすそもかなるまて
きくさくのちをわけて來にけり　賀茂鉦子

來てみれは野もりがいほのきくの花
いまなさかりさささいでにけり　岩佐榮子

いかにしてたどりゆかましきくの花
道もせきまてにききみたれけり　新泉翠子

露しげき野邊のほそみち分けゆけば
ふるゝたもとにきくの香ぞする　尾崎嘉子

露ながら折りてかささんすべもがな
あさかせかをるのぢのしらきく　増田雅子

のべの菊さかりひさしきはなのいろ
けにもにしきのながめなりけり　小野田てふ子

おく霜やのわきのかせにみたれても
かほりゆかしき野路のしらきく　大谷津峰子



十月廿日兼題　紅葉見にいでゝ雨に逢ふ

天　越中國氷見郡氷見南上町　伏脇米子

花にのみかは、紅葉にも、風は仇なりけり。綾錦吹き破られぬ間に、いざとそゝのかされて、母刀自諸共に出立ちぬ。山は呉蜀の巧もて包まれたり。そゞろ「秋山われは」を、眞似ひたうなん。今日こそ、紅葉の奥を尋ねてめと、谷を渡り、峽を辿りて、分け入る。折しもあれ。秋の空のさだめなきや。山の彼處の時雨の雲は此方に廻り來て、見る間に降り廣ごりぬ。障の雨なり。未だ、山も深からじ。家も遠からじ。いざや、臂笠してひき返さん。いざ〳〵とそゞのかせは、母刀自、あなかま、さな急ぎそ。濡色優る眺も、亦一しほと稱へられ侍り。彼處に小屋見ゆ。樵夫の住み捨てたるにてそあらめ。暫し、彼處に晴らしながら眺めばや、との給ふに、さらぞと走り寄れぞ、蔦蔓のいろづきたるがふかくも閉ぢこめたる、いと思はずなり。入らんとして皆入りわづらふも、此上なうをかし。何處如何なる人の紅葉狩するを、濡し廻らんとやすらん。やう〳〵晴れ行きぬ。見るか中に、夕映いと花やかにさして、赤きはいや赤く、青きはいや青く、更に一層のながめなり。あはれ、蕾なく、瓣なきに。そも何の花ぞ、杜

樊川が、停車坐愛楓林晩ど歌ひし、晩文字の妙、今ぞ知りて、あはれ深し。山寺の入相は、響き渡りぬ。即て、目も醒めんばかり色濃きを、露ながら翳して、今歸りぬと、這入よりおとなへば、婢は、燈掲げ乍ら、走り出でゝ、勞はりつ。兄上は、たゞうちゑみて、賞で迎ひ給ひぬ。弟よ、日頃すさびの軍刀佩きながら、昨日か習ひ初めし「紅葉の錦着て歸る」「嵐の山の秋の暮」を、うたひもやめで、足踏高く、迎ふるも、折に合ひてをかしうなん。あはれ、時雨の雨に、逢はざらましかは、いかで、今日ばかりをかしからん。「喜の前に障横はる」といふ道理も、今更思ひ合はされてなむ。

地

甲府市　山田町　名取正代子

時雨のあめ、間なく降りしきるまゝに、さこそは、四方山の稍も、うるはしう色づきつらんと、思ふ〳〵立出かねて、獨りのみ、こがれ居たるに、けふはしも、朝霧の晴わたるほど、日影花やかにさしのぼりぬ。いと嬉しくいかで此晴間にと、たれかれそゝのかして、某山へと出ゆきぬ。同じ心の人ともおぼしきが、道すがら、かしこのけしきを、何くれとかたりあふをきくにつけても、さこそとればえて、いと嬉し。やがて、いたれど、げに思ひしにもまして、見渡す限り楓柞などの梢、とり〴〵に、にほひ出たるが中にも、松にはひまつはれる蔦かづらは、龍田姫のいかに心つくして染たりけん。青地の錦ともいはまほしくて、いと〳〵めでたし。かくて、いよゝ深う分け入るまゝに、幾千本の紅葉枝を交へて、限りしられぬ紅の、麓にも一しは立まされるけしき、目もあやなり。されば、人々あかずとて、或はうたひつ、あるはまひつ、心の限りめでくつがへるほど、俄に空かき曇り來りければ、又もやふり出づらんかんかと、いひも終らぬに、はら〳〵と落くるは、雨のみかはあたらしき紅葉をさへに誘ひて、ふりみだるゝさま、いはん方なく哀なり。事々こはいかにと、恰もくものこちらしたらんやうに、あなたこなたと、袖がさかふりて、かけ出すさま、よそめには、いかにをかしかりけんかし。おのれらも、かくてはと、歸り路に向はんとすれど、さすがに、あかぬ心地せられて、かへりみがちに、木蔭をたどりつゝ、麓の方へ志す。夕日のてりそふ影を見ずてはなど、口惜しかれど、けふは甲斐なかるべし。よし、又も來て見んと、友の一人がいへば、又一人が

ふらばふれぬれなばぬれね我袖の
廂もにしきと色かはるまで

などまげじごゝろにいふものから、此の雨には、雨の袂もしぼりあへず、いかにせん方もなくて、あへぎあへぎ麓の一つやに下り來り、車をおはせて、家にはか

へりぬ。

人　遠州氣賀町　寺賀澄子

はれくもりて、雲の行かひはげしき空も、秋の習ひとて、心にもかけず、足引の山の紅葉に、あくがれ出でぬ。あきも、深かき頃にしあれば、尾上の梢はさらなり。ふもとに生ふるつたかづらさへ、時雨のあめの、うすくこく、染めつくしたる、げに心ゆくけしきなり。暮るゝも忘れて、見はやすほどに、入相のかねに催されて、

もみちはのしたてる山の夕くれは
　かねのねにこそおとろかれけれ

と、友の誦じ出でければ、實にとて、木の下陰、立ちはなるゝ折しもあれ、さとおとして、村雨の一しきりふりそゝぐに、山々のけしきどもえもいはず。「山かきくりしぐれぞ」、また「紅葉だをそめてのゝちに」などいひければ、げにかゝるところと覺えて、降る節にいとはしかりしも、紅葉には、いとうれしきけふの時雨や。

（以下原稿到着順）

佐加井　ため子

明日は神嘗祭といふ、日影うさからむ山里のなつかしくて、思ふどち一人二人していきけり。吹く風もよろしき程にて、登り行くまゝにあはれ、三月の花よりもとは、かゝるをやいふべからん。こゝいまだしと見ゆる方もなく、つやつやとそめ渡したる時めき顔に、魂も奪はれぬべき秋山の氣色、そゞろに聲たてゝめであへり。げに定めなき此頃の空のけしきかな。いつしか風に誘はれてあはやしぐれぬ。人は紅葉と共にちり行きてたゞぬれて、色まさる紅葉と、我等のあるのみ。いよいよふりしきり、風さへはげしくなれり。散りみだるゝ風情のなつかしきに、いと大きなる木のたてるを見つけて、しばしの雨やどりと頼む陰さへいたく散過ぎにたれば、雨よくるべくもあらぬぞ、いとわりなきわざなりける。

中村さく子

秋もやうやう半ばすぎ、庭のちぐさの、物あわれげに、のこれるころ母君と友どちといさなはれて、春日山にものしぬ。人多く居たり。皆酒くみかはし、もみじの如きかほ色して、歌ふもあれば、まふもあり。いとたのしげなりし折から、秋の空とて、一天俄にくもり、やがてふり出でぬ。人々みなちりぢりにあはてふためきのがる。おのれ等は元よりいそぐべきにあらざれば雨後の景色もながめんと、かたへの茶店にいこひ居たりしが、雨は半時あまりにてやみ、おそろしげなりし雲は、ぬぐひたらん如くはれ、もゆるばかりの紅の葉末に、つゆの宿れるが、そよぐ風にこぼれちるさま、いと面白く、しばし家路も忘れしが、やうやうひともす頃に至り、かくてもあらればとて途にかへりき。

佐々有鄰子

別格官幣社菊池神社。のたたせたまへる地を、守山となんいへる。今日は日曜日なれば、學友たち三人四人ともなひて、守山さして出ゆきぬ。日影のてりかはすそなたの木末をみわたして、一人の友が、白露も時雨もいたく守山は、と古今集の中なるを、高らかに吟詠せしを、人々は耳にもいれず、奥ふかき木末の色に心ひかれて、いそぎゆく。いやはての下女さへ、下葉のこらず色つきにけりとぞいふ、げに大御代の恵の露にうるほひて、下女の身ながらも、學校の庭の數くさかりさりししろしのあらはれてよ。やがて守山のみねに登りつきぬ。みおろせば、下女がいへりし如く木末みな色つきてはたばりひろき錦、織かけたらんごとく見ゆければ、そこの木かげ、かしこの木のねに立よりて、おもひのまゝを、短冊に懐紙に、筆とり出て、つゝ杖つくづく、みわたしの松の青葉に交る色やよからん、柿のうすきかを書つられんかと、よれんな

かりしなりから、一人の友の、妾が袖ひきて、いざいざとそのかすた、あなとおどろけば、梯立のくら獄のかたより、一むらくろく降くる雨に疊紙も笠とるひまもなく、はやしとゞにぬれぬ。時雨も露もいたくも山のる名たる、紅葉のありさまを、學窓のもとに、今日のともどち、かたりかはして、鉛筆もてかきしるしぬ。

德永廣子

此ごろ、ひとしきりづゝふりくる雨に、四方の木末、ひとしほ染出て、色こくみは侍れば、おもふどち二人三人うちつれ、菊池川の岸よりながめつるに、其のほとり一面に、錦しきたらん様なれば、こゝちよく、ここに座をしめ侍りて、ながむるまにも、川上より流れくる紅葉の、五つ六つ、うかべるけしき、にぬりの小舟を、こぎくだすごとくみは侍る。なにとなう、心を。かれにうちよせて、いろいろかたみにかたりあひて錦の林にわけるなりしも、にはかに時雨ふりいでゝ、やうやうにふりしきれど、心こゝにとゞまり。雨に追れて。足のみはいそげども、心はあとにかへるおもひにて、わが家には、しとゞにぬれてつきぬ。

村上みさを子

わかすめる西山のもみぢ、今さかりなりときゝて、こゝろあへる友どちひとりふたりそゝのかして、わりごたづさへ、山ふかくわけゆく。げに峰も尾も、錦のとばりをかけわたし、あや衣をうちかけたらむたことく、いはむかたなくをかし。いさや、わりごひらきて、匂ひなきことのはをもそへましと、毛布打ちしくほど、遽に空かきくもりて、村雨ふり出でぬ。こきかうへにも、こき色を見せむとの、山姫の御心ならましと、思ひなさるゝにも、木のもとを立さりかねて、ぬれてゝ花のと。口すさみたるが、にはかに心つきて、もみぢにといひかへつるこそ、いとをかしかりしか。

岡伊勢野子

いつしか、秋も、深うなりぬ。かねてちぎり置きつる、紅葉狩り、おなじくは散らぬ間にと、同じながれをくむ、學びの友垣の誘ふまゝに、朝まだきより、近き山へと物しぬ。道すがら、千草のなかをわけゆけば、あさぎりのはれゆくまゝに、萩の花づま、女郎花など、己がむきむき咲き亂れたるさまの、いひしらずをかしきに、わきて尾花の、人まちがほに打まねくもなつかしく、歸り路には、一枝、手折りて、家づとにせんなど語らひつゝ、道芝にをく、白露をふみしだきて、やがて志しつる山のふもとに着きぬ。先うれしくて、奥ふかくたどり入るに、靜けさは物にたとへんやうもなく、峰の松風、音さはて、一葉、二葉、ちりしくもみぢは、ふむもあたらしう、聲をつくして、鳴く虫の音は、いとゞ、身にしみて、あはれにおのづから暮れゆく、秋もけしきもしるく、かゝる處に、一生涯を送りたらんには、いかになど語ふもたのし、傍たどりゆく程に、いつしか、山のいたゞきにいたりぬ。足のつかれをやすめむと、かたへの石に腰うちかけ、ふと見わたせば、さても其景色のうるはしきさま、山の端つゞき紅葉して、ふもとの野邊は、千草のにしきたらん如く、をちこちの家より立のぼる烟、さては、河のながれの白き布を引きたる樣など、得もいはず、げにや、畫にかきたらむ樣なり。折しもあれ、空、俄にかきくもり、あたり小暗くなりぬと思ふ間に、あな心無の雨や、はやふり出でぬ。いと、口惜しく名ごりはつきねど、いざさばかり、共に手を携へて、かへり路にといそぎぬ。合家につきし時は雨いよよはげしく風さへ、いたくふき添はりぬ。あはれ、路の邊の千草、手折らでかへりぬることの、口惜しさ。今、なほ、得忘れずなん。

佐藤幾美子

頃は、神無月、中ばになんありける。兼ねてより、心しる友と約せし、紅葉狩も、けふとはなりぬ。まづ、心にかゝるは天つ空にて、疾くより起きいで、打眺むれば、一天雲なく、朝日のどかに差し昇り、軒に囀づる小鳥の聲も、心をしるや、嬉しげなり。よべより、何くれと用意せしかば、朝餉終りて、友がり行きければ、友どちも待ち居られしとて、そこより目ざす、某の山に行く、道すがら、四方山のものがたりしつゝ行くほどに、遠からねば、直ちに着きぬ、此の山は古より名高き所にて、けふは休み日とて、貴きいやしきけぢめなく、老たる人、あるはわかき人きあひて、いと賑しげに、山は見渡すかぎり、紅葉して、其の美しき

ここは手染の錦かとあやしまれ、しばしはものも打忘れ、あちこち見廻す樣は、いかなりけんと、いと面はゆう思ふもせんなしや。山の中、ここかしこありき居しに、折しも、俄に黑雲の起りて、雨の降りきしかば、しばしがほど、いこひてあらば、小やみとならんと、行くほどに、跡に、さゝやかなる庵ありければ、其の内に入りやすらひぬ。宴を催せし人々は不意なる事にて、其混雜はいはず、山の梢は、いまだうすのれなるも時雨にて、一入いろまして、行きかふ人の衣とてりをひて、公任卿の、朝まだきとよまれふるき歌など思ひ出し、そゞろゆかしく思へり。さるほどに、雨は大降りとなり。時々は、おどろ〳〵と、轟く音さへきこゆ。いと物凄く、名殘はつきれど、家路に就く、途にて、友と袖をわかち、我舍につきしは、午の刻過なりき。あまりの面白さに、母君はじめ、妹などに物語しぬ、書飾を終りはのち、思ひしまゝをつゞりて、かくは物しぬ。

瀨谷淚子

おのがすまひより程遠からぬ、紅葉山の楓の、朝の霜、夕の露に色つきそめて、今は、くれなゐのあやもいと濃くなりたりと、風のたよりに聞きしかば、夕日の眺めや、一しほなめてと、そゞろ心の浮立つまゝ、こころあへる友どちそゝのかして、共に物しぬ。こゝは逢隈川の流れにのぞめる小高き所にして、山とは云へど、岡と云はむ方ふさはしかるべし。所せきまで生ひ立てる楓は、老いたるも、若きも、今をさかりとから紅に匂ひ出でゝ、仰げど、空は見ゑわかず。川ごしにふきくる風の音づるれば、黃金の切れのふるかと見るまでに散りしきて、地には、匂ふ小鳥の足跡をのこし、水に散りては、くれなゐの錦とながれ、龍田の川のにしきなりけりと歌はれし歌の心も、思合されて、いとおかし。あかぬ眺めに、心のはれゆくまゝ、かたみに腰折ども書いつられつゝ、歸るも忘れて、居たりけるが、何となう、秋のしめれるまゝ、ふと心づけば、川面さやがしく、はやも時雨の來れるなりけり。花と紅葉との差はあれど、「櫻狩り雨はふり來ぬ同じくばぬるとも花の陰にかくれむ」と云ひし人の心にまねびて、友びとのせき立つるをも聞かず、なほ去りかてにだゞすみけるに、風さへ加はりて、一しきりはげしうなりぬれば、今はとて家路を急ぎぬ。着きし頃は、はやいたくぬれて、雫さへしたゝらんばかりなり。着換へんとてぬぎすつれば、ぬれたる衣のあはひより、もゆる紅葉の、たゞ一つ、家づとにせよとの心づくしにや、ひら〳〵と出でたる、似るものなかりけり。さるにても、あまり急ぎしまゝ、腰折ものしたるたに册を、木の下かげに忘れ來つること口惜しさよ。人に見られたらんには如何に恥かしき業ならむ。されば、己れはなほやみなむ。拙き筆に、品さだめられたる紅葉ぞ一しほ、口惜しからまし。ふれや時雨、紅葉の色はあするとも、書きにし文字のきゆるまで。ふけや風、梢さびしうなりゆくとも。忘れ來し文の、落葉が下に埋むまで、などよしなきこと、願ひけるも折からにや。

田中睦子

頃しもかみなづきのなからにて、淋しさたへがたかりければ、心あへる友どちと、舘の川に紅葉狩しぬ。山のたゝすまひ、いとをかしきに、流るゝ水の底清く、夏ならましかば、いかに床しからましとおほゆ。いでや、山姬の心つくして、おりかけし錦をこそと、ながむれば、朝霧濃く立ちこめて、誠にほひなくて、「誰が爲の錦なれば秋霧の」と、かこちつつ、目近き小枝などの、一いろ、二いろ染みたるを、手折りつゝ、打めぐるひまに、嵐のさと吹き來れば、やう〳〵に霧も晴そめて、遠近の峰も谷も現はれたり。げに聞きしにもまさる景色なりけり。見渡せば、いと大なる幹のふりて、枝しげりたるが、只、紅を流したらん如く、梢のかぎり赤きあり。黃なるあり。千しほに染みたる上つ枝は、風のまに〳〵ちりて、手向くるぬさとも見ゑ、まだ、一しほなるは、下枝に、時雨を待ちて、とりかけたる幣帛の如し。形をかしげにくねりし松は、所々に緣を彩とり、峙てる巖は、色黑くして、屏風の如く、谷川にせかるゝ水は、白く迸るなど、かのからみの、五色陸離相交とは、かゝる所をやいひけん。只からやまとのあや錦をしきつられたりとこそ思はるれ。「いかにして秋の木葉を千々に染むらん」と、口すさみて、流の面をみれば、ちりし紅葉の浮べるさま、げに、神代にも聞かざる唐紅に水くゝりたり

うつせみの身も、いつしか仙境に入りて、皆々立歸らん心も出でず、ひたすらあくがれける程に、いつしか、風にさそはれけん。み空のけしきただならぬに、山嵐のさと吹き來るとゝもに、天つく如き雨降り出でぬ。あまりにいみじきにと、皆々驚きあはて、あたりなる、賤の伏家にはせ行きて、しばしやすらふ程に、み空も次第にうすらぎ、雨もいつしか靜まりぬ。さてもいみじかりつるよと、皆々立ち出で眺むれば、葉末の露はそよ吹く風に打拂はれて、白銀の玉を散らし、時ならぬ、螢の飛びかふ如く、日の光の移ろひたる。さながらもゆるが如きさまの、あまりになつかしければ、人々あかずとて、思ひ／＼にしきしまの道など、口ずさみつゝ、ひたすらにめでつるうちに、いつしか、日も、西の山の端近う傾きければ、あまりおそくやならんと、漸々我にかへり、來ん年にこそと、山に契りて、あくよしもなきをやがてかへり路につきぬ。

志田芳子

萩の葉わくる風の音、時雨めきて、うら淋しう聞ゆるに、門田の落穂ついばむ村雀の聲々にも、たけし秋をぞ知られける。野山の花紅葉、いかばかりうるはしからむと、思ひつゞくるをりしも、日頃へだてなき友がきの、常に籠りてのみおはさむはあしかりなん。いざ玉へ、今日一日野山にまじりて遊びくらさむ。なにがしの山、それがしの野の紅葉、いと深く染めいでゝ、ゑもいはずなど、そゝのかさるまゝ、いざもろともにとていでたちぬ。大路はなるゝ程より、清き流に沿ひて溯り、また消ゑやらぬ白玉の、道芝にころがるゝ哀れを、かこちつゝ分け入りつ小川の水かれ瀬となれるを、かち渡りして行けば、此のあたりいみじう茂れる木だちなり。下葉の、殊に色づけるは、時雨の、いたくもりやしにけむ。見渡す山々如何に胸の思のきはであらむ。燃ゑたつばかり、色にいでゝ見ゆる、いと艶なり。やがて落葉かいあつめ、腰打ちすゑ例の硯など取りいだし、何かかきてんと、のゝしるに、さしも晴れにしみ空、俄にかき曇りて、玉なす雨はやまのあたりに降り來りき。あなうたて、さるべき蔭やあると、見やれば、かしこにさゝやかなる家居あり、心にくうつくろひ潔めて、さも世を避けし住居げなりいざこれにてと、紫の戸打ちたゝけば、たそと答へて、臈たき女出で來りぬ。笠かしてん、しばしいこはせてよなど申すに、答もせで庭に下り立ち、やがて、色濃き紅葉一枝をり、それにそへて、いひ出せるは「色よしと人のはやすは夢なりや落葉となればよるかげもなし」錦城ぬしの古きむかしならねど、こたへもせず、ふらるゝまゝに、走り歸りてき。

禿眞澄子

今日は日かげうららかなれば、野山の遊びは、一入面白からんと、友どち打ちつれ立て、此の頃名高き、某の山へ紅葉見にゆきぬ。ふもと迄急ぎ行きけるに、山は打かはりたるばかり、木々の梢のこくうすく、色付たるはかりにしきかけたるにやとあやしまる。山へ登り行けば、あなた、此方に人々の思ひ／＼に打興ずるもいとおかし。あまりの面白さに、我をわすれてながめゐたるに、かはり安き秋の空とて、いつのまにくもりけん。さとふりくる俄雨に、今迄は興に入たる人々も、驚きまどひて、皆ちり／＼にかへりゆき、雨はます／＼ふりしきりぬ。あなた、此方見まはせど、しばし宿らん方もなく、十方にくるゝ折柄、友どちの内、一人の云ひけるは、昔實方の臣とや云ひつる人の、或日、櫻狩に出て、雨に逢ひける折、一首の歌をよみて、木の下に立居たりとかや。今日は花ならで紅葉狩の、いつれぬるゝ物ならんには、紅葉の露にぬれてこそ本意なれと、かたへを見かへれば、一本の紅葉枝にしけりて、かさのやうになりたるあり。之幸と、皆々、此の下にしばしやすらひ居たりける。秋の日あしかくれやすく、早、日も西へかたむく頃雨はやうやうにやみぬ。今はかへらんとふもとをさしてくだりけるに、袖ふきかへす風の身に、しみてかすかにひゞく遠寺のかね、いと物さびし。

門馬喜代子

いまかふらむのさまなれど、秋の空のならひ、やがて晴れむ、ためらふべきかはと、よべ約せし、しのぶ山に、紅葉狩せむとていで立つ。途のほども遠からねば、くさ／＼の物語りなどしつゝ、牛の歩みのつもりて、はや志ざしたる所にはつきぬ。二月の花にもまして美はしと、古人のいひしも、げにことわりなりけり。木々の梢は、さながらもゆるが如

く、枝のかぎり、深くそまりたる中に、ときはの松のまじりたる、背地の錦にたとへんも、ことふりたりや。彼方の林は秋たけぬにや。紅のまだうすきに、白きけぶりの一すぢ細うたちのぼるは、あはれいかなるみやびなが、酒をあたゝむるらむ。あの稲荷社の庭こそ、一きはよく見渡さると友のいふに、途のけはしきをも厭はず。やうやうに登りつくして、喜ぶ程もなく、雲の色いと深うなりて、四方の山々はかくれはて、さとふきくる風にきほひて、一村しぐれあわたゞしうふりきぬるに、皆々うちほれ、しばしのま、稲荷社の軒端に、晴るゝを待ちぬ。思ひやりに腰折れにても物せむと、考にうち沈みて、まだおもはしきふしも浮ばぬまに、み空の雲すき見ゑて、天つ日かげもうらゝに照り渡れば、紅葉はいよいよ色まして、ふく風にはら〳〵とこぼるゝ露の白玉も、唐紅にぞ匂ふなる。眺めはあかれど、暮けの時にもさうなりたればとて、友がきうながして、まなびやにはかへりぬ。

來栖登美子

去年の秋神無月ばかりにやありけん。空さだめなく時雨がちなりければ、那谷のもみぢの色そへぬらむ。いかでひと目だに時間あらばと待ちつるが、今日はしも珍らしう日影の見ゑければ、打よろこびつゝ、かねて契ぎりし友どちと、滊車といふものに打乗りて行きぬ。此處に、彼處に群だちたる紅葉の、早散りそめぬるもあり。黄色なるがほこれるもあり。はた、今日来ずばといひがほなるもありて、いづれめでたからぬはなきが中に、常盤木のこのまより、顔さし出でたる、黄葉の錦かと疑はれて、いとおかし。かくて、下照るかげにそひつゝ、こゝかしこ眺めありく程に、空のけしきたゞならず、やがて、時雨も降り来にければ、急ぎなつかしき木かげにかけ入りぬ。あはれ美はしき姿は、時雨に染められて、いよ〳〵色そふ美はしさに、心とられて、おのが衣のぬるゝをも、打忘られてなむ。

大谷美子

昨日にて降りしきし雨もやみ、秋の日も、今日あすと成りぬれば、さすがに名残惜しき心地せらるれば、友どちうながして、あたり近き山路さ

して出てつ。常はさがしき道も、今日は苦しうもおぼゑず、やゝ深く、わけ入るに、谷水の紅なるまで散にけるは、此の程の嵐のためにや。はた、此の河に添ひ上りなば誘はれし宿の主をや問れましと、猶わけ入るまゝに常盤に交りて、あな、めでたとみゆるか、只、一本あり葉のみかは、梢迄も折られてあり、誘はれし宿の主とは、はた、之ならん歟多あるより、更に目ざめする心地して、いと興あり、又、かなたの岡にはこきうすき打交はりて、山姫の織り出しけん錦のひらばりとも覺しき瀧に、糸引たらんやうなるは、清水の流るゝなるべし。其の景色の妙なること言も及ばず。なむ折しも、俄にあやしき雲の出できて、大雨さへ降りいで、いみじうしくるゝに、立寄らん影だにもなくて、ひたぬれにぬれぬ。されど歸らんともせで、かなたの岡の時雨に、一入めもあやになりにけるを、あかずめてあへり。家にかへりしは、燈つくるほどのころなりき。

河方喜代子

秋もやう〳〵ふかく成行くまゝ、白霜もおきそはりぬれば、紅葉山のもみぢやいかにおかしならん。見まほしうおもひ立ちて、妹とわりこの用意なくして、出立ちぬ。みちすがら、そこはかとなく木々には、紅の花をさかし、中にはみちもはかさらぬがちに、彼の地につきぬるに、妹とも〳〵、何の言の葉もいでず、只あをのきにのみ成て、山かもみぢか、紅葉か山かと、二人して、異口同音に、發言せしは、一入おかしく、其のうれしさは、言ふすへ知らず、限りなき楽しみにてなん。しばし、見とれてぬる間に、何所よりか來たりけん、くろ雲おこり、雨、俄にふり出ぬれば、はじめて、われに、かへりたる如き心地せられて、一二度いそぎ手をりて、そをかざして、家路にかへりぬ。たゞ其の折にふれ來たりめぬる雨の、いと心うききわみと中々忘れがたうてなん。

齊藤みさを子

頃しも、秋の紅葉さかりときゝて、二三の友人と、外川に紅葉見に出てぬ。山のたゝずまひ、川の流れも、いとをかしかるらんに。瀬の川の紅葉、霜に染りて、から紅を織出し、秋風にさそわれて、さながら、人に

あひたいするかごとし。木かげに至れは、數多からん、木の子など、生ひ出でゝ、其の美事なる事、一として、人の目を、喜ばしめざるなく、こゝにをいて、友人は、嶌々に、歌なとを作り、何心なく遊びけるに、此の木かけ間より、村雨のはら〳〵とふり來りぬ、あわれ、この雨よ、此の日一日たに降らされば、と、うらめしく思ひ侍り、かく人の太切なる光陰も、一寸たにまたす、過る事、ゆめよりまさりてなん。されば少年は月日ををしみて、よく〳〵勉めざるへからず。

岡田春子

秋も、やう〳〵深くなりて、虫の音もあはれに、身にしむる折から、びとり文机のもとによりそひて、文よみゐる程に、門の戸、あわたゝしげに、打たゝくは、例のしたしき友なりけり。打みるより、今日は、もみぢみにといふに、とる物もとりあへず、いそぎ出て行きぬ。都にては、名ある瀧の川へと行くに、こゝもかしこも、さながら錦をちらすかとおぼゆて、こきもうすきもとり〳〵に、紅葉したるさま、げにいはん方なし。下には、小川ありて、かげをうつしたれば、仰ぎても俯しても、あかぬ心地せられて、またなくゆかし。暫しいこひゐる程に、あなうたてしや、今まで、花やかにてりあひし日影、俄にかくろひて、忽ち、雨はふり出でぬ。實に、かはりやすきは秋の空のならいとはいへ、あまりつれなき時雨のあめや。心あれば早くやみてよなど、つぶやきつゝ、稍をみれば、ぬれそぼたちるもみぢ葉の、一しほ、色ふかくみにてゆかしさ得もいはれねば。雨も心ありて、ふりしにやあらんと、今更に、嬉しくて、ぬるゝ袖さへ、いとはしからぬも我心ながら、いとをかしうなん。

佐々敏子

をりふしのうつりかはるにつけ、人のめではやすもの多けれど、秋の紅葉ばかり、とり〳〵をかしきはあらじ。ひと日、文よむ友に誘はれ、日頃のうさをはらさんと、紅葉見にといでたつ　・遠くもあらぬ路なれば、程なく思ふあたりにつきぬ。と見れば、昨日の霜にそみたる紅葉、あるはまたく、あるはなかば、から紅に色つきて、其の美くしきことたとふるにものなく、遠きものは、赤き雲の空にたなびけるが如く、ちかきものは、錦にしきの木にまとへるが如し。げにや、唐國の杜樊川が、「霜葉紅於二月花」といひけんも、さることゝ思はれたり。をりしも、秋風さとふきたちて、雨さへふりいでぬ。このまゝかへらんも名殘惜しと、とある木陰に入りて、ありしに間もなく雨もはれゆきて、夕日かげ、いとあざやかにさしそひければ、霜にあひて錦を裝へる紅葉の、きさらぎの花にもまして、紅なるが、何れもまばゆきまでに照りそふうるはしさ、みる人をして、さながら仙境に遊ぶかとうたがはしむ。かくて、夕風、身にしみて、またもや、雨の二ッ三ッ落ちきたりければ、やがて、共々に家路にこそはいそぎける。

市川さとる子

けふみずば、こむ休日の待ちどほしう、朽葉とや散らむなど、親しき友の誘ふまゝ、定めなき折りとて、何となう、危ぶまれし朝空の穩かになりぬるものから、そこはかとなく、山林をたづね入りぬ。秋の色香、今眞盛りにて、朝ゆふふりつもる露霜に、世のうさやそみけむ。あやうげにひろごりたる老木は、早一とふたばと散りそむるも、いとゞかなしういひ知らず袖ぬるゝかな。木かげに世はやすく、未だ、秋のあはれも知らぬらし、若々しき、一ともと楓の覺束なくそめなしたるなど、さりげなきながめに、時やすぎけむ、雲のたゝずまひたゞならねば、驚きかへりくる程、里はなれたる一つ家に、かしぐゆふけむりの、思ひなつかしう招ぐがごと立ちのぼり、手に取るやうなるを、一としきり、すさまじうふりきて、さすが、裾ふみ亂さむはたしなむべき女の、なか〳〵はしたなう、心のみせかるゝになむ。晴るゝを待ち間も、心さへしめりゆくやうにて、かうもわびしきを、もしや、風吹かましかば、いかばかりにか。さるにてもあまりにあばれかゝりぬる、老木の涙にや優しう覺ゆるにぞ、あはれ、梅櫻の匂ひありなむには、そぼつ袂の雫も、色くれなゐの移り香に、好き家づとならましを、何事もあはたゞしく、あやなき雨かな。折るとしもなく、かざしの花に、手折りしとはたゞの思はずみいでゝ、飽かずをしう、けふの遊山を、文につゞらばやと、興がりぬるも、ふたりのあひだにこそ。

村田よし子

秋の空いと定めなければ、雨具どもてゆけかしと、母上よりいはるれど、朝よりてりつゞく日影に、山のたのへも、晴れわたり見えければ、教へをもいましめたまひしをもきかで、親しき友と、某山へ紅葉みにゆきけり。野こえ川こえ、行くこと半里ばかりになりぬる頃、萩のうはかぜ音たてゝふきければ、そなたをうち見れば、北の風、いつしか雲をとばすことしきりなり。されど、夕方迄はふらじなど、あへれくも、ひとりさだめして、山にぞつきける。峰に麓に、あはれ、いかにしてかくうるはしうは、にしきおるらん。山姫の手わざの程ぞうらやましき、一ひら二ひら、袖に散りかゝり、粗なる衣さへ、にしきとまがはれてをかし。時しも、雲いと近うなるかと見る程に、霧と思ふばかりの細雨ふりきぬ。いざぬれぬまにとて、友の手をひき、松の下かげにたゝずめども、雨ますく\強うなり、滴る雫さへ、袂をぬらしぬ。出つるとき、母のいましめをもきかで、雨具だにもちきたらざる、其報にや。げにたらちねのいはるゝことは、いさゝかのこととて、おろそかにきゝ流すべきかは。

白石正子

きさらぎの花よりもと、古の人のうたひし梢をたづねんは、那古山あたりや、その處ならんとて、友どちとつれて、ひろすぐるころより、出で立つ。行くこと一里あまりにして、富浦に出で、こゝより車を下りて、かちよりゆく。此のわたりより、こゝろざす處なれば、まづ見わたさるむかひの森は、皆紅葉して、互に美をきそひ艶を爭へるさま、ゑも謂はず。山の頂にいたれば、山々の紅葉は、さながら錦をかけたらむやうなり。折しも、さつと吹く風につれて、雨しげうなり來ぬ。友なる人の家にかけ込み、辛うじてしのぎぬ。しばらくにして、やうく\、雨やみたれば、日の暮るゝ頃家にかへりき。

佐久間八重子

ある日曜に、山里は今紅葉のさかりなり。幸、天氣も朗かなれば、野わきせぬ間にいざ來給へと、増間なる友よりいひおこせたれば、直に思ひ立ち、二人の友垣をもうち誘ひゆきぬ。瀧田の村の端まで車を走らせ、そこより、下り立ち、袖うちはへて行くほどに、右も左も、山又山にて。今をさかりのもみぢの色は、實に二月の花とこそ見ゆれ。松柏などの常盤木の、其間を綴り合はせたるは、さながら赤地に緑の綾を織り出だしたらむやうにて、其艶なること、ゑも云はず。長く連れるは、錦の幕を引きはへたるが如し。たかく聳ゆるは、錦の衣をうちかけたるが如く。其の外錦の旗の如き、錦の衣きたらむ如き、とりぐ\面白く打ち興じつゝ、いつしか二三十町も來つらむ。折から空もやうあしうなりて、ポツく\と降り初めければ、打ち驚かれて、皆々友なる人の家をあてに、ひたばしりに走りしが。習はぬ山路とて、漸くかけ込みし頃は、しとゞにぬれぬ。されど、友なる人のなさけによりて、衣かへなども、しばしいこふ間に、雨もやみぬれば、紅葉の色は、きらく\と光りを添ひて、又、一入の眺めなりけり。立田の姫のけふのもてなしにや、今は中々にいとうれしうなむ。

河原芳子

ある日、いとまえたれば、近きわたりの紅葉見にとて、やゝ曇りたる空うちながめつゝ、友垣二人三人とものしぬ。やうく\、たどりつきて見渡せば、山姫の手すさびに織り出たらん、紅の葉は、峰にも、麓にも、照り匂ひてまばゆく、春の花もえ及ばぬさまいとめでたし。紅葉は、濃きもよく、淡きもよし。水にうつりしは、趣深くあれど、常盤木に交りたるは、またなくうるはしうこそ。あかぬながめに、古歌どもうたひ興じて、かへさもしらずさまよふほどに、一むらの黒雲時雨をともなひきて、ばらく\とおとさへきこえぬ。いかにもせんすべもなく、紅葉の枝の立ひろごりたる下陰に、身をよせつ。ぬるとも花のといひけむ、古人の心になぞらへたるもおかし。梢よりふり傳へて、落つる雫の色あるにぬれし衣の紅にそみもやせんかなと、なかむるもおかし。とかくする間に、時雨は南の方にすぎゆきて、はづかに殘る夕日の影の、ぬれし紅葉にてりそひたる景色は、いひしらずうるはしうて、また一しほの興をそへたきり。

河村君子

時雨がちなる神無月ににあはしからぬまで、日影いとめづらしきまゝ、この秋のみを、などか、あだに過さんとて、神路山の奥ふかく紅葉見に出でたつ。五十鈴川にそひて分け入るに、巖の水にあらはれたる、山菊にやあらん所々に咲き亂れたる、えもいはぬ眺めなりけり、されど、心は紅葉にのみこがるれば、かの山菊は、かへさにこそ折らめと云ひすてゝあたらしけれど見す。ます〱のぼれば、常には、かれがちの谷も、此頃は水滑らにて、紅葉の二つ三つ流るゝに、奥山おもひ知られてうれし。からうして、山のはらに出でしに、紅葉ちしほにそめかへりたる目もあやに、朝日に匂ふ山櫻も、これにはと思はるゝに、二月の花よりもと詠じたるは、此の唐紅に醉へるにや。滋賀の奥山林間のためし、さては桃源の故事さへ思ひいでられ、いとおもしろく興まだつきぬに、雲俄に起りて、いみじう暗くなりゆく。今朝の空景色夢の心地せらるれば定めなき此頃かなと、かごちつゝ見あぐるに、はしたなく、時雨さへふりぬ。いそぎかへるほどに、大きなる木あるを見つけ、しばしその蔭に笠やどりをと、たのむもせんなく、なかば散り過ぎて、雨たまるべくもあらず、いとわりなし。今は足を空に、かへさには折らめとたのみし山菊も、えさらで歸りぬ。

田中すゞ子

瀧の川の紅は色付きぬ。例のたれかれいざなひて、こを見がてらとぶらひ來よ。よき折なればと、そが近き邊すみ給ふ師の君の、ふりはへて仰せ越されたるに、いと嬉しく、とみにもと思ひもせしかど、あやにく降り出でし時雨の晴れ間なきに、心ならず一日二日を送りぬ。立ち迷ふ浮雲の、名殘なうをさまりしといふにはあられど、きのふ朝の程に雨の止みしなれば、道もおほかたは乾きたらんになど、誘れて、契り置し友の、待ちかれてそゝのかし給ふに、さらばとて出で立つ。朝まだき露たわわなる小草分けんも、おかしかる可きに、いそがぬ道なれは、かちこそよからめとて、皆々身かざり裝ひたるものから、へだてぬ中の、なほ心もかろらかに、よしなしごとなど語りつゝ行く程に、足のつかるゝをも覺えず。いつしか、例の柳の一本うち招く門邊につきぬ。やがて案内を乞はんとせしに、童の笑ふ聲いと高う聞ゆ。さては、又も里のうなゐ等を集めて、戰物語にもやふけり給ふらんを。驚かし參らせんは本意ならじ。先づ紅葉見て來んと。瀧の川に至りぬ。千はやぶる神無月も、未だ二十日ばかりなるに、時雨の染め殘したるが、唐紅の色こき木々の中に交れる、げに織りはへたる色のうるはしさも、一入にてなん、かけうつす河水さへいと滑らかにおぼゆるを、そが面にかけ渡したる古き橋の上に、杖をとゞめて、彼方此方を眺むる人の姿の、いといとうみやびなる、繪にもかゝまほしき心地ぞするや。いこひ給へ。やすらひませなど、所々に茶店出して、たをや女のほんなる聲によばはりつゝ、袖引かんばかりなる、少しうるさきまでなり行きゆきて、小高き所に足をとゞめ、わりごなど取出しつゝ、つでなれば、こゝより、かの名高き權現の瀧をもとはむ、今はさこそ水の音のすみまさりてあらぬなど、語り合ふ程に、み空の模樣俄に變りて、いふせき雲の足早う此方へ來るよと見るまに、たちまちはげしき雨の、よしずとやらんの間より降り入りて、我等が腰うちかくる、床几にかゝりぬ。かゝるは此頃のならひなればやがてやみ侍らん、此方に暫し待ち給へと、女主のいとねむごろに、いふまま奥の方に入りて、空のみうちまもれど、中々に止む可きけはひも見えず、詮なしと思へど、かゝる所なれば叶はず、今はせんすべもなし。程遠からねば、師の君の御許にこそと、少しく小降りになるをまちて、此庵を出でぬ。さらでだにたどりかたき細き道の、かゝる折なれば一入にて、ともすればたほれかゝるを、小笹にすがり枯枝を杖となし、やうやう少し廣き道に出でし折しも、よしありげなる人の簑笠によそほひたるが、ふくよかにこえたる、十歳ばかりの童二人を具して來かゝるあり。今日はしもかく時雨れぬれば、木の下には人もあらまじ、いかで色こきを一枝もかなと、一人の童のいへば、前に歩めるは頭をふり、いな〱かまへてさる事ある可からず、訪ひ來む人をまちがほに、水の鏡にかげうつしつゝ、粧こらして日ごとに、紅ひふかうなりまさるを、手折るは無下にいやしきわざぞ、たゞ見るのみを家つとに、なすこそよけれ

など語りつゝうち笑ふさるはこの雨を、おかして紅葉見にとや、ものすらん、心にくきわざする人々かなと、思はずふりかへれば、暫し待れとよびかへし給ふは、師の君の御聲なり、打ち驚きつゝ引かへせば、この雨におそれて、かへさをいそぐにか、いひがひなや、紅葉は雨にぬれたる折こそ、殊にうるはしくもふかる可きに、色ます梢の栞と思へば、ぬるゝとも嬉しとかや、かの猷國朝臣も、いはれたるにあらずや、歌まなぶ人に似げなき行ひや、など戯れて例の心地よげに、うち笑ひ給ひ我等もやがて歸らんに、先づ行きて息ひれ、庵には留守居の老僕一人のみなるをとまめやかに仰られて行きすぎ給へり。ひた走りに走りゆきて、門邊よりおとなへど答ふる人もなし、袖を垣めぐり木戸のすきより、さしのぞけば、かの老僕は、築山のもとにたゝずみて、何やらん、ひたふるに、眺め入りたる樣のおかしきまゝ、皆々打ち笑ふに、驚き見返りて、いそぎ枝折戸おし開きて、むかへ入れぬ、雨ふる中にたちて、何をかながめ居りしと問へば、露霜のやつれは更に、白菊の花なれど、昨雨にはさすかにうちまけてや、ふる色にうつろひ行くが、あはれなれば、思はずながめ入りしといふに、是頃はいどう、みやびにはなりつるよと。一人の友の仰られしに、かゝる君に仕へまつる身の、年久しければ、おのづとならひおぼゑ侍りてと、むくつけき言葉に語るもおかし。折しも軒端にむれてさへざる雀の聲のいと樂しげなるに、障子おしひらき見ればいつしか雨は止みぬ、皆々はし近くいざりいでゝ、そが飛び交ふをながむる程に、例の童の聲近う聞ゑて、師の君歸らせ給へり。

泉　さい子

親しき友と、近きあたりの、山にいでゝ、紅葉見はやと、野路のほそみち踏わけて、心ゆく山にたどりつきぬ。許より、名ある地にしあられはいからしむと、あやふみしにはかへて、見わたすかきり、木々の梢の紅葉せぬはなく、こなたの山にはこき紅葉のつやゝかに、彼方の山峰には、或はこく、あるは淡く、思ひ〱の色にほこるさま、げに山姫の織出す秋のにしきてふことの葉にもれす、いとうるはしきながめなり。奥山深くたどり行きぬ。折からさと吹くる風につれて、雲のゆきかひあわたゞしうなり、村雨のふりそめぬ。あなやと友のさわけるをとある紅葉の影に立よりて、「村雨はいつかはれなん晴すとてむなしくかへる紅葉狩かは」なと口すさみ、しはしやすらふうちに、やう〱、そらもはれぬ。いさとてまたもたちゆけは、村雨にぬれて、またひとしほのながめをそへたるも、はやくるゝにちかし早歸らんと、友のいさかしたつるをしはしとて、「村雨の露に色ますもみち葉のこのもとにいよゝ立うかりけり」とよみて、名殘をしくも家路につきぬ。

林　文子

きのふけふ、遠近の紅葉盛りのよし聞つれば、一日、いづこにかと思ふ折から、友の許よりそゝのかされぬ。何かはためらふべき。朝まだきより人々の許にゆきぬ。行くてのさきは朝霧深く立ちこめて見ゑやらず。やうやう日の昇る頃空はなごりなく晴れ渡れり。野邊には、秋の色香をきそひふじはかまいろ襲へ、女郎花の露になやめるさま、又あはれなり、行く程に、いつしか天神山につきぬ。今日を盛の紅葉ばは、流るゝ水をくれなゐに染めいだしつゝ、往きかふ小女の袖に比べて、ほころが如く見ゑけり。遠近の人多く集ひ、うたひ女うかれなどば、醉ひしれて、こちたくうたひさゝめくさま、腹立しきまでにぞにくきや。さるほどに、秋の日の空頼みがたく、俄に降りいでければ、人々いそぎ家路につきぬ。されど、我等の一むれは、雨中の紅葉又一しほとて、ある荒れはてたる寺にいりぬ。暫し雨やどりして、見渡すかぎり、降る雨に、紅濃く又淡く、染めなす秋の錦こそ、春の花にも劣るまじけれ。しばしが程に又雲はれて、あたり靜に、きよらけく、ながめ飽きせぬ景色なり。さはいへいつまでも居らるべきにあらねば、心殘して家路につきぬ。そのかへるさ夕日紅葉にてるを見て、「雨晴れてしつくしたゝる梢より夕はゑすなり秋の夕くれ」あゝ、たかきもいやしきも、この紅葉のもとに、樂しく遊ひたはむるゝは、めでたき御代の、惠みになんありける。

北原　季子

降りつゞく雨の、今日も亦降ることかと、朝まだき雨戸おしあけて見

れば、東雲の空いとあかくして、淺茅が庭も、露の玉しきわたしたるかとうたがはれたるが、風に打ちみだるゝも、あはれ深しや。さるからにとみに思ひ立ちて、今日の此日をとて、親しき友ひとりそゝのかして、用意もそこ〱、瀧の川にと物しぬ。

さすがに其の景色今更のやうなれど、高き岸への紅の色げに深しと下打ち見れば、水底にも、今をま盛なる色をなんあらはせる。かりのかけ橫行きかふ人かげさへ、水面にうつりて、其數を知られず。枝には、いひしらぬ景色を、短册にものしてつるしてけるが、徐ろに吹く風に打ちゆらぐさま、何にかたとへん。しばし立ちゐてながめけるまに、友は早筆を手にしたり。己もと、短册こひて、たきの川としるすまもなく、はら〱と音しぬ。さてはと見るまに水くきのあとさへ流れ行きぬ。あな〱とばかり二人はあはてふためき、漸々に茶店にいりて、小やみを待受くれど中々にはげしくて、雲の行きかひ只ならず見ゆ。折しも、日ははや西にかたむきぬ。やゝ小やみになりにたればとて、そこを出づ。己がじゝハンケチなど頭に戴き鳥飛山の方差してゆく。道すがら雨なほ降やまねば、友は彼の道灌にはあらねどもといひながら、ある門をたゝきて傘をとこひぬ。織機をりかけしも女子、聲もくもらで手折る、山吹の花はおはざれどとこたふ。ゆかしき人のわびすまゐかな。そがやれし籬もそゞろにたふとく思ふがまに、いつしか王子ステーションにつきぬ見れば友と二人はしたるばかり雨に打ちぬれてけり。

福岡郁子

敎の庭にはさるものもなきに、幼き子等が。おのが掌の樣なる楓のもみぢしたるをもてあそぶ。いづこよりと問へば、岡の上の小高き處にゆびさしぬ。いと嬉しくて、晝休みの間に、いざきたまへといへば、よろこびて皆しりへに從がひたり。折しも、み空曇りて涼しければ、傘もさらで心やすし。丁餘にして、立ち列ぶ木の間より、心もとなく見ゑそめたり紅葉狩り松の紅色もおもしろしなど、口すさみて行きゆけば、只一本なれど、みき大きく枝さかゑて、二月の花よりも實に紅なり。大井川立田山などいかばかりならんと、一本の楓によりて見しこともなき名所を思ひわたす。ゑずてたゝずむほどに、なりしも、ばら〱とおとなひてもりくるしづくは、雨なりけり。一人ならましかば兎も角もあらめど心にまかせねば、時間をまつほどに、日はなやかにさしいでたり。紅葉の色は得もいはずてりあひたり。時うつりぬれば、いとをしきわざされなれど、敎の庭へ歸りぬ。ぬれねずみかへりぬなど、いふ人もありけり。

日黑佐喜子

頃は、霜月末つ方、親しき友どち打集ひ、外山に紅葉狩せむとて、朝まだきより、霜を踏みて出で立つ。狹霧深くも立ち込らし麓の杉むら、打ち越ゑて、あへぎ〱登る程に、木々の梢、あるは淡く、あるは濃く、取りどりに染めなしたる、實に、龍田姫の心盡しぞ知られける。かくて、山のなからにて、廣く平かなる岩根の上に莚を設け、皆、團座して、割籠打ち開きなどす。折柄、霧やゝはれたるに、向ひの峰を見渡せば、こゞしき岩根聳ゑたるあたりに、八重たつ紅の雲見ゑて、そが絶間に、一筋の瀧つ瀬かゝれる有樣は、あはれ、何にか例へむ。筆にも、及び難し。何をがなと打案じぬれど、よき詞も浮ばず。とかくする間に、何時しか、日影西に落ちて、梢を照らす夕映の、實にうるはしとも美しや。折しも響く入相の鐘に、今はとて立ち上れども、歸らむ心地もせず。「から錦飽かぬ紅葉に暮るゝ迄たゝまく惜しき秋の木のも」と、昔の人の詠めりしも、宜なりや。せめては、一枝、家苞にもと手折りて、下り路につく時、頂のあたり、俄は雲騷ぐ見ゑしが、忽ち時雨さと落ち來ぬ。皆、足を空にして、只走りに走りて、麓の茶屋にかけ入りぬ。頭も衣もしとゞに成りしが、手折り來し紅葉の枝の、濡はて、一層色添へるこそ、嬉しかりしか。「濡れつゝも恨まざりけり中々に濡れて榮ある折と思へば」

小野田てふ子

あつしあつしとひぶるまに、はや神無月のなかばとなりぬ。日毎に秋の氣色添へもてゆく、いとあはれなり。其方の森には、鵙の音もいと高し。打見やれ、木末の一つらも色づきそめぬ。若葉のかげ打ちながめて

さは、すゞろに夏のゆく方をおもはる。きのふけふいさよく晴れて、こゝろもめづらしくすが〳〵しかりければ、折りしも學の友三人四人訪ひ來りぬ。ちきりおきつる事のありてなりけり。いざ打ちつれて。瀧の川にものせむさて家をいでぬ。今まや盛りなり。風のさと吹きくるに、蝶かさばかり亂れてちる他のさま、上は、たゞ錦を布けるやうなり。秋のそらの定めなさよ。なごさも、はれたりしを。雨ふりいでぬ。人々あはたゞしく、皆かなたこなたに立ちされり。いさなごりをしかれど、又うちつれて、家路をいそぎてかへり來ぬ。

大谷津峰子

草葉にすだく虫の音も、ほそりゆき、夜半の砧は霜夜の月に音さへて、何處もさびしうなりまさり行く頃、君さ共に御寺にまうでぬ。其階ろさ、ある所に至りたるに、遠近の木々の梢は、置きまさる霜に色づきて、あるは紅に、あるは黄に、さながら錦をりたらん如し。其傍に何處の深山よりさき出づらん。一筋の清き流あり。岩にせかれて水晶ちらしたらん如し。そがふちにのぞみて、もみぢばの水にうつろふ風情、吹くに風誘はれて木の葉のちり行く様など得もいはれず。實に言にもつくしがたしといふは、かゝるをやいふらむかし。秋の空のならひはうたてものなりけり。村雨の降り出でたるに、雨具さへ、調へぬは如何はせんさわづらふ、かなたに少さき家あり。走り行きてへらすふ。しばしの間に、空もはれ渡りければ、いそぎ出で立つ時に夕日は雨にぬれし紅葉をてらし其うるはしさ、又何にかたさへん。日も葉に入りなんさすさくかへらんさ、母君のの給ふまに〳〵、歸り路をたどり遠くはなるゝにしたがひ、又一入の眺を添へ、一足歩みてはかへり見、二足歩みでは又かへり見、漸家に歸りしは、燈火のつきつる頃なりき。

竹内政子

秋もふかうなり、千草もうらがれて、やう〳〵さびしく成ゆく頃、隔てなき友垣の二人三人にそゝのかされ、紅葉の園にものしつ。田づらの小徑をわくるもいさたど〳〵しく、露もまだひぬ草の葉に、虫の泣きすだくも、振りすてながら思はれ、霧まだはれぬ木々の梢に、風の吹き渡るも身にしむ心地ぞすなる。行き〳〵て、さかしき山路をたどりつゝ、女郎花などの、やう〳〵吹きうめたる、あるは、外山の鹿の聲など、いさ物ゆかし。やゝありてすこし打ち晴れたる處に出づ。こゝなむ、紅葉の關にはありける。緑こき松さ枝をかはせし梢の、ゆら〳〵さ打ちなびきたるかげには、千代の秋をかけつらむさみゆ。あるは、落葉の下行く水にうかびたる様、げに鹿の聲もやどれる心持するも、亦似るものなくてめでたし。こゝさらめきて取りつくろへるもなければ、おのづからなる木々のけしき山のたゝずまひなど、描き繪にもかゝまほしく、あくこさを知らず。唯、足の進むにまかせて、あくがれありきける程に、こゝさある柴垣の下に出でたり。立よりて伺ふに、こは富家の別業にやあらむ。さまで廣からぬ庭の景色ながら、ついぢをめぐらせる水の流、おきせる石のたゝずまいなど、いさみやびやかなり。たちさりがたくしばし佇り居ければ、齡の頃十餘り五つ六つなる乙女の、玉琴の塵打ち拂ひ、しのび〳〵に、掻き鳴らす妙なるひゞきに、梢の葉もさゞりぬべくぞ思はる。空かき曇り、葉末の玉水、間ごほに落ち、住る捨てし蜘蛛ものいさに、玉つくけしき、いさ細やかに降れるが、衣濕せども降るさは見ねす。やがて、はら〳〵さ大きやかなる時雨の降り出でたれば、こは如何にさも來し山路をはせ下り、睦なる友垣の許にかけ入りぬ。頻に降りて物音も聞ねず。人々しばし物もいはでうち守りゐたれさかひなしや、やう〳〵夕暮近くなるまゝに雲らすらぎ、なごりなうはれ渡り、小島などの、庭へ躍りいでゝ餌ひろひ、のきの玉簾あさたねげば、いさ〳〵嬉しくて、けふのたのしき物語など打ちいたし、賤が伏屋にかへりつきぬ。



孝明天皇御遺德

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵稅金四錢

恭て按ずるに先朝孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尙湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せむ先づ**御一代**の章を揭げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て先皇の英明絶倫なるを概說し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷掃攘の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を敍し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚た厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て先帝の聖德を頌し奉る

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

文科大學教授兼陸軍教授從六位内藤恥叟先生序
文科大學教授從五位栗田寛先生著

天朝正學

全壹册

定價　參拾五錢
郵税　四錢

我が神聖の大道は振古以來　天祖の神勅のまゝに天地の間に燦然として千萬世を經て曾て泯滅することなく忠孝の大義永く人心を陶鎔し來りて宇内無比の國體をして益尊嚴ならしめたり然るに鎌倉以後名分明かならず降りて戰國に至り天下大に亂れ人々大義の在る所を知らざるに至る水戸の源義公夙に皇道の振はざるを慨し國典を修め神聖の大道を宣揚し烈公又大に之を發揮し以て明治の隆運を開くに至る其の功實に偉大なりといふべし栗田先生は水藩の碩學にして夙に義烈二公の遺意を奉體しこゝに此の書を著はし皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明にし學ふ所を知らめらる今本社之を活刷して世に公にし我が國家の臣子たる本分を全うせんことを忠愛の諸士に望み併せて史學文學者の參稽に資せんことを企望す

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

●紅塵庵俗禪譯●

富岡永洗筆挿繪數圖頗密畫無比極彩色口繪!!

四版

清風高節 秀美優雅

國の譽 獄の花（ひとやのはな）

●全一冊●

總クロース 金文字入

▲菊版美本▼

正價金五十錢

郵稅金八錢

神氣清潔なる一名士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に苦悶するに當り高尙優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇内に發揚し最名譽ある儀表の下に最清廉なる結婚を爲すに畢る斬新奇警高尙なる小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が清淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

▼▼▼▼▼▼▼試に本書所載の目次を掲ぐれば……

國のほまれ ひとやの花

目次

●第一回英雄の逆境上●第二回英雄の逆境下●第三回慈父の遺訓●第四回孝子の出世●第五回遺訓を守りて孝子榮達を辭し月に對して秋夜に双親を思ふ●第六回熱心事に從て奇禍を招く●第七回活眼の處女賢者の寃を救はんとす●第八回司直の官不直の判決を爲す●第九回萬死の罪四生を斷頭臺上に得●第十回天賜の使節善惡兩知人を招く●第十一回純良の君子獄吏の頑硬に苦む●第十二回情海の波瀾士女を漂蕩せしむ●第十三回情海波治りて夫婦の蜃氣樓を現はす●第十四回大願成就の山に登て失望の淵に陷る●第十五回萬難を排して少女意中の良人の爲にす●第十六回少婦氣焰を吐き一方に惡人を挫き一方に英雄を泣かしむ●第十七回寃枉の四人獄吏の暴横を憤り一打撃を加ふ●第十八回四人再び死を期し獄吏再び望を失ふ●第十九回少婦至誠神人を感動せしむ●第廿回古今未曾有の三大奇觀……

●發行所● 國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）

今般私費國語專修科を設け生徒四十名を募集す入學志願者は本年十一月廿四日迄に當校に願出づべし尚詳細は九月二十日の官報廣告若くは直接當校に就き承知すべし

明治卅二年十月

女子高等師範學校

轉居

牛込區市ヶ谷本村町二十七番地
市ヶ谷女學講習會内

師岡須賀子

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年十月十九日印刷
明治三十二年十月二十日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號新橋八八）　國光社

明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可

（印刷所　東京　國光社印刷部）